

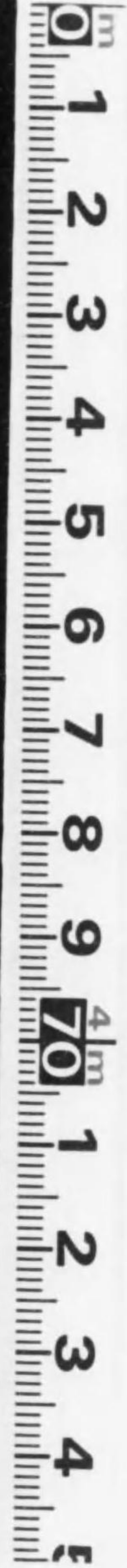
911.32-Mu71ウ



1200500756115

911.32

Mu71



始



2-1949

911.32

MV.71



現代叢書



925
253

目次

芭蕉論

新人芭蕉	五
路通と芭蕉	二
小説道の芭蕉	三
嗤笑	三
芭蕉庵	三
元祿の大家	三七
永い年月(三七) 挨拶(三七) 發句道(三八) 天の貢物(三九) 次	
郎兵衛について(四〇) 女(四〇) 句作(四一) 花屋日記を評す(
四八) 大凡兆について(五三) 季節の約定(五三) 風流(五三) 路	

通の俳號について…(五) 大新人…(五) 選料…(五) 短冊…(五)
「かびたん」の句…(五九) 理解…(六〇) 鶯の句…(六〇) 竹植ゑる日…
(六三) 「一つ家に」の句について…(六三) 擬芭蕉手簡…(六三)

金澤行脚と生駒萬子―「奥の細道」一考……………五

芭蕉と詩についで……………六

芭蕉句解……………八

元祿の春宵…(八二) お子良子の梅…(八九) 薦着てゐる芭蕉…(九三)

嵯峨の竹…(九五) 晝寝…(九九) 白菊…(一〇一) 秋の風…(一〇三) 野ざ

らし…(一〇四) 秋の霜…(一〇五) 秋の暮…(一〇六) 粟…(一〇八) しぐれ

…(一〇九) すとよ(一一〇) 蜻蛉…(一一一) 秋隣…(一一一) 秋の風…(一一三)

芭蕉…(一二四) 蘭…(一二六) 菊の花…(一二六) 秋の風…(一二七) 茸…

(一二八) 菊の花…(一二九) 木がらし…(一二九) しぐれ…(一二三) 行秋…

(一三三) 椎の木蔭…(一三三)

芭蕉と利休……………一六

眞贋の道……………一三三

蕉門の人々

凡兆論……………一三九

北枝の家……………一四八

○ 丈草と去來……………一五八

嵐雪……………一七〇

枯木の美……………一七五

骨格……………一七七

清閑……………一七九

漱石の發句……………一八一

句解

春の句抄……………一八五

田螺の句……(二五) 厭世主義の人……(二八九) 閨秀三家……(二九一) 老一
 茶……(二九四)

再び凡兆について……………一九九
 丈草の句について……………二〇七
 北枝の發句……………二一一
 一茶の發句……………二一三
 夜半翁……………二二〇
 千代尼……………二二四
 涼扇句抄……………二二六
 水扇……………二三一
 はるさめ草……………二三八

俳道襟記

發句道の人々……………二四三
 子規は生きてゐる……………二六二
 子規と「ホトトギス」……(二六三) 子規中心の俳壇……(二六六) 碧と虚の二
 つの星……(二六九) 俳句が短くなる……(二七五)

發句道襟記……………二七八

井月……(二七六) 阜月の蠅……(二八一) 歳末……(二八四) 「さびしさの底」……
 (二八六)

發句……………二九三
 静さ……………二九五
 俳道……………二九七
 詩と發句について……………三〇一
 遺傳的孤獨……………三〇二
 花鎖……………三〇三

菲の羹……………三〇五

俄人の發句……………三〇九

後書……………三二四

芭蕉襟記

芭蕉論

新人芭蕉

今にして念ふことは元祿時代に住んで居て、芭蕉が絶世の新しさを有つてゐたことである。その新しさは今まで二百年の彼岸に行き到き乍ら、なほ泉のやうな新しさを感じさせることである。大名物や大作家の何人も此の新しさの外のものではない、併乍ら、芭蕉の新しさはそのまゝ古く膠着しない柔らかな新しさである。大雅や鳥羽僧正の新しさは年を経るごとに、ひと皮あて剥れてゆく壯大な無盡藏の餘韻ある底力を有つてゐる、彼もまた星霜と板下の加はるごとに、水からあがる鴨のやうに幽寂でしかも新鮮である。

新羅焼や高麗が掘り出されても、いま窯から上つたものとしか思はれない新しさを持つてゐる。それにも拘はらず五百年の歲月はその古陶の精髓に丁々と滾れてゐる。此の二つの面、古くて新しい故になほ何百年かを豫約する光輝は、絶代の作家でなければ、稀代の大名物たる所以であらう。芭蕉が讀み捨てられて最早顧られない時代があつたら、その時は人類が此の土地の上に棲息しない時であるかも知れぬ。人々が此の土地にゐなくなつても或は芭蕉だけが、彼の俳句だけが、禿山の

上に残つてゐるのかも知れぬ。

元祿が古來稀なる西鶴の情痴を生んだことは、元祿年間の習俗の一面であることは多く人々の知るところである。そして芭蕉がその全然反對の、まだ何人も手をつけない掘出しものに寧日無かつたことも誰人も識るところである。しかし何人も氣のつかなかつたことは一介の乞食俳人たる彼がひそかに後世を信じながら、豁然とした何百年か何千年かを通じた境に住み込んで、ひとり寂しく眼を開いてゐたことである。「俳諧の姿いまより七度も變らん。」と云つた彼が、「我が俳諧の道は後の世も廢ること無からん。」と信じてゐたことは當然のことである。師を信じることの厚い丈草去來の徒であつても、芭蕉が何百年も後に生けるが如く論はれるとは考へ及ばなかつたことであらう。もう一と抉り約めて云へば或は芭蕉自身ですら恐らく何百年かの後世の、その壯大な光榮には苦笑を禁じ得ないであらう。彼もあらゆる名人の如く煩さげに世評の存外甘いことを輕蔑したであらうと思つてゐる。

芭蕉は時代に先立つとか新しがるとかといふことは無かつたらしい。彼はその氣質のまゝに時代と平衡した。その證據として彼が名人であるところの奇行逸話の類が奈何なる書物にも著されてゐない。彼の遺業の傍のものとして残されてゐるものは、可成に嚴肅な語彙と訓話の類ひ許りである。或は敬虔の情を述べたもので無ければ、溢美の嘆賞である。芭蕉と雖も失敗の逸話くらゐありさう

なものである。丈草の端肅、去來の老實、正秀嵐雪の溫雅は稀代の名人を傳へるに瑕瑾無からしめたものである。惟然や路通の飄逸をしても猶芭蕉を謬り傳へたことは無い。比較的高邁の器である其角でさへも、事、芭蕉の行狀に及ぶと自ら言を謹んでゐたではないか。

太平の代、元祿は西鶴芭蕉の二人の興味ある二面を抉り出したが、芭蕉は西鶴を評して淺ましく下れる姿なりと曰つてゐる。「或は人情をいふとは今日のさかしきくま／＼まで探りもとめ、淺ましく下れる姿なり」と云ひ、己が門に掟して「事は鄙俗の上におよぶともなつかしく云ひとるべし」と云つてゐる。芭蕉が西鶴を下れる姿だと云つたのは、彼の小説文章の意味もあらうが、主として西鶴の連俳の卑俗に當つたものであらう。最も新しい人情の科學者である西鶴と、自然の大醫である芭蕉とが、相容れなかつたのも興味がある。俳乍ら西鶴を容れない芭蕉は文章の旨い人ではない。あれほどの神韻漂渺の俳諧の奥まで探り當てた芭蕉も、文章紀行の類は綾を尊み飾ることに汲々としてゐて、西鶴の敵ではない。幻住庵の記や、奥の細道、嵯峨日記その他の紀行を見ても、一代の俳聖であつた芭蕉の文章として見ても大したものではない。皮肉の辛辣と洞察の達者な西鶴にくらべたら、今更の如く此の二人の道の喰ひ違つたことが首肯される。靜寂を慕ふ魂と、俗情にも組する魂とは、やはり根本から入れない元祿の二つの相異つた鏡であつたらう。一つは蕭條たる冬枯の風物の中に咲く薺のやうに幽遠哀寂で、一つは混沌の感情中に光る一個の露はな人情の獵人である。

併し芭蕉と雖も全然西鶴を容れないことはなかつた。人情の奥底を知つてゐた芭蕉の上に、なほ大西鶴があつたことは認めてゐたやうである。唯西鶴が嫌ひであつただけかも知れない。一日百吟を以つて誇る西鶴は、一句を練るに或は十日をも二年をも算へる芭蕉の粒々苦心の魂には近づけないのは當然である。「俳諧は時代を考ふべし」と云つた彼は、元祿の精髓の裏づけをあんなにまで叮嚀に仕上げたことは、今にして思へば芭蕉西鶴の二面相打つた、めであらう。

衣裳や器具や陶器の類にも新しい工風と運動と改革の起つた此の時代に、彼の新しさがすば抜けてゐたことは、何よりも芭蕉が爲人たる上に興味のあることである。

明ほのやしら魚白きこと一寸

(甲子吟行)

山路来て何やらゆかしすみれ草

(同)

梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉

(句選拾遺)

よく見れば薺花さく垣ねかな

(續虚栗)

枯芝ややゝかげろふの一二寸

(笈の小文)

春雨や蓬をのばす草の道

(草の道)

△「閑さや岩にしみ入蟬の聲

(奥の細道)

てふの羽の幾度越る屏のやね

(句選拾遺)

新薬の出そめて早き時雨かな

(芭蕉翁全傳)

これらの静さの中に充ちてゐるものは、生れた時からして好ましい古さを漂はした無二の新鮮さと優柔なその心とである。木の芽を指さきで捲り摘むやうな小氣味よい觸れ方で、靜かに凡ゆる風景や草木のシンを捲り摘んでゐる彼の手が、二三百年もつと先の分を摘み取つてゐることは、實に先の見通しが利いてゐて驚嘆に値する。この奥の方へ誰も進めぬ様に、進んで行つても何も摘み取れぬまでに、鋭い洞察を美事に刺し貫いて摘み採つてゐる。彼の歩いたあとは實際何も無いやうな空漠に等しい景色でさへある。併し彼だけが歩いて行けばまた何物をも得られる道のやうでもある。

○永遠とはついに何物を指差した言葉であらう。「閑さや岩にしみ入蟬の聲」の閑寂の境には定家も西行もまだ行き着いてゐない、此の風流は日本の古い詩歌道の極北であり、もうその外へは行けなくなつてゐる閑寂の地平線である。予らが此の境で僅かに嘆賞の呼吸をつくだけである。斯の様な奥と底に行き到くまで、人はどれだけ様々の心境の數奇鍛錬を経なければならぬか? — 「山路来て何やらゆかしすみれ草」の可憐、その可憐に心をとめるものは、人生の垣根にさく仄かな薺の花にも心そゞぐ雅人でなければならぬ。かかる平凡である爲に閑寂された「よく見れば薺花さく垣根かな」の景色は、時に最大の景色をもしのぐ可憐を併せ持つて居る。蕪村の壯大がそれ故に私には懐しめぬものがあるのも往々素大で馴染めぬためである。最も微かなものには最大を餘してゐない。

芭蕉が求めるものは何時も「枯芝ややゝかけろふの一二寸」の幽さである。得も云はれぬ暖さの廣がり、遂に眼前一二寸の景色に止つてはゐない。絶後の大風景をも併せ嚙んでゐるところの、最後にして最大のものの凡てが彼である。何たる浅春のいたいけな姿であらう。三たび此の句を讀んで邪氣なき姿に接し得ぬものがあれば、遂に藝道にあやかれぬ俗流の徒であらう。

自分はいま更らしくにほひやさびしをりを説かうとは念はないが、彼の清冽さは何を擱いても心を打つてくるものである。何とも云へぬ清朗さは神々しい初々しさを以て囁くのだ。「明ぼのやしら魚白きこと一寸」の明ぼのは元祿から天明を抜けて明治へ一と走りに行き着いてゐる。その間何ものも遮るものすらない、蕪村も一茶も又子規も渺たる一雲翳をすらかさせぬ。子規が芭蕉を採らず寧ろ、蕪村の壯麗を選んだのは、當時の流行であつたと云へ、子規の俳道にさびの絶無であつた所以である。病褥に多くの年月の苦難を経た子規は當然芭蕉を取るべきであつたのに、健實な蕪村の文學に心を容れたのは彼が病理的にたよるべき人生の活潑を求めてゐた所以であらう。彼の發句が潤達なる自然を健康なる草木にのみを腐心したことや、斬新を求めて蕪村を見出したことなど考へて見ても、遂に古い新しさに辿り着けなかつたことは、何たる彼の焦躁であつたらう。「風呂吹や小窓を壓す雪曇り」は蕪村を一步も出てゐない。怎麼にもがいても蕪村をぬけられなかつたことは、遂に彼がさびる機會が無かつたからである。性情の中にさびが無かつたからであらう。「枯芝や

やゝかけろふの一二寸」にまで、彼が行き着けないのは、蕪村がなほ芭蕉に及ばざると一般である。子規がさびしをりを心の養ひ得た人であつたら一層彼は後代を問ふべきであつた。非常な情熱家であつた彼の情熱は枯淡を外にして生活したからであるとも云へる。又彼は彼らしい枯淡にのみ辿り着いて、芭蕉の高さへまで行きつけなかつたのであらう。

新薬の出そめて早き時雨かな

松風の里は靱するしぐれかな

芭蕉

嵐雪

嵐雪は蕉門の内でも特に温厚な男である。「松風の里は靱するしぐれかな」の静閑さを一步踏み込んだ芭蕉の牙えは、もつと時雨の何者かを擱んでゐる。嵐雪の道具立を踰えた彼の直接的な新しい觀照は、殆ど比較にならないくらい効果を出色してゐる。嵐雪のよたよたな腰の弱さに比べたら、何と云ふ把握力の強さであらう。しかもその強さは一寸動きさうもない巖丈さで、永生動かないところのものである。

路通と芭蕉

路通が芭蕉を賣つたユダだとしても、彼の眞實の心は師叟を怖れ震へた心で、絶えずその僞筆を夜半の小机の上に試みたものであらう。彼の狡猾しい心を以てしても、なほ芭蕉の心を有難いものとしたに違ひない。或は去來丈草の徒よりもつと芭蕉の何物かに觸れてゐたことは實際である。苛責と良心とに路通は絶えず師叟に謝りたい心を有つてゐた。悔ひ改めたユダの心は恐らく路通は始めから有つてゐたのであらう。しかし彼が左うしなければならなかつた生活は、芭蕉の慧眼を以つてすれば疾くに氣が附いてゐた筈である。

師匠の僞筆を賣る事などは今の世では何でもないことである。路通の僞筆が世にそれ故に珍重されてゐるとしたら、路通と雖も一層の赧面羞恥の情に慚死せねばならぬ。蕉門の師弟は温厚でなければ典雅從順の徒の集りであつた。路通の如き異端者は一指にのみ止るくらゐである。路通を破門した芭蕉はいち早く路通の心を射透してゐた。だから路通を認めることに少からぬ苦痛を交へてゐた程、芭蕉と路通とは近い關係を有つてゐる。

芭蕉が初めて路通に會ふたのは、行脚の折、草津守山の或る貧しい茶店の傍に憩ふてゐる一人の男に茶菓子を振舞ふたのが、師弟交誼の初まりであつた。この一見、双子の袖無しに木綿の袋を提げた乞食體の男は、路傍に睡る男としては餘りに卑しきから脱け、洒落で少しばかりの人品も窺へるところがあつた。男は芭蕉に一首の和歌を紙片に書いて示した。

露と見る浮き世を旅のままならばいづこも草のまくらならまし

路通

芭蕉は乞はるゝまゝに、その男に路通の名を與へ、爾來風雅の交りを約した。路通が芭蕉の何人であるかと云ふ事、自分の近づいて行くべき人は芭蕉を置いて他に無いことを知つてゐたのであらう。人の軒下に眠る放蕩無頼の果に、もう一度彼は人生に呼びかけて見て、どうにもならぬ身の振方をつけたのである。路通の詩情は同時に生活の改革でもあつた。

その後江戸（元祿二年）に出て深川の芭蕉庵の近くに借家して、日夕、師叟に親しんでゐたが、絶え間もない貧窮は杉風ですら持餘した程であつた。芭蕉庵の乏しい米櫃の厄介になつたことは勿論のことである。師叟に隠れた時折の短冊賣や、見窄らしい心になつて名もない町人相手の俳諧興行に身を賣したことも再度ではなかつた。芭蕉は言葉を繼いで生業と俳道の正義を説いたのであるが、風來犬の如き路通はその度に本心に還り乍らも、芭蕉庵を一步外へ出ると持前の放埒に身を委せ、口に師叟を楯に町人俳諧の取込役などを勤めるのであつた。彼はその度毎にこれは悪い事だと

云ふ後悔をくやみ乍ら、芭蕉の耳に入ること恐れたのであつた。親密の中に端正を含む意見振り、柔しいが時とすると人の腹の中まで見据えてゐるやうな眼付、さういふものを路通は絶えず師翁から感じ、絶えず事の發覺を恐れてゐた。その意味で路通は生涯を通して芭蕉を恐れ過ぎた位、恐れたのであつた。師翁の愛情をさへ恐怖に代へなければならなかつた路通は愛情を嚙み締める間もないくらいであつた。それほど親かに芭蕉の聲名を售り、それを己の口に上らせることに依つて乏しい衣食にありつくのであつた。

「おれは師匠を售つてゐる。賣れば賣るほどそのためにもおれには師匠が必要だ。おれが師匠を賣ることに謝りたい心で一杯になつてゐる。おれはそれを止めようと思つてゐるが、おれのやくざな暮しはついそれを遣つてしまふ。」

彼は芭蕉を口にしないことは無く、それを口に上らせることに無邪氣で狡猾な心で、世の愚人に接したのであつた。芭蕉は路通を見るごとに苦痛に近い表情をした。その表情と心の有様はすぐ路通に通じた。かれも苦しさうに師匠と對座しなければならなかつた。かういふ彼らの状態は一層兩方の心を却つて深くしたものでないか。

曲水あての手紙の端に芭蕉は斯う書いてゐる。「路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事、推量いたし候、其志三年以前より見え來たる事に候へば驚くにたらず候、とても西行能因の眞似はなるま

じく候へば、平生の人にて候、常の人が常の事をなすに何の不審か可有御座候哉、拙義においては不通仕まじく候、俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候ばむかしの乞食よりまさり可申候。」と書いてゐる。その淡々たる手簡の内は何とない憤りさへ流れてゐるが、それだけ隠れた芭蕉の心が微かに動いてゐる。幾度とない改悛の心を披瀝した路通のすつかりを彼は見透してゐたのであつた。騙されまいとしながらなほ騙されてゐる氣持は、絶えず芭蕉の心の中にあつたらしい。

芭蕉は路通に問ふてあなたは何をして居らるゝとも云はなければ、何をせよとも云はなくなつた。唯、時とすると作り話などに耳を藉し乍ら、芭蕉は眠さうに半眼を見開いて、路通の言葉を聞き流すくらゐであつた。さういふ芭蕉を知つてゐる路通は氣拙く寂しく芭蕉庵を辭することもあつたが、別に芭蕉はそれを引止めようとしなかつた。軽い憎しみに加はる愛着はあり乍ら、最も人間的な芭蕉がそこに端然と坐つてゐるだけであつた。どういふ時にも芭蕉が一番人間的な心の構へを以て接してゐたのは、路通の場合が多かつた。一個の清濁を併せ有つてゐる路通の魂は、芭蕉のさびを以てしても澄ますことが出来なかつたらしい、芭蕉は心で路通をあきらめかけ又諦めかねてゐる。通じかねる永い清濁の結ばりが根を張つてゐたのである。

吸露庵涼袋の「頭陀物語」は信用できないが、或時、路通が鬼貫の宿を訪ねたことが書いてあつた。「今鬼貫の名を隠し朝夕の煙をいとふ、昔は花洛に遊吟して翁と畫讚の遊をもなせしが……」そ

して鬼貫は明日の飯をも缺く貧窮の暮しであつた。路通には困窮は解りながらも、自身もなほ頭陀袋下げる身のどうなり様もなかつた。涼袋は此二人に僞筆の一夜を明させたやうに書いてゐたが、芭蕉臨終の時も鬼貫は病床に通されなかつたことを考へると、支考丈草去來なども此事は知つてゐるらしく思へた。花屋日記に「鬼貫來る去來應對して還す。」とある。笈日記の同じ七日には鬼貫のことが書いて無い。

芭蕉が心苦しきから路通を破門したのは、芭蕉が本來の心もあつたらうが、他の子弟を慮つた氣もちも無いではなかつた。路通とそのまま交はることは日を迫ふごとに苦痛になり、路通の方でも庵の戸を敲くことも時稀になるのであつた。しかしそれも三井寺の僧の取なしで許されたが、路通の心にはそれ以來何か硬い氣もちが残つた。敬愛は拗れたまゝ融けないで彼のつむじを枉げたのである。彼が本統の心で芭蕉を慕ふたのは矢張師翁歿後であつた。「花屋日記」に依ると、芭蕉は去來丈草支考を床近く呼んで、遺言のあとで斯う附け加へてゐる。

「路通とも親しく交はつて下され、あのやうな男であるが心には善いところがあり誠がある、決してあの人を仲間はずれにしてくれないように頼みます。」
「花屋日記」は信じないとしても芭蕉といふ人は、かういふ叮嚀のある人であることも實際であつた。必ず斯う遺言したであらうと私は信ずるのである。芭蕉生涯中の心を痛めた路通であつただけに、私はその言葉を信じてゐるのである。

路通はこの元祿七年十月十一日芭蕉屬曠に就いた日には、加賀金澤の町に行脚の假寓をしてゐた。生駒萬子の手厚い世話になつてゐたらしく、路通自身、「むつまじき方ありて、日數へぬ。」と云つてゐる。路通は殆何物の死よりも、芭蕉を失ふたことに驚かさされ嘆かされてゐた。今更のやうに謝りたい氣持と悲しみに萬子と交々傷んだのであつた。路通は何か知らず平常から師翁にその本心を解き明し、それを聞いて貰ひたかつたのである。本當の心と云ふても路通自身さへ釋明しがたい何物かであつた。話さう話さうと念ひ乍らたうとう云ひ盡せない或心持であつた。正邪を區分した彼自身の委曲した氣持の一切であつた。併しいまは彼はその機會を永く喪ふた。芭蕉の生前に或不愉快を起した氣もちが、當然路通自身から起つてゐる何物かは、もう路通には手がつけようがなかつた。彼は秋風の稍々寒い異土を彷徨し乍ら絶えずその思念に囚はれ惱まされた。しかも彼はその師翁の病褥を訪ふ機會も無く、亦最後に自ら花向けすることもできなかつた。

富裕である萬子には路通の生活が最初から解つてゐるだけ、師翁の病歿を聽いて悶々する彼の蒼秘めた顔容の中に、何よりも著しい焦躁と苛責とを讀み分けることが出来るのであつた。しかし右するも左するも心悶えた路通を見ると、萬子自らも厭せられた程であつた。路通は萬子から旅途の費を得て上洛の途に就いたのは、それから間もないことだつた。

路通は芭蕉翁行狀記の中でかう書いて自らを悔んでゐる。

「やつがれは此三とせ折々のたかひめに、翁心障り侍りて、音信も遠ざかり侍りぬ。されどむかしの哀みふかきこそかへつて悪みもつよからんとおもひながして、やをら憂世にまかせうち暮しぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心かゝり成とて、翁の方なだめまいらせ、此度萬罪ゆるし給へども外の障なと侍れば、面むきうときさまにて、それよりはやつがれ加賀の國へ旅立ける。そこにむつまじき方ありて、日數へぬ。此度翁遺言の次に、餘命たのみなしなからん後、路通が怠り努々うらみなし、かならずしたしみ給へ、その望おのく聞あへり。今さらくやしさのみぞせんかたなき。やつがれはせめて十四日の法事に參合ぬ。新舗塚の前橋の花筒ものあはれに、聲もふるひながら、陀羅尼など涙おさへて……」

彼は俳諧勸進帳に自ら乞食路通と記してゐるが、しかし芭蕉を知つた後の生活は、昔、人の家の軒に眠つた彼でないことは勿論であつた。街奇と鬱屈とを持つてゐた彼は、師翁歿後前後は貧窮ではあつたが、不思議に時折藍鼠の羽織打ちこかして、其角などゝ交り乍らゐた。勸進帳二巻は決して路通が孤獨の男でないことを證左してゐる。むしろ彼は莫逆の友を得ないで、やゝともすれば瓦石の友垣を結んだ爲めではなかつたか、何と云つても芭蕉は彼の生涯の師翁であり、益友であり別の意味の親御のやうなものであつた。

ひからかす袖や小春の死出の旅

路通

風俗文選で許六は「路通者不知何許者不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命、漂泊之中著俳諧之書。」と書き、路通を不實と輕佻の者としてゐる。その去來との俳諧問答の中にも路通を卑しんでゐるところが尠くない。路通は輕薄であるといふことは、その乞食生活を皮肉つたものであると同様に、拗ね者のひねくれた性格は人に容れられなかつた。芭蕉でさへ持餘した彼は他の門人に容れられる譯がない、——温厚な文章法師さへも路通には眩しい眼付をしなければならなかつた。しかし師歿後は文章に多く親しみを感じてゐたのは師臨終の折諸友もみな路通と親しくして呉れるようにとの遺言も所以したものであつたらう。路通の性格には風雅高韻の相は無かつたが、その生活振りの中には甚だ近代風の破れ毀れた性格を持ち廻つたものであつた。そのために疎まれ乍らも彼は彼らしい生活を後代にまで傳へたことは蕉門の一異彩であつた。常に飄逸である如くして然らざる悲しさうな彼の顔容の中には、拭へぬ人生の風雪があつた。人にも我にも容れられぬ人間らしい一切のものを掻き集めた放浪の魂が彼の生涯を切り廻してゐたために、不實薄情の様に人々から睥睨されてゐた。私は彼を憎みながら彼の何物かに心惹かされてゐる。彼の性格の中に我々の持つ善良とする意識を裏返しにして見せたものを、彼は時に臆面なく展いて見せるからである。それ故自分は許六のやうに誹ることは採らぬ。

いねいねと人はいはれつ年の暮

(猿 裏)

つみすて、踏つけがたき若やかな

瘦馬も淺草拜め年の市

草臥て鳥行なり雪ぐもり

(同)

(勸進帳)

(同)

併し路通には一茶の僻見と露骨に歪んだ人生觀とがなく、却つて彼の人生は打沈んだものらしかつた。受身で内の方の心で呼吸してゐる。「いねいねと人にいはれつ年の暮」の如く、沈んだ微笑みとその儘の彼の人生觀になつてゐた。それに抗ふことをせず居て、或從順と素直ささへ窺ひ見せてゐる。見分はさういふ心境に澄んでゐる路通の中に、彼の本統を見る氣がしてゐる。「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の如きは、路通自らの人生が表出されてゐる。雪ぐもりが重々しく壓してゐて、そのため何も彼も動かないでゐるやうな目の光景が、さびしく一羽の鳥の立つてゆくさまに描かれてゐる。彼が北國行脚の詮方もない疲勞や心遣りの程が、その奈何様にしても見える見すばらしい風采の上にはあらはれてゐる。或は彼の全生涯もまた「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の途づれではなかつたか？ 親友の夢かつた彼は一羽鳥のそのやうに陰影を負ふて歩いてゐるやうな人であつた。芭蕉さへ「路通はいづれの所なることを知らず。」と遺言集に云ひ残してゐるが、それは間違ひであらう。芭蕉は知つてゐなければならぬ筈だ。遺語集などに流布されてゐるものには、眞偽を分つことのできないものが往々ある。美濃の生れで享保に歿してゐるとだけ、その折々の句作も、他

の元祿の諸家のやうに纏められて残つてゐない。散漫と惶惶の暮しの中で、何時の間にか書き捨てられて行つたものであつたらう。俳諧勸進帳二卷の興行も觀音の靈夢によつて爲されたと序言で云つてゐるが、さういふことも何となく白々しいやうな氣がしてならぬ。

元朝や何となけれど遅ざくら

鳥どもも寢入つてゐるか餘語の海

路通

同

小説道の芭蕉

22

芭蕉もまた小説道の何物かを持つてゐる。

宗房時代から江戸深川の住店、奥羽行脚や幻住庵入鎖の生活、數へ來ると彼の生涯もまた鬱然たる小説中の人物でなければならぬ。彼自身が既にそれであるやうに、彼の發句も一句をもつて人生の數奇大局を盡したものが尠くない。彼の素直な、なげきや、匂ひや、さびしをりや、感慨や、やさしい董のやうな愛情、物の見方や感じ様や、その毛深く考へ耽ることろなど、一つとして吾々後代の人生の委曲で無いものはない。

彼が何故小説を書かなかつたといふよりも、彼は一句の内に人生の心づくしを凝視めてゐた。小説と俳諧の間に一髪の餘裕が無かつたらしい。彼は彼の生涯のものを俳諧に泌み亘らせた。餘處目をする事の無い彼は、ひた向きに俳道の王城を築き上げたと云つてよいのである。

草の戸も住替る代ぞひなの家

(奥の細道)

彼が茶人の信屈に入らずしやれ者を輕蔑したことも、ことば理である。眞面目と眞實との外のもので暮

せぬ彼は、その一寸の道を徹したのは何と云つても己を知る大雅の士であらねばならなかつた所以である。彼がその生涯を通した押し方の強さは莫大のものであつた。之加も彼は騒がす一句づゝ押し進んで行つたのである。片々たる俳諧とは云へ、此の巨匠の踏み方は全く古今稀であつた。

草の戸も住替る代ぞひなの家は元祿二年奥羽行脚の前の三月の句である。支考の笈日記に、「その後舊草を見に行けるが、たゞ見知らぬ人の住みてぞ侍るなる。むかし師叟の深川を出るとて、此草庵を俗なる人にゆづりて」とあり、あとに「今はまことに、すまますなりてかなし。」と當時を偲んで書いてゐる。

芭蕉は奥羽行脚の前に「股引の破れをつゝり笠の緒付かへ」て、一先づ杉風の別業に移居した。深川の古住居を捨てたが、間もなく他の人が移り住んだことを聞いて、彼はひそかに或日その舊い門前を通りすぎたのである。折から難かざる季節で狭い家内に、雜壇の紅いだんだらさへ格子戸を透いて見えるのであつた。寂しいやもめ住みのかれの古い住居は、いまは雑を守る娘の居る家に變り果てゝゐる——「住み替る代ぞひなの家」此處に小説家の芭蕉が、格子内の踏石に脱いだ雪駄の類まで見遁さう筈がない。自分の居た間の様子も違ふ、何とも云へず昔懐しい氣もちがする、——彼の此の心もち我々にも通じる心である。支考はその後にまた行つて阿叟がゐる家を見て來たが、いまは雨雪に洗はれて住む人もないやうに破れ毀れてゐると書いてゐる。

23

芭蕉が舊居を眺めに行つた心は、自分の人生を讀み残さずに置く懐しさの餘りである。温情と云はるか、素朴と云はるか、一抹の子供らしい感懐を交へてゐて慕はしさを有つてゐる。かういふ境致にある心は多く門人の眞實を惹いてゐる。「六尺をこえんと欲するものはまさに七尺を望むべし。」の鋭い洞察を以て人生に呼びかけてゐる彼は、外科醫の手術の際、一寸の切開に一寸五分を以てする科學者の大膽とその用意を知つてゐた。彼の小説はやはり六尺を踏えんとして七尺を飛ぶ用意のあるものであつたらう。徹することに深く、さびるにいよく、曠かつた彼は、悲しみに濁らず嘆きて澄むこと切なるものがあつた。「けふははれて笠かろく、けふはしぐれて袖おもき曇」と云ふ旅人の心を知る彼は、「一つ家に遊女もねたり萩と月」の哀切なる人生の記録を漏すことなき人生の作者であつた。「：不便のことに侍れども、吾々は行くところに止まることおほし、唯人の行くところにまかせ行くべし。神明のかならず恙なかるべしと云捨て：」て越中の磯べに遊女と別れた彼こそ、索寞たる人生にひたと面を對せ、亦それに背後を見せて立つ自ら近代の人の持つ心を志とした人でもあつた。

芭蕉は在るまゝの人生に即してゐるばかりではない、様々な門人等の生活や門人同士の間の仲勞を執り、聾である杉風のために同門へ聾の言葉を封じ、癩を病む許六にはその事を一生口にしなかつた。況や路通と同座して餓人の言葉を控えたことは勿論であつた。一介の苦勞人としての端嚴な

る面目、生活者としての心意氣も坦平として護られてゐたことは、人情の内に竊に念ひを潜め、人心の間に平和と懇切を醸すところの、心ゆたかな小説道の大器であつたからである。人として蕪村や鬼貫の苦行を止録する前に、人としての芭蕉の苦勞が足りないといふ者があれば、彼は常に人生に現れたものしか眼に止めない杜撰なる記録者の輩であらう。加賀の旅は北枝と句空との仲たがひを和睦せしめたことは誰でも識るところであるが、彼が人情のこまかさ、得も云はれぬ寂しさに心に向け考へたことは、あまり人の口にしないところである。彼が小説を書いて人生に直面したら恐らく眞情の内に幽韻をかなでるところの渾然たる作者に爲り得たであらう。近松の内側をあさり、西鶴の漏した機微を彼はしかも丹念に彫刻するに閑暇を偷んで綴つた人であらう。しかし幸にかれは稍々ともすれば俗流の媚に接觸しなければならぬ作者にはならなかつた。彼は靜かに一句づゝ乏しい人生の灯を點け始めた。しかもその乏しい灯は山嶽の全面を壓する炬火となつたのである。

髮生て容顏青し五月雨

(續 虛栗)

奈何なる芭蕉の像を見るよりも、「髮生て」の芭蕉は既に氣魂面を打つ底の自畫像を有つてゐる。精神の生活を奥底まで辿つたものゝ、鏡に依らずして自らの容貌を描くことを擲んでゐる。すごみある苦行が出てゐる。端然と坐つてゐる彼が常に何物かを、喧噪な人生や騒々しい自然を手をもつて抑壓してゐる大量の態が見える。「容顏青し」の素晴らしい呼び方は、小暗い五月雨の軒端をめぐ

つてゐるやうである。彼が描いた自画像の内これほど凄みの出てゐる句はない。四十四歳の句であるが、彼の半生を讀むことが出来、顔色と同じい枯れ様をしてゐるその心の程も窺ひ知られる。何人が斯くまで己を書き得たか？

白髪ぬく枕の下やきりくす

(江鮭子)

おとろへや齒に喰あてし海苔の砂

(今日の昔)

不性さやかき起されし春の雨

(猿蓑集)

此秋は何で年よる雲に鳥

(芭蕉翁行狀記)

あきらめも嘆きも物憂さも茫漠たる人生の行手も、自ら彼には見え透いた一切である。一つとして彼の身邊心境の消息で無いものはない。何人も此の蒼鬱の中に杳として囁いてゐる「雲に鳥」の迫けさには驚くであらう。夜半の枕べに白髪ぬく一介の老爺の所在なさは、老いたる人の總ての所在なさのつれづれであり、斯くて此句があつてから無味の所在なさにも、老いのおごそかさかさが横つてゐるではないか。「齒に喰あてし海苔の砂」に愕いて口へ手をあてた芭蕉は戛然として天外の聲を聞いたに違ひない。彼は日常茶飯の事々に深いおどろきと意味ある永い世の聲や姿に、いつも初々しく心を潜ませ働かしてゐる。「不性さやかき起されし春の雨」の中の芭蕉のほろりとさめた眼の中に、實に遠い世の夢まで籠つて居さうに思はれるのも誇張ではない。彼の此の幽遠の心は行互つて

皆の者になつてゐるからだ。これらの念ひが行き到けるだけ達いたものに「秋ふかき隣は何をする人ぞ」の大極「此道や行く人なしに秋の暮」の寂寞が、その前方に遠い雲煙のやうに聳え立つてゐる。人の言葉は限りあるものとされるが、彼の言葉には際限がなく雲表の遠きに行き到いてゐる。日本の文學で此のあたりに行きついてゐたことには、いまさら驚くより外はない。念々止まざるもの一句をないがしろにしなかつた彼は「秋ふかき」隣を思ひ乍ら、小説道の全幅を抉り立てゐる。彼の自傳小説は彼ばかりのものでなく、讀む人のものにその魂を移し植ゑてゆくことは、彼が用意と廣さを持つてゐるからである。その寫實の和やかさは本物をつくり形づくられてゐる。

さまざまの事思ひ出す櫻かな

(笈日記)

行秋や身に引きまふ三布蒲團

(詞 寒)

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗

(伊達衣)

のうれんの奥物ゆかし北の梅

(菊の塵)

こちら向け我もさびしき秋の暮

(笈日記)

粽結ふかた手にはさむ額髪

(猿 蓑)

前髪もまだ若草の匂ひかな

(翁 草)

彼の發句の或程度までの寫實の意味を解くことはできても、その奥にどの程度まで觸れていいか分らない。實際は彼のものは俳句だか自然だか寫實だか解らないと云つた方がよい。あれ程のもの

は芭蕉の中に在るもので、本物の自然や草木であつたとしても、彼の場合では、彼のみの世界の現象として見た方が私の好みに合ふてゐる。彼の「さまざまの事思ひ出す櫻かな」の「櫻」は、彼の五十年の全生涯の中に散りもし咲きもした花で、普通の櫻でないのかも知れない。左甚五郎や吃又の作品は夜半に這ひ出して來ても、彼の作品がさういふ口碑を持たぬだけでも、心のものと、形のものとの相の違ふ所以であらう。

園女亭に招かれた彼はその優しい一篇の物語を「のうれんの奥物ゆかし北の梅」と詠み、好箇の小品にして齎してゐる。園女亭の物閑かさ、彼が描く園女のつゝましさは常に彼の心にある女性の凡てであるにちがひない。大原女の素朴の姿を路傍に眺めて、あれこそ自分の好みのある女人だと語つた彼は、野天に育つ田舎女の美しさを悉皆知つてゐるものである。作つた上品や化粧に據る美しさを輕蔑してゐる彼は、一見、野蠻な泥の付いてゐるやうな田舎女の美を解く達眼を備へてゐる。それにくらべて園女の床しさをのうれんの奥に見た彼は、また淑かな上品をも梅花の如く感じる高尚な彼でもあつたのである。(園女は伊勢山田の醫師斯波一有の妻、夫の歿後、眼科醫を業としてゐる。貞淑端雅の婦女子であつたらう。)

「粽結ふかた手にはさむ額髪」は彼自身も物語風の作と呼んでゐる。夏の初め、笹の葉で餅をつつみながら、煩さく額と眉に下る髪の毛を搔いてゐる姿に、何か清艶のありさまが萌たげに浮ぶ。濡

れてゐてもなほ白い手、笹の葉の濃いみどりの色、——坦懐の彼も自ら意識して「物語りの面影をば一句は入集すべき」と云つて猿蓑集に入れてゐる。粽結ふ女もまた彼の心の中の女である。園女の貞淑を愛する彼はまたかた手にはさむ額髪を物憂さを眼に止める男であつた。

芭蕉は美小童を愛したことは人々の云ふところである。元祿は殊に美小童を愛する流行の時であつたが、自分はむしろ彼はその美を美として愛したゞけに止つてゐただらうと思ふて居る。「前髪もまだ若草の匂ひかな」の彼は、美しい元祿少年の姿に眼をとめたことは當然であつたらう。併し彼を世の稚兒あさりのごとく云ふのはどうか、若い時分は(三十歳前)相當の若い者として生活をした人であらうが、それは全幅の彼を論ふ上の問題ではない、却つて危険な中年後に蹉跎の無かつた彼は、やはり蕭條たる大雅の道に殉じた男であつた。何よりも我々の頭にそれらの色慾世界への想像を呼び起すところの(假令呼び起したにしても)何物をも其の不純さを與へないところが、彼の身上でもあり清節さでもあつた。若し情事の一端が我々の耳に入つたにしても、彼の爲人のおもしろさを加へるくらゐのもので、彼の不名譽にはならないことである。壽貞尼と彼とが何故に別居してゐたか、門人はなぜ壽貞尼の事を口にしなかつたかと云ふことも、一寸不思議である。別居して芭蕉が通ふた譯ではなからう。杉風宛の手紙には壽貞が芭蕉行脚中に亡くなつたやうに書いてある。故郷で關係があつて後にそれが無くなつたのかも知れない。唯、彼が小説道に彼自身さへ壽貞

のことを書かなかつたこと、それに觸れないところを見ると、芭蕉も底を示さない深い用心を持つて人に接してゐたやうである。

「かくれ家や目立たぬ花を軒の栗」の彼は「こちら向け我もさびしき秋の暮」の主人である。「軒の栗」の幽さに心を動かす彼の心も、到底人生に「こちら向け我もさびしき」と呼びかけなければ居られぬ或物を有つてゐる。彼の幽情寂寞の境も時にしばしば他に竊かに呼ばねばならぬものがあつた。人としての彼の弱さも剛情の中に芽ざしてゐて床しい。彼の小説道はつゞめて行けば寂しさの一すぢ道である。埃と苔とを有つ寂しさに外ならぬ。埃は人生から、苔は自然から、ひそかに彼の上に彼を古風にして見せたものであらう。

嗤笑

芭蕉は非常な高いところから門人を見てゐる時と、門人の内側の心に入つてゐる時とがある。常に何か心に豊富な餘裕と寛やかな大人の笑ひをもつてゐたことは實際である。しかも子弟の間にある彼は潤達で自在な氣風を示してゐたらしい。むしろ天才ではない、一段づつ己を築くことに營々たる勉めを努めた男である。宗房時代からの彼と五十一歳の生涯を貫いてゐるものは、一句づつの進展と、加はりゆくさびと勉強のあとである。少しの油断もしないでゐるところに、彼の素晴らしき併し地味な發展があつたのである。

人間は自分の才能を自分でどの程度までに洞察できるかどうかは疑問である。しかし仕事のある人間にはその仕事によつて、自分の才能をはじめて押し拓き続けられるものである。

彼は何時もその仕事に沈潜して刻々と大成の域に近づいたのであらう。天才でない彼が結局天才の道のあるいたといふことになれば、或は天才であつたかも知れない。

「猿みの撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆云、病雁はさることなけれども、小鰕にまじるいとゞは句のかけり事新らしくまことに秀逸なりと云、去來云、小鰕の句は珍しいへども、その物を案じる時は余が口にも出ん、病雁は格高くおもむきかすかにしていかにか爰に案じつかんと論じ、終に兩句ともに乞ひて入集す。その後翁曰、病雁を小えびなどと同じごとくに論じけるやと笑ひ給ひけるとなり。」

猿糞をあづかる凡兆も、芭蕉の「笑ひ給ひける」であしらはれてゐる。急所を突いて笑ふ彼のうつはの大きさは、この挿話の中にも悠然として坐つてゐる。彼の心に行きとゞくまでには門人等の及ばない遠さと隔たりがあつたやうである。彼自身も最早それが日常の會話にも露骨に現れたものらしい。去來が凡兆の句評と己の句評とが、おのおの相違してゐることについて、芭蕉は人それぞれの色分けのした句評をしたことを云ふてゐたが、それも芭蕉の細かに氣のつく一面であつたらしい。實に芭蕉はさういふ心づかひを以て接してゐたことが、門人の各々の道につかしかしめる朗かな原因となつたのである。凡兆には類なき洗練を、北枝秋の坊には素朴を見出し、去來を以て忠義一徹の士ならしめたのも、彼の笑ひながら人を人たらしめたゆゑんであらう。いはんや蒼古の丈草を彼のわすれがたみたらしめたことも、彼の類なき高さに近づけた徳の一つであらう。

彼が口訣に、「他門の句は彩色のごとし、我門の句は墨繪の如くすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず……」といふてゐるのを見ても、彼が門人を教へるに隨所にその才幹を發してゐる。

じだらくに居れば涼しき夕かな

宗次

猿糞集の撰の時、宗次一句の入集を乞うたが芭蕉は取る句がないといつて斷つた。後に宗次は「おゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍る」といつて膝をくづした。芭蕉はそのじだらくに詠んではどうかといつて、入集させたと去來抄に出てゐる。彼が門人の間に入つて一言半句にも心を寄せ心を働かしてゐる一面が出てゐる。

芭蕉庵

寒菊の隣もありや活大根

冬さし籠る北窓の煤

月もなき宵から馬を連れて来て

許六

芭蕉

嵐雪

「今の六間堀の裏と、御舟藏との間に鯉魚のいけすを持ちし者あり、そこに住みたりといふ。」
「類聚名物考」(樋口氏芭蕉研究)

芭蕉植ゑて先づ憎む萩の二葉かな

芭蕉

芭蕉庵は一と間に勝手の手狭なものであつたらしい。杉風の別業を繕うて建てたものである。古池に枯葉の浮く初冬、水の温む暖い春さき、芭蕉は自ら炊ぎ焚いてゐた。自分がかういふ彼の生活に沁みついて彼のことを考へると落寞の情が一しほ深い。浅い井戸端で一向年齢の分らない氣むづかしいやうで親切深さうな彼が米をこしく磨いでゐることを思ふと、幽思自ら元祿の昔に飛ぶやうな氣がするのである。時折障子をあけて眺める彼は何ともいへず好ましい品のよい男のや

うにも見える。

「この道はもう霜時で参られませんか。」彼は井戸端で道問ふ人にさう答へる。元、杉風の家はいけすのあつた池に、枯れ草が参差として折れ込んで、霜に瘠せいぢめられてゐる。片戸の開いた庵の勝手口に、青菜があををと冴えて見える外、別に道具らしく際立つたものがない。

芭蕉破れて鹽に雨をきく夜かな

芭蕉

樋口氏は「今の西元町の萬年橋と猿子橋との間で、六間堀に面した通りの能登屋といふ下宿屋の中庭に、古井のやうな形になつて遺存されてゐる。」といつてゐる。

予は芭蕉の容貌をよく想像して見るが、年よりも老けて見え、齡四十に達しない前から霜を交へたこと、四十にも五十にも見えた説が當つてゐる。しかし何か枯槁されたまま敲けば音のある凜乎たるところがあつたらしい。門人の内でも氣の弱い者はその端嚴に打たれたことは實際である。にがみ走つた中に一抹の柔和がなごやかに流れてゐる顔容であつたらう。

此秋は何で年よる雲に鳥

芭蕉

この漢々の年なみに彼の風貌が出てゐる。この一句の精神は結局彼の誠であり老いであるところの、晩年のかれが唯一の自畫像であつたらう。髮生て容顔青し五月雨の彼の生彩と立體的肖像畫は「雲に鳥」の漢々の境に辿りついて描かれてゐる。實に彼の進展はほんの少しづつで、目にとまら

ぬやうだが、一句を出したときには、ずつと進み深くなり曠くなつてゐる。「何で年よる」の心は吾
吾にも動く心である。しかも明瞭には掴めない片雲漂茫の高さであるが、かれは思ひ切つて「雲に
鳥」といひ、吾々の些かの象徴の殻を叩き破つて中身を差し覗かしてゐるところは、及び難いとこ
ろといつてよい。

再びいへば全く彼はほんの少しづつ動いてゐて、しかも、あとで見渡すときは、はるか前方に
出てゐるのだ。静かさが持つ驚くべき發展だといつてよい。庵の小庭に一株の芭蕉を植ゑてあつた
ことも實際で「芭蕉破れて」の句で見ても分ることである。

元祿の大家

一 永い年月

彼は幽けさの中に美しさを見出し、美しさの中には遠方を眺めてゐる。おぼろげなもの、微かな
ものに永い年月を見、彼の心は年月の波とともに動いてゐる。彼は實に我々に取つて宗教のやうな、
物の喜びを有つて迫つてゐる。

二 挨拶

自分が若し芭蕉に途中で邂逅つたとしても、自分は知らずに行過ぎるであらう。それほど彼は別
に何人とも變つたところの無い人物にちがひない。

併し自分と芭蕉とが電車の中で對き合ふてゐたら、自分は芭蕉だといふことに氣が付くやうにな
るかも知れぬ。能く見れば變つてゐる多くのものを持つてゐる人に違ひないからだ。そして自分は
心の内で平常からの尊敬の念を有つやうになるであらう、芭蕉も思ひ詰めてゐるやうな自分の眼付

につい注意せず居られなくなり、何となく柔らかない表情を一段と優しく増すであらう、自分は挨拶のかはりに微笑つて見るやうになるかも知れぬ。微笑はときに尊敬に對する手厚い挨拶でもあるからだ。或は芭蕉もその時に微笑つて答へるかも知れぬ。何となく自分を好いてゐる男だと思ふであらうし、さういふ人には好意をもつ人であるから、他に人さへ居なければ話し合ふやうになるかも知れない。

野とか山とかの小徑で行き逢つたら私と彼とは十年の知己のやうに可憐しげに話を交はすであらう、惻愴らしい自分は謙遜して彼の發句などは褒めないで野や山の景色を目立たぬ程度で靜に物語るであらう、彼もまた發句の話などが出ない心安さについ穩やかな話を話し出すだらう、彼の方から發句のことを云ひ出すかも知れない、なぜかと云へば彼は彼の心の向いた時に黙つて居られない人だからだ。何時も黙つて暮してゐる人間は口を開いて話し出すと、平常から貯めてゐることを可成大切なことまでも話し出すものだ。言葉をもたない人間はそれ自身一つの思想をもつてゐるからだ。

三 發句道

芭蕉は發句を一生の仕事として平常も何時もそればかり考へてゐたであらうか。彼の生きてゐる

間の仕事は發句以外には道が無いと考へてゐたであらうか。發句が藝術の極北で精髓だと思ふてゐたであらうか。それは彼の發句論や連句の話や、遺語集を見てゐても解り過ぎる程、發句に身を委ねてゐるのだ。それにも拘らず芭蕉は一生の仕事として何時も發句のことばかり考へてゐたであらうか。

自分は彼が晩年近くなつてから此の心が正確に彼に割り込んだものと思ふてゐる。自分は決して世の識者等の云ふやうな芭蕉を説きたくない、彼は文學小説に心をひそめてゐたことは、決して見過してはならぬことだと思ふてゐる。

四 天の貢物

彼は發句道精進の傍、それらの子弟に依つて米鹽を得てゐることを恥ぢてゐたらうか、自分はこの事だけは彼は大膽に天からの貢物を受領するやうな氣でゐたらうと思ふた。だから彼は餘り品物を貰ふても感謝の情を述べてゐない、その心の一方は大きくひらいて、天からの貢物を入れるために優しい微笑みを漏すくらゐであつたらう。さういふ芭蕉は生きてゐるのだ。どういふ藝術家の心にでも生きてゐる理解である。藝術の士はそれによる收穫については何時も天の貢物を受領する氣持でゐることには時代の變化はないやうである。

五 次郎兵衛について

自分が若し芭蕉に仕へるとして見ても、次郎兵衛の如く忠實ではない、去來丈草の如く恭慎の徒でもないやうである。自分は或は路通の心を心としてゐたかも知らぬ。今もなほ芭蕉に就ての稿を起して市にひさいであることを思へば、路通のしたことぐらゐは許さるべきことである。

六 女

獨身で通した彼の一生に、彼がどれだけ清淨な獨身であつたかどうかは分らぬ。奥の細道の旅にしても彼は全然清潔であつたかどうかは分らぬ。唯ひそかに思ふのは彼もまた枕紙のさわめく音に目ざめて、人生の獨身を嘆くために一夜妻を求めた彼であらねばならぬといふことである。誰も知らぬ間に彼は彼の寂しい現身をまかした女の一人や二人はゐたであらう、それを思ふとき、我々は芭蕉に一脈の勇敢を感じるのである。彼もまた我々のごときだつたかと恭ふ氣にさへなるのである。決して輕卑の念を毛頭感じない。我佛聖はかくあらねばならぬからである。

若し彼が一夜を何處かで明したとしたら、彼は世にも悲しい顔附をして坐つてゐたであらう、恥と悲しみ、慙みと卑しみとで彼は一杯になり、自分の發句道さへ潰れたやうに思ふたであらう、正

直な人々は皆さうであるやうに彼は人目に立たぬやうに歸つて行つたであらう、併し乍ら斯様な芭蕉の中に私は得も云はれぬ誠の佛聖を感じるのだ。一生を清い獨身で送つた彼よりも、斯様な挿話をも相擁いてゐる芭蕉の現身は、我々には懐しくも愛慕の念さへ起させて來るのである。

芭蕉と女、斯様な悲しい文字は尠い、彼を遂に木石のごとく云ひ傳へることは、彼を益々烈しい寂しさへ追ひ遣るやうなものである。生きるに物憂く寂しかった彼を故なく一層孤獨に書き傳へることは、追従者の寧ろ、あさましい理想にすぎない。芭蕉は幕下で上目録のある額を擡げ乍ら云ふであらう。「おれを此の上どうしようとするのだ。」

七 句作

「一宿一飯の主もおろそかにおもふべからず、さりやとて又媚詔ふことなかれ、斯の如き人は世の奴なり、此道に入るものは此道の人に交るべし。」

「夕を思ひ旦をおもふべし……しばしばすれば疎せらるゝの意を思ふべし……。」

——行脚の掟——

芭蕉もまた一介の放浪者である。延寶元年頃から江戸に流浪し始めてから、五十一歳の秋まで深川に四度庵室を造り、最後に石山寺に住むまで眼まぐるしく東に下り京洛に上り、此間に幾度と

く故郷伊賀を往反してゐる。元祿二年の奥羽行脚の百五十餘日はその生涯の行脚の最長期のものであるが、殆その生涯に落着いてゐる暇もないくらい、小行脚に次ぐに小旅行を以て終始してゐる。彼自身「旅を思ふこと」は、「こゝろ神の物に憑きて、心を狂はせ」と云ひ、「予も何れの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず……」と記してゐる程である。西行の心を慕ひ宗祇を思ふの彼は、それよりまづ先天的に漂泊者の魂が根を張つてゐたらしく思はれる。旅といふものはよくよく富めるものでなければ、よくよくの貧しい者の行ふものである。彼の落着きを以てしても、胸の酸ゆくなる思ひで苦しい工面を重ねて行脚にでかけることを思へば、彼もよくよくの旅藝人らしい悲しい氣もちを持つてゐたらしく思はれる。彼は行脚をもつて詩情に一脈の幽暗を加へることは明記してゐるけれども、恐らく人情の新鮮、山河の變移などに心打たれて行くところの、やはりさびしかりの性分から旅を企てたものであらう。

彼ほどの人物が色々の土地で様々な人々に逢ふことに珍しがつてゐたこと、新しい山河の姿に喜び驚き乍ら四顧してゐたこと、なほ彼が一代の俳匠たる隠れなき大名を負ふてゐるところなど、彼が存外濛い枯淡の中に大名を爲した人間らしい姿を持つてゐたやうに思はれる。口をひらけば戯談の裡に諷刺の相を帯び、笑ひの中に人を壓するものを持つてゐたやうである。彼が奥の細道の旅を終へてから始めて人に會ふことを厭ふてゐる。五十一年の生涯に彼が人を厭ふたことは晩年の暮し

だけであつた。奥羽行脚の疲れ、人と物語ることに疲れてゆく老年期にさすがの親切な翁も、やつと門を閉してゐる。「人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢の如し……」と云ひ、「人來れば無用の辯あり、出でては他の實業をさまたぐるも、うし……」と辛辣に皮肉めいて云つてゐる。人來れば無用の辯ありと云ふ彼が、朝暮の訪客に惱まされ乍らゐたことが解るではないか、此處に苦虫を噛み潰した芭蕉翁が居る。どうにかしなければ身と心との靜さを護ることができぬ、さういふ考へをもつ彼には、漸く放浪者の魂がしづまつて行く境に行き着いてゐるやうである。殆落着を知らない旅人としての彼も、やつと涉獵した山河水色の寂びが心に寂びつき、宿りを深うした時に達してゐる。旅は旅の最中よりも後の心を清う洗ひ滌ぐものだ。彼の漂泊もやつと鏡にうつる山河の寂しい姿のやうに、彼の心に落着いて春花秋情を重うしてゐる。彼が閉關説を書いた心は、旅に居て世俗の煩を忘れるよりも、もつと深く切なる老來の閑寂にあこがれてゐる心を映し出してゐるものであらう。

朝がほや晝は鏡おろす門の垣

芭蕉

彼ほど作句に苦しんだものはない。彼の苦吟は長きは數年に亘つてゐる。「一見、玲瓏玉の如き作句は恰も濃なくすらりと詠まれたやうに見える、併し其底を覗くと苦吟のありさまが韻律の合間に或は苦しげに漂ふてゐる。材料で苦しんでゐる彼は、或るものは捨て、捨てたものを又拾ひ上げて

眺めたりして、念々の苦吟は彼の中から一道の雲氣を吐いてゐる位である。結局、彼の幽遠寂情と雖も、彼の心魂からばたりと音して落ちるものに外ならぬ。彼は刀鍛冶の鍔の味を知り、弓矢の道を得、草木山川の何物であるかを識つてゐる。「發句のすがたは青柳の小雨に垂れたる如くして：」と云ふ彼の素直さは、時にその全然反對の枯木參差の情をもつてゐる事も又同様である。彼が考へながら寂然と坐つてゐる姿を思へばしづかさそのものゝ倂であり、俳諧其のものゝ眞實であるかとさへ思はれる。彼の苦吟の體は斯様な静さの中に生れ、句に入る時苦しむ彼も句に形を終へたときは廣やかさにさらりと涼しい姿で表はれてゐる。

ほろほると山吹ちるか瀧の音

芭蕉

鶯の笠おとしたる椿かな

同

一日／＼麥あからみて啼雲雀

同

何の木の花とはしらず句哉

同

「翁曰、發句は頭よりすらすらと云下して來るを上品とす。翁酒堂に教へて曰、發句は汝がごとく物二三取集る物にあらず、こがねを打ちのべたるごとく有べし。」と平常教へ且つ語つてゐる。彼は心で苦吟し讀み上げる時の玲瓏を期待してゐるのである。

彼は一句の面の上に何かしら新しい言葉を惹くことや、また作語することに巧みな事、上へ上へ

と登る言葉に平常も苦心してゐる。何度も置き換へて見て、又捨てることは珍らしくない。彼が作意ある言葉の美しさ新しさをみると、彼の苦心のあとが歴々と解るのだ。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

芭蕉

草枕犬も時雨るゝかよるのこゑ

同

こがらしや竹にかくれてしづまりぬ

同

髪生て容顏青し五月雨

同

起あがる菊ほのか也水のあと

同

枯芝ややゝかげろふの一二寸

同

行春にわかぬ浦にて追付たり

同

四方より花吹き入れてにほの波

同

日の道や葵傾く五月雨

同

初霜や菊冷初る腰の綿

同

八九間空で雨ふる柳かな

同

風色やしどろに植る夜の萩

同

これらはその斬新な造語であり馳句であつたに違ひない。今見ても何かの新しさが立句ふてゐる。容顏青しの妻みの寂寞、追付たりの思ひ切つて迫る調子、四方よりと切五文字から出た高びしやな

までの放膽、それを花吹き入れてと靜かに受け流してゐるところ、菊冷初るの美しい透明さ、風色やの新しい語彙、——これらが元祿の昔に彼によつて詠まれてゐることは、全く驚くより外はない。彼が文字に就いての深い心づかひと異常な神經とは、どういふ場合にでも落着いた効果を出してゐる。文字が彼のやさしい睨みにすくみ上り、彫られたまゝで凝乎として動かないでゐる。四方よりや、八九間や、一二寸などといふ文字は落着きの悪い文字づらであるが、彼によつて締めつけられると、押花のやうに平つたくなつて終ふのだ。彼の締め方が類外れて強くされてゐることは、句のなりや姿が整ふてゐるのを見ても解るのだ。彼のさびしをりの縮手、その心も、こゝまで來ると色色な彼の役目の重きを負ふてゐるのが解るではないか。

彼はこの世を諸行無常だとは思ふてゐない。彼はこの世をさびしいものだといふ風に考へ耽つてゐても、無常だといふことに片づけてゐないのである。この世の中で彼の必要なものは「靜さ」であり「しめやかさ」であり「さびしをり」ではあつた。しかし此の世を詰らないとか無常だとかは思ふてゐない。まゝならぬが故にさびしくは觀てゐるのである。彼の壯大も嚴肅さもみな彼のさびしい中から彼の嚴ぎあて搜り當てたものである。彼は自分で自分の寂寞を捲り食べてゐる何者かである。酒のむものは酒を友とし、悲しめるものは悲しみを友とする彼である。彼こそは生活に面しても逃げも隠れもせぬ男であつた。寂しさを友とするものは何ものよりも勁い、彼の勁剛さの鋭へ

られたのも彼のさびしをりの信條があるからだ。それ故、彼の地盤はいつもゆるぎもしないでゐる。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

(嵯峨日記)

彼の此の呼びかけてゐる氣もちの底は、しつかりと張り詰めて氷のやうに澄んでゐる。正面に心を向け己のさびしさを呼び出してくるのを待つてゐるところに、幅の深さと用意とがある。「うき我を」と云ふ彼は、己のやうに物憂い何時も何か考へてゐるやうな人間、——物の美しさばかりを見てゐられぬ人間、——を指してゐるのである。

ほね柴や斯と見るより蝶の殻

(泊 船)

年／＼やさくらをこやす花の塵

(芭蕉翁全傳)

生きながら一つに氷る海鼠かな

(木曾の旅)

彼の人生觀といふものが、これらの形になつて現はれてゐる時に、さすがの彼も失敗してゐる。しかし「骨柴や」の場合は、斯と見るよりと急きこんでゐるところに、むしろ寫生的な味ひが出てゐる。併し乍らその根柢に脱けきらない人生の向きが露骨に沁み出てゐる。生きながらは何か烈しい悲哀を、此句の寫生の奥に控へてゐる。しかも表にあらはれてゐないのは、彼の用意の深いところであらう。

八 花屋日記を評す

花屋日記は文曉の僞作で、文曉の作としてのみ後世を問ふべきであらう。去來支考等の合作では毛頭無い。師の病床に合作の日記を附けるほど彼らは職業的文筆の徒ではない、やうやく連坐の句作を以てする位の人々である。花屋日記が芭蕉屬曠の目安を以て、日を趁ふて記されてゐるのは何よりも後年の作であることを證左してゐる。

併し不思議なことは花屋日記の中にある或詩情の嚴肅さだけは、何人もその當時の病臥の芭蕉とその周圍を髣髴するに足りることである。文曉の遺業として後代に残るものであることは歴然としてゐる。それ故、花屋日記は一卷の蟲くひ本としての値、木板書籍としての稀觀本としての値は、確に持つてゐる——印刷本よりも木板本として讀んだ方が、あの中にある初しぐれの降る日や、元祿諸家の入亂れて集るさまや、京へ上る伏見船が沁々として讀まれる。それに花屋日記は一篇の小説的な値さへある。自分は此の蟲くひ本に時ならぬ時雨も感じてゐるくらゐ興味を有つてゐる。

肥後七代の僧文曉の作としての文章、及びその一人づつの性格範圍に稍々近づいた描寫には、油斷ならない文章のよいところがあつた。しかも此一篇は樂しみ乍ら書いたあとが偲ばれてよい。一夜づくりで書かれたものでなく經机に靠れたまま、靜かに翁の臨終を念ひながら筆を運ばせたもの

のやうである。それに自分だけの考へではあるが、時雨といふものの佗しさをこれほどまで、しみじみと書いた文章は古來すくなくと云つてよい。翁の臨終を前にして去來丈草支考等も取りませた病床記の中に、雨の降るありさまが述べられてゐるのである。

「十月初時雨せり夜の明がたより度數しれずひとしほ惱みたまへり。……」
「十一日朝またく時雨す、おもひがけなく東武の其角きたる。……」

芭蕉屬曠の前後は、平常懇しい門葉等の手厚い看護に守られてゐたのである。自ら野晒の果を夢みてゐた彼が子弟の間に、靜に大往生を遂げたのは、昔律儀の門人等であつたとは云へ、今の世にも稀に見る美談である。

病中のあまりすゝるや多籠

おもひよる夜伽もしたし多籠

うづくまる藥の下の寒さかな

しかられて次の間に立寒かな

去來

正秀

丈草

支考

この病牀十日間の師を思ふの情、師、子弟を念ふの心は、芭蕉生涯中の楽しい十日間であつた。又、これほど門葉の心を沁々と感じたことも生涯を通じて妙かつたに違ひない。醫師である木節を信じて、他の方醫を招くと云ふ木節を退けて云つてゐる。「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、

もとより水宿雲棲の身の、この薬かの薬とてあさましう、あがきはつべきにもあらず、たゞねがはくば、老子（木節を指す）が薬にて最後まで唇をぬらし候と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不浄を浴し香を焼て後安臥してもいはず。「笈日記」と鮑迄木節の醫薬に身を托してゐたところは、死に近づいても芭蕉は芭蕉たる所以のものを有つてゐた。今の世にこんな人は無からう。この子弟の情の深いことは後代に徴しても稀有のことではないか？——

落つきやから手水して神集め

木がらしの空見なをすや鶴の聲

足がろに竹の林やみそさゞい

初雪にやがて手引ん佐太の宮

神のるす頼み力や松のかぜ

居上ていさみつきけり鷹の顔

起さるゝ聲も嬉しき湯婆かな

水仙や使につれて床離れ

鯨こす鴨のさなりや諸きほひ

目にまして見ます顔也霜の菊

吹井より鶴を招かん時雨かな

木節 去來 惟然 正秀 伽通 支考 吞舟 丈草 乙州 晋子

門葉一同の賀會祈禱の句を見ても、師の病の平癒を念々に祈つて止まぬ至誠が現はれてゐる。芭蕉といへども斯くまでに深い心遣りには莞爾として死に就くことができたであらう。「十二日の中の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れる……」と其角の「枯尾花」にあるやうに、まことに睡るやうに芭蕉は眼を閉じたのである。「日にまして見ます顔也霜の菊」の祈も容れられなかつたのである。

芭蕉は病の途中で死を覺悟してゐたらしく思はれるのは、あれだけの人物であるだけに一層死に對する従容たる心が見えて來るのだ。遺言をと望まれて俳句は一句一句遺言のやうなものだと云ふあたりは、その言葉よりも左ういふ事を云ふ彼の氣質には感心させられる。事實に於て彼の晩年の作二十句ばかりを見ると、人間の終る時らしい佛と重みとを有つてゐる。「夢は枯野」の句のあとに尙彼の句があるとは思へない。しかも「夢は枯野」で終つてゐるところに、物の終る姿があつた。「此道や行く人なしに秋の暮」にせよ、「秋深き隣は何をする人ぞ」の大きな陰影にせよ、それらは遂にやはり彼が最終の陰影でもあつた。しかも一文の金も持たない彼が平和な、普通人にも望めない幸福な死を疊の上に選んだことも、誰がしたといふこともない自然さで手厚い情愛の間に行はれてゐた。その手當には彼もほとほと喜んで謝してゐる。自分自身の心の温さが聽て彼自身に還つたものと思はれない門葉の看護は、芭蕉の死に面する心を澄んだ沼のやうに静ならしめたであらう。蕪村や一茶、西行や宗祇にしても、芭蕉の如き穩かさの中に死んだ譯ではない。何よりも靜

さが死の前にあることは、この世で一番托むべきものである。「先づたのむ椎の木」どころではない。彼の大往生は花や音楽よりも、人間の一番大切な人情の中に遂げられたのであつた。何人も斯る至伴の死を死んだものは無いやうである。

九 大凡兆について

芭蕉は千數百吟の發句を後代に遺した。そして一茶は一萬句を越える發句を残した。蕪村も子規もその句作に於ては芭蕉を遙かに越えてゐた。併乍ら、我が凡兆は僅かに七十數句を残したのみであつた。しかも凡兆が大凡兆の城壁の上に輝いてゐる所以のものは、僅かに七十數句の發句に據つただけである。

「木のまたのあでやかなりし柳かな」の古今に絶した光彩は、實に遙かに一萬句を後世に委ねるより、一層大凡兆の所以を爲すところのものである。凡兆は天明の召波や明治の子規の比ではない。彼は元祿から明治へかけての芭蕉を除いた外では、大作家の巨鱗を實に千古に輝かしたものであつた。杳たる一凡兆は遂に今日に臻つては、再び我々の接しがたい大作家であつた。

一〇 季節の約定

けふは終日の雨である。

幹は濡れ草は花季を終へ起き上つてゐる。季節の約定が次第に開けて行くやうである。自分はいふふ穩やかな日に芭蕉を感じずに居られない。漂茫たる二百年の雨の中に彼がなほ濡れながら漂ふてゐることを感じてゐる。彼は我々に取つては一つの清い季節の感じの中にも存在してゐるやうに思はれる。

芭蕉その人は最早單なる芭蕉ではなく、一つの漂茫を織りなすところの芽えであり靈感であつた。渺くとも彼は我々の視野に微妙な諸々の姿をもつて現はれてゐる季節の約定の一端であつた。彼自身は既に靈感そのものに我々に映するやうになつた。

一一 風流

芭蕉は風流人であつたらうか？——自分は彼が風流人であつたとは思はない。彼は自分で謂ふところの風流は厭ふてゐたに違ひない。彼の場合、風流は彼の氣質の中に在つたもので、後の人々がこの厭な文字の「風流」を冠せたものである。彼にはこの「風流」の説明は要らなかつた筈であつた。若し強ひてその風流を彼のために無理に押し立てようとするならば、風流の一寸前のもので、風流とはもつと純粹なものだつたに違ひない。芭蕉を風流の代表者としたのはよい加減の文人が筆

の序にさう風流人と書いてしまつたのである。

風流は俗物と壁一重のもので、紛れ易いがために一層深い或物である。風流の變遷は遂に予の見るところでは、今や清濁併せたものであつて清きに過ぎず、また濁るに永うせざるもの、謂ひである。併乍ら、芭蕉の氣質の中に此の濁りの無かつたことは實際であつた。濁れぬ氣質であつたと云ふより、濁つてはならぬやうにされてゐたと云つた方がよい。門人は彼を模範とする前に彼は彼の持前の清い氣質を一層門葉の信頼からも磨き上げたと云つてよい。彼を永く逆境に置いたとしても濁らぬ人であつたらう、併し彼をあゝまで清純の人として絶世に残したかどうかは分らない。彼らは知らず識らずの内に己を叩き上げてゐたのである。教へる者の教へられる渾然さは彼と門葉の間にこそ瞭らかに考へられるのである。

彼は米鹽の資に事缺いても直ぐ心の荒むやうな人ではなかつた。彼はさういふ事すらしみじみと心に應へてゐた人である。さういふ生活の不如意のことさへ、彼の心へ何時も何物かを加へつゝあつたこと、それが彼を育てゝゐたことは疑はれない。貧乏人でよい素質を有つた人間の素直さは、何とも云へず美しいものである。八方に開いてゐる心のゆとりを見せてゐるのだ。ぬけ口を樂に持つてゐる彼らには鬱屈してもその度合が違ふのである。小金のある輩は必らず一方のぬけ口しか持つてゐない。彼の鬱屈は面眉を曇らせる鬱屈である。芭蕉はぬけ口を持ち合せてゐた人である。

「先日は立寄さま〜御馳走にわらじまで貰ひ忝存候翌日俱利伽羅を越、金澤に着申候、因縁も候はゞ再御目にかゝり可申候以上。」わらじはわらじ錢のことである。しかも玲瓏として快い響をもつて聞かれるではないか。しかもかういふ芭蕉でありながら同じ北越行脚で生駒萬子からの献金二兩を斷つたりしてゐるところを見ると、彼は彼だけ使ふ分を持つてばあとは何時も斷つてゐたらしく思はれるのである。左ういふ心の正しさを自分で期してゐるところは、何者の清廉よりも一層清雅である。放浪人の性根にはこの一面の清徹が無かつたら、遂に漂泊者たる雅人の資格を缺いてゐる譯である。

「伊三郎殿庭にて的御座候由見物致と御申越、弓見物きらひに御座候間參り不申候以上。」

これは風流とは反對のものを斷つてゐる彼である。温和な彼が弓矢の興を覺えなかつたのは一理あるが、實際に於て武張つたものは餘り好まなかつたらしい。彼は彼の道さへ辿ればよいといふ考へを最後まで失はなかつた人である。彼の口譯掟によると、草木や鳥蟲の生命を容易にあやめてはならぬと云ひ、門葉を戒しめてゐる。實にさういふ一面もあつたらしいが、「草庵鼠多く候間今夜猫おかし可下候長助御申付なされ」云々の書簡を見ると、かれも鼠の生命はあやめてもよいものと思へてゐたらしい。草木鳥蟲に心を配る彼が、なほ鼠の憎むべきことを知つてゐる。魚の生命の場合でもそれが爲方の無い場合はよいと云ふてゐる。彼もまた自分を信じすぎた時は、人間らしく大見

榮を切つたことも無いでもないらしい。鳥蟲をあやめることの不可をいましめる氣稟の中に、可成り思ひ上つた芭蕉が髣髴してゐるやうである。

しかも彼の性質の中に嘗つて深い憎惡のあつたことを私は知らない。彼は憎みの情を越えて憐む心になつてゐるらしく思はれる。對手を憎むといふ強い心でなしに、さういふ氣もちを通り越した或もの、つまり哀憐で終始されてゐることが解る。路通の場合もさうである。彼は餘りに苦勞人であつたために何も彼も己の中に、凝乎とおし靜めた人ではなかつたか？——そのために爲人としての彼があればほどまでに大成されたのかも知れぬ。貧乏人は自分の中に世間をおし靜める氣質を稀に持つてゐるものである。又、世間の問題を自分のものとして慨する輩もある。彼の場合は何事も沈めて置く優秀な本質から、憎み悲しみすら己のものとしたに違ひないと思ふてゐる。

結局風流といふものも予の如き少量の人間に取つては、世間へのかくれ蓑だとしか思へない。その中にあれば靜さがあり世間の騒音を拒絶できるからである。何事もそこには自分をいたはる心ばかりがある。他の何ものも無い。自分はさういふ隠れ蓑の中にあることを願ふてゐる。こゝから自分を引きずり出す者はない。さういふ者があつても自分は出ないであらう。併し芭蕉はかくれ蓑を着てゐなかつたのだ。彼はその點では何の用意もない清朗の心であつたらしく思はれる。予の如きは自ら立ち籠るところがあるが、かれは自然に自分の行くところに行つてゐる。すこしの濁りも見せ

ずに。——其處は自分の如きは到底至らないところだと残念乍ら思ふのだ。あれほど、すらりと行くにはその本質がどれほど善いものであつたかといふ事を感じさせて來るのである。素直だとか、さういふ言葉では云へないものがあつたのだ。二百年の間にかういふ人物が再び得られなかつた程、かれは稀な現れであつた。これを思ふと何とも云へない快い氣もちになるのだ。

一一二 路通の俳號について

芭蕉は果して路通に俳號を與へたのであらうか、路上の一餓人に對して此の路通といふ命名は、芭蕉の慎しみ深い性質から推して、殆眞實とは思はれないくらゐである。乞食の俳號を路通といふのは、路通自身には輕蔑されてゐると同様である。しかも永久に輕蔑されてゐるやうなものである。

これは路通自身が芭蕉に會ふ前から持つてゐた俳號であらう、路通は芭蕉に邂逅する前から歌俳諧を路上にひさいでゐた風流歌人の輩であつたらうから、その路通の俳號を持つてゐたことは事實であらう、自分は芭蕉が命名したとはどうしても思へない。

一三 大新人

芭蕉が元祿を壓してゐた所以のものは、殆比類なきその時代の一大新人であつたからであらう。

新人中の新人、殆何人も此の新しさには惹き付けられ驚かされたのであらう。今から想像して見ても國木田獨歩の出現や、子規の時代の新しさではなかつた。前代未聞の新しさであつたに違ひない。

一四 選料

芭蕉の生活費は句卷の選料であつた。貞徳が一倆を取つてゐたことは傳説であるとしても、芭蕉の選料は相應に収入があつたものに思へる。しかもそれには額の多少もあつたらうが、彼の生活費の大部分はこの選から出たものであることを忘れてはならぬ。

一五 短冊

芭蕉の短冊や書簡が比較的残つてゐるのも、無理強ひに書かされたためもあらうが、彼の在世時分からして相當の市價があり、歿後その市價が勃然として上騰したため、所藏家が大切に秘めてゐたからであらう。今は短冊一葉にすら數百金を抛たねばならぬ。しかも僞筆に至つては天下に枚擧の暇も無いからである。

蕉門の徒の短冊に至つては、残つてゐるものは稀である。路通の如きは殆絶対に無いかも知れぬ。以後今までに家藏されてゐたものゝ發表されないかぎり、絶対に吾々の眼に入らないと云つてよい。

この絶対に吾々の接することのできない蕉門諸家の眞蹟を念ふことは、限りない果敢ない氣もちであり又同時に幽遠でないこともない。

一六 「かびたん」の句

延寶年間、芭蕉三十五六歳の句に、「かびたんもつくばはせけり君が春」といふのがある。かびたんは當時のオランダ商館の主事のことを云つたものであるが、これほど芭蕉の句の中で俗流の句ひ烈しい句は無いやうである。つくばはせけり等と云ひ、將軍家を君が春などと云ひ、一代の寂びを慕ふた彼らしくも無い風俗の情に走り、媚び諂ふた下賤の心でゐる彼を見ることが出来る。自分は彼のやうな人物にもかういふ作句を考へさせた時代的な習俗に同情はないではないが、併し何たる不愉快な發句であらう。

當時かびたん輩が貢物を贈つて將軍に下坐したことは實際であるが、芭蕉までがその優越感を持つてゐたことは爲方がないとしても、併句の上にもその氣持を残してゐることは、後代の我々を不愉快にするものである。彼と雖も遺憾なき人物の完成されたものではない。併し此の發句の上に現はれたものは吾々の信ずる芭蕉として受取りがたいからゐる、最も彼の彼らしくない凡俗の彼を代表したものである。併乍ら、此發句に據つて元祿時代のかびたん趣味がいかに流行してゐたかど

分るやうである。

一七 理解

芭蕉を理解することは總ゆる元祿の文獻を獵ることではない、彼の氣質に近い人間が自然に彼に惹かれてゆく心を云ふのであらう、もう一言いへば彼を理解する前に己の分を知らねばならぬ。己の分を知るものは、芭蕉の中に這入ることが出来よう、單なる彼の發句の解釋は文字通りの解釋となる前に、自分等の心の向きと彼の心の向きとの、^は秀が揃はねばならぬことだ。

人間ができてから芭蕉を理解せよといふのは、勘くとも十匁を秤るものはそれだけの品物を持たねばならぬ謂ひでもあるのだ。秤にかけられぬものを持ち合せてゐても、それは叶はぬことではないか。

一八 鶯の句

芭蕉の句の中には、最う一步あとへ退いたら千仞の月並の谷間へ墜ち込むやうな危い句がある。彼の高雅と幽遠との砦を守るべき句の中には、僅かな微妙なつながりを有つてゐるだけに、一步は月並の陳腐へ、一步は高雅幽遠の城廓に引つかゝつてゐる句がある。それでゐて月並へ墜ちないで

立派なつながりを見せてゐる。

鶯や雀よけ行枝うつり

芭蕉

此の句の精神、動きの危なさは、心なきものをして鶯の高雅はその心に雀を避けるやうに考へ至るであらう、そして陳腐だといふかも知れぬ。しかし此場合の鶯の枝移りしてゆくありさまには、雀とは全で違ふた素質の上からの枝移りである。微妙な鋭さ、當然別途に就くべきものゝ小氣味よゝい優越された氣持が、鮮に目前にある。併乍ら斯様に高雅な句であるにかゝはらず危なさを一層伴ふてゐる。

芭蕉のうまさや高さ奥深さは、實に斯様なところで何時も美事に完成されてゐるのである。名人の心はかういふ危さの上に確つかりと坐つてゐて動かないのだ。土俵ぎはで持ち應へる力である。假りに自分らが此の材料をこなすとしても、かういふ危い表現はしないで、安らかに詠んでしまふ。少しも月並の臭ひや憂ひのないものに作つてしまふだらう。併乍らこれだけの表現のうまみを残すことができない。

この句は寫生から這入つて行つてゐるやうであるが、その動きの幽さ美しさは春寒のまだ芽のない楓か何かの、鋭い枝の間に動いて見える鶯である。觀念の句も多いが此の句には何等の意圖がなく、からりとしてゐて氣もちの高い張りをも句の裏に窺はせてゐるやうである。

一九 竹植ゑる日

此間からあとさき三度ばかり庭に竹を植ゑさせたが、三度とも晝深く夕方に近いところに風が出て来て、竹植ゑると風が出るのが我庭の歳時季のやうに思はれた。自分は芭蕉の竹植ゑる日の文を思ひ起した。

「ばせを植てまづにくむ萩の二ば哉」の如きは、その氣持の細かさは解るのであるが、芭蕉としての心のしをりの沁み出てゐない句である。かれの失敗にはぬけ道はあるが、「かびたん」の句のやうに、千古の悪句となることが無いでもない。

二〇 「一つ家に」の句について

奥の細道の句、「一つ家に遊女もねたり萩と月」は、小説的な哀愁のある句である。遊女が隣の間にて一と晩ちう老いたる附添の女と物語つてゐる有様に、眼冴えて眠られないでゐる芭蕉は、同じ心でゐる同行の曾良を顧みて、自分の力では女をどうも救へないことを嘆いたであらう。

女が芭蕉に身のありさまを掻き口説いたのは、行脚姿の芭蕉を僧都だと思ふたにちがひない。普通の旅行者と見てゐたら幾ら遊女になる女でも、容易には身の上を話すものではなからう。片雲に

身を委す僧と見るのは當り前のことである。彼の姿とその顔容、または物の云ひ振りの閑かさは、我々がその當時見てゐても僧の外のものではない。

芭蕉がこの女を振り切つて去つたのは、女が美人で無かつたのに原因するかも知れないが、それよりも肝腎なことは、情に惹かれても身の及ばざることを知つてゐたためであらう。彼の經濟的生活には女を救ふだけのものがない、彼はよく自分を知つてゐるものであつたらう。進んで宜い加減なことを云はないで去つたのは、やはり情に惹かれてもその情に沈まない確さを持つてゐたことが分る。

二一 擬芭蕉手簡

杉風宛

先夜失禮致候其の節の忘れ物唯今次郎兵衛に届致させ候間落手被下度、乍序夜來の春雨の爲め少雨漏難溢致候、此前雨漏候ひしより何の加減にや久しく其事無之候ひしが、昨夜來急の事とて手の付よう無、屋根方丈八に言上願上候、乍序先般の羽織の御禮内室に言上被下度右まで以上。ばせを

北枝宛

御手簡辱く拜受、その節の御禮中上べきところ歸庵早々の疲勞にて諸方御無音に打過御許被下度

候、御地風光まだ眼前に有之、野田山の松籟、蟬の啼音も今に忘難く存じ候、殊に野田産の茸お送
被下、丈草諸共珍重致候、丈草も又御地一遊の有心と申居候へ共、此儀披露下さるまじく候、

末筆乍、牧童、句空雅丈へ宣傳申可被下候、萬子よりも先日音信有之、風流祝着に存居り候。

ばせを

去來宛

貴墨恭拜受、後頃より參上可致候、御内室に宜敷申傳被下度候。ばせを

萬子宛

先日一笑より水鶏笛贈越し殊の外興多く存中候、貴様御手翰に據ば河鹿笛なるもの御地に有之候
由、鳩笛と又同様の物ならんと存ぜられ申候。

お示しの發句三誦致候、風雅のしをり靜かならんもの殊の外喜入候。

金澤行脚と生駒萬子

「奥の細道」一考

一

元祿二年三月の下浣に江戸を出處した芭蕉は、奥羽行脚を終へ、越後から越中の海べりを通り、
俱利加羅を踰え、加賀金澤の大樋口へ着いたのは稍々秋風のそよぎを稻田に見られる七月の中頃で
あつた。同行の河合曾良と共に長途の旅寢の露に顔容いとゞ疲勞してゐたが、奥羽山川を跋涉した
芭蕉は自ら何物かを、その容貌に加へられてゐた。山川を獵るものゝ絶え間なき新鮮な幽情が芭蕉
の面眉を壓してゐたことは當然であらう。

早稻の香やわけ入右は有磯海

芭蕉

越中黒部の吟詠であらうと思ふが、前書には加賀にてとある。「有磯海」「卯辰集」には越中の吟懐
になつてゐる。越中から加賀に踰えるには俱利加羅峠がある。ともあれ荒磯づたひに加賀近い平原
に入つた氣持は明かである。

當時金澤には、秋の坊、牧童、北枝、萬子、小春などが主になつて芭蕉歡迎の宴を開いた。餘程

數寄な凝つた料理を饗應したものらしい。今でも金澤の料理には傳昔の佛を傳へる凝つた獻立が町家にさへ残つてゐる。森八などと云ふ菓子屋には二百年來の製菓の記録を藏してゐるやうに、料理も大藩の奢と風習を有つてゐるのである。伊賀を故郷に持ち江戸の陋居に貧しい暮しをしてゐた芭蕉は、鴨の焼物や犀麻の鮎、卯辰山の柴茸やあぶら鱈のお汁、河豚の鹽漬や胡桃の煮付などの數々の料理には、有繋の芭蕉も驚いたことであらう。北枝兄弟の熱心な調理振り、信長を先祖に有つ生駒萬子の肝煎、加ふるに宮竹小春の主振りの幹旋には、芭蕉も人の好意と自分の心のあるところが添はないまでに、暫くは物も云へないで坐つてゐたであらう。溫和な人である故にすぐにはその幹旋を斷りにくかつたが、併し酒肴一巡の後に芭蕉は斯う云つてゐる。

「今宵の馳走のもてなし大名方の高膳の如く重々し。我をもてなさんには一碗の粗菜と一膳の飯にてこと足れり。何ぞ珍味を選び山海の魚菜を望まんや。後の日の會にはかかる心づかひと無益の費ひは必ず仕給ふな。」

それ故後の吟會には粗菜をあしらふた茶漬料理を出したのであつた。芭蕉はこれこそ我望むものなれと云ひ、懇しげに加賀の油揚げを喜んで食べ、秋茄子の鴨焼に舌づみみ打つたのであつた。

芭蕉は油あげや豆腐、就中、蒟蒻の類が嗜きであつた。梅石（此人物の存在は餘り信じない。）宛の書簡の中にも、「昨日は御法事相濟一段候其節之油あげ殊外味わすれかね候、御座候はば少々もら

ひ申度候以上。」と油あげを重ねて懇望してゐる。又、「今晚でんがく被致候よしかたく御やき頼入候、出來次第御遣可被下候。」又、「とうふ汁よろしく候間今晚は頼入候出來次第御遣可被下候。」その他「まんぢう七つあぶら上げ五つからし三文御こし頼入候。」庄八宛。「以上翁反故。」それ故、金澤の常揚物料理は特に氣に入つたのであらう。恐らく油あげや蒟蒻の類も膳の上に並べられた様に思はれる。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

（小文庫）

（若菜）

（もとの水）

句による蒟蒻には一道の風雅な味を含んでゐる。芭蕉の食物好みの中にも、何やら優しい粗食の中に風色を帯びたものが感じられる。食物の好みとその人がらの心の容子とは、結び合せて眺めると自ら釋然とするところがあるものである。

「諸禮停止は風雅の舊制也、何の謝する事やあらん、みなく、近う圓座し給へとて、茶漬一二椀さらさらと打したゝめ、風雅は斯くこそあらまほしけれ、すべて酒食の奢に隙を費して俳諧の味を忘るは、遊里、戯場の物ずきにして、風雅の席には無下なり」（遺語）

芭蕉はもう四十六歳を數へてゐる。猿蓑集完成の二年前で、一見、その風格の中に迫かな眺みが、

晩年近い故か、冴えて人の面を打つたらしい。温厚の中にも得も云はれぬ氣高いところがあつたと去來が絶えず口にしてゐたことも眞實であつたらしい。當時金澤俳人の眼からは或は神の如く見えたくも知れないのである。萬子はその折に書いて貰つた「南無當來佛」の五文字軸を朝夕に拜してゐたさうであつた。「干綱集」にも芭蕉を夢見て神の様に書いてある。——殊に田舎の謙遜の心を持つ秋の坊や北枝、小春の徒が、平常から尊崇的にしてゐた芭蕉と對坐する時に異常に敬遠してゐたことも思はれる。「みな／＼近う圓座し給へ。」と芭蕉が改めて挨拶する程、かれらは疊を隔てて遠坐してゐたものらしかつた。師弟の間には嚴格な人であつたが、（これは故意としてゐる譯ではなく、自然に彼等門人が作つた雰圍氣ではなかつたか、芭蕉自身の中にも曲つた事、正直ならぬ事、禮節を外にした事等を嫌ふた徳があつたためであらう。芭蕉庵の壁紙に句作の折に柱に靠れぬ事、人の煙草を喫まぬ事、他人と話を交へ句作の邪魔にならぬ事等が記されてゐて、出入りの人々は自然にこれを守つてゐたさうである。）それでゐて或る程度までの溫柔を保ち乍ら、却々その底が分らない或る一點の深さをも持ち合せた人であつたらう。丈草去來、嵐雪其角の輩をはじめ、鬼貫一徒、そして全元祿の年代を擧げて誰一人として芭蕉を誹る者がゐなかつた程の晩年に、人望と徳と畏敬の的であつたのも、その心がけの眞摯さ温かさ嚴格さに人々の心を惹きつけたものであらう、武人に之を求めても徳川の如きものではない、己が門をつくると云ふことなく、また他門をそしり侮る

こともしなかつた。貞徳宗因の諍ひをも芭蕉は靜かに眺めてゐただけである。宗因なくば今日の俳諧なしとまで彼は云つてゐる。

二

ともあれ彼の如く子弟の間に厚く念はれ敬はれたものは、殆、較べるものも持たぬと云つてよい。今の世の師弟の道廢れ世態人情の澆薄さにくらべると、皓然たる鏡の如きものがあつた。昔の人の律儀さを思ふ前にあの人の徳を知りたいのである。

芭蕉は金澤俳人の中に既に小杉一笑が亡くなつたことを知り、一笑の兄と追善の一巻を残した。

塚も動け我が泣く聲は秋の風

芭蕉

一笑は芭蕉と交通があり一笑も芭蕉に會ふために楽しんだが、芭蕉がまだ行脚の一年前に一笑は亡くなつたのである。

「加州金澤の一笑はことに俳諧にふけりし者也、翁行脚の程、お宿申さんとして遠く心ざしをはこびけるに、年有て重勞の床にうち臥しければ、命のきわもおもひとりたるに、父の十三回忌にあたりて、歌仙の俳諧を十三卷、孝養にとて思ひ立けるを、人々とどめて、息もさだまらず、此願のみちぬべき程には、その身いかゞあらんと氣づかひけるに、死すとも悔なかるべし

とて、五歌仙出来ぬれば、早筆とるもかなはず成にけるを、呼よびに成ても猶やます、八卷ことな
く満し足りて、これを我肌にかけてこそ、さらに思ひ残せることなしと、悦びの眉重くふさが
りて、

心から雪うつくしや西の雲

一笑

臨終正念と聞えけり、翌年の秋、翁も越の白根をはるかにへて、ノべつ松が家に其餘哀をとぶらひ
申されけるよし。(其角、雑談集)

一笑を旅に追善する芭蕉の深切な心は當時の加賀俳人の心に美しい餘映をあたへた。その他、秋
の坊と北枝の間が何時も口争ひの絶えなかつたのを、同好同門の睦みを解いて永い間の犬猿の中を
和らげたことも、遺語集に掲げられてゐる。

併しその時代に屢々あつたやうに、金澤俳人の中に唯一人、貞門を固守して芭蕉來錫の折にも會
はなかつた男があつた。山茶花友琴といふ人で、頑固に門を閉ちて芭蕉と交友しなかつた。芭蕉は
その事を聞いて友琴の心あるところ、人その門に隨ふことの清節を愛したさうであつた。一代の芭
蕉を向ふに廻しての友琴の押し強さもさることであるが、性格的に金澤人には左ういふ頑などこ
ろがあつた。自分は友琴のその心を嗤ふことはしないつもりである。何故と云へば當時北越の俳雅
の士は皆一堂に參集つて、麻の川の畔で親しく天下の芭蕉と談を交へたからである。秋風のそぼ降

る草庵に坐り乍ら辭して俳席に列ならなかつたことを思へば、友琴もまた淋しく切ない男であつた。
(友琴死後、その追悼句集「艶賀の松」の中に北枝の句が載つてゐるところを見ると、北枝も友琴
死後にその追悼の句に各でなかつた事、芭蕉來錫の折に出席しなかつた事などの不愉快を解いたも
のである事、いかにも北枝らしい恬淡な氣質で交友してゐたことなどが解る。)——北枝は行を同じ
うした曾良と、芭蕉が金澤を辭し去つた時も、越前丸岡まで同行して別れを惜んだ。金澤では芭蕉
と野田山に一遊して、松籟と茸狩の半日を送つたが、北枝は蚊やつり草とはどういふ草なりやと芭
蕉に尋ねた。芭蕉はあたりの雑草から黄葉の雜つた蚊やつり草を尋ねあてて、北枝に示したさうで
あつた(遺語集)。北枝は「翁にぞ蚊やつり草を習ひける」と即吟を残した。芭蕉の北枝を愛したこ
とは、山中の桃妖に劣らなかつた。北枝も師叟を慕ふこと深かつた。

丸岡にて翁に別れ侍りし時扇に書き給はる

物書て扇引さくわかれかな

吹うて霧にきほひ出ばや

秋涼し手ごとにむけや瓜茄子

芭蕉

北枝

芭蕉

句選年考によると、西の雲集に松其庵樂會即興と有、残暑しばしとある。韵塞に訪草庵と前書が
ある。花の古事集に小幻庵にて「残暑暫し手毎にれうれ瓜茄子。」とある。おくの細道にはある草庵

にてとある。

此の一句でも解るが、殆金澤の名物は大半食べてゐるやうである。此の瓜茄子と芭蕉との比較は金澤の光景らしく興深く思ふた。

翁を一夜ととめて

宿るまでの名残なりけり秋の朝

あたら月夜の庇さへぎる

初嵐山ある方のはげしくて

江ぶちのりこす水のさゝ魚

小春

芭蕉

曾良

北枝

此の連句を見ても、小春の庵か或は野田の東雲寺かに芭蕉が泊つたことが判る。「初嵐山ある方のはげしくて」は今の野田山のことであらう。

金澤を辭し去り野々市の里から松任の村落に入らうとした芭蕉は、途上の見送りに遅れた生駒萬子が、裸馬で松並木のある往還を馳けて來るのを見た。萬子は千石の祿を載きお馬廻りをしてゐたので、馬を縦横にこなすことが出來たのである。そして加賀絹一反と、金子三兩を惜餞の贈物として芭蕉に捧げたが彼はそれを受取らなかつた。一簞一瓢の樂しみを説いた芭蕉は、自分の生活に餘裕を置くことを嫌ふたらしかつた。萬子も任げると云はず芭蕉の心のあるところを心とした。(生駒

萬子、世祿千石を襲ふ、馬廻組、芭蕉行脚の元祿二年には三十六歳、享保三年北枝が歿した翌年六十六歳で死去してゐる。)萬子の年代を擧げて見ると、當然たる元祿の大家の死生往來が分る。

承應三年 生駒萬子生る。服部嵐雪、宮崎友禪生る。

明曆三年 森川許六生る。

萬治元年 前田利常卒去。

萬治三年 榎本其角生る。

寬文五年 渡邊支考生る。

寬文十二年 僧浪化上人生る。

延寶元年 世祿千石を襲ふ。

元祿元年 小杉一笑歿す。

元祿二年七月中の五日、芭蕉來錫。

元祿七年 芭蕉卒す。

元祿十五年 千代女生る。

元祿十六年 浪化上人歿す。

寶永元年 去來歿す。丈草卒す。

寶永元年 支考、金澤に來る。

寶永二年 季吟歿す。

寶永四年 寶井其角卒す。服部嵐雪歿す。

寶永五年 支考來北。

寶永七年 惟然卒す。

正徳五年 許六歿す。

享保三年 北枝卒す。

享保四年 萬子歿す。(時に六十六歳。)

萬子はそれ故「翁は諸國に門人みちて其道の融通は事たりぬべし、我は方外の友と成て、あまねく俳諧を守護すべし」(一葉集)と云ひ、騷人詩客を暗にねぎらうてゐる。秋の坊、北枝に助成したこと、一つは芭蕉の心に感じたからもあらうが、餘財自ら事足りたからであつた。芭蕉は金錢に恬淡であつたことは、恬淡でなければならぬ事情があり、特に金錢を得るに道も無かつたからである。

三

芭蕉庵の柱には一つの瓢が吊されてあつて門人等はその中へ勝手に米を入れては去つたものと云はれてゐるが、之は實際の事であつたらう。杉風や許六の心づくしもある。併し芭蕉は貧窮一錢も得ないで机上幾帖かの料紙を用意したり、時折々の着衣の好みも衣裳の上に現はれてゐるのは、恐

らく平常金錢の事を口にしない人であつたからで、心ある人は自然に喜捨したものであらう。着物は茶が加つた濛い色を好み、食物は凝らぬ野菜を友としてゐたやうである。そして寝るには薄い布団が一枚、枕一つあれば事足りる人であつた。又俳諧に身と魂とを預けた芭蕉は當然貧乏を心得てゐたので、人から見る程苦しくはなかつたのであらう。却つて彼こそは一顆の冬瓜を得て夜寒の部屋で沁々と楽しみ眺め、そして明日も明後日も安閑とそれを食べることを思ひ、その日の俳道をしんだ人であらう。明日を分らぬ暮しであつた爲め勢ひ金錢に拘はらず、その事は不自由ながら杉風その他の門人等がして呉れたのであらう。それすら芭蕉の氣もちに入つてゐても、芭蕉は黙つて受納してゐたに違ひない。貧故に謹しみ、貧故に物貨の欲をあらはさず、貧故にこそ一生食べられた幸福の眞髓を舐めた人であつた。併し彼が日夜の窮乏は彼ならでは知る事の出来ぬものがあつたらう、人知れず己の貧乏に姿を亂すことは無かつたらうが、心、鬱屈したことは屢々であつたであらう、併し俳諧はその鬱屈を正したことは實際であつた。市に草稿を賣る文學修業時の貧窮も、屢々その作をつくる時に可成の慰めを得る様に、彼もその一途にあつた事が首肯されるやうである。彼の羈旅の費用は杉風や許六、丈草などから出てゐる事、また史録に現はれぬ篤志家の獻金による生活の事等を思へば、江戸へ出てから何一つ世間的仕事(水道工事のことは問題ではない。)をしな

併し金銭の上から芭蕉が世上俗流の批難を一つも受けてゐないところから見れば、その人がらの中に世情人心の口を塞ぐやうな高潔と清純を併せ有つてゐたことが、今から考へても自ら首肯されるのであつた。常にどういふ意味からも人々を感嘆させるやうなところ、常にとうてい及ばない人格の何物かを有つてゐるところ、常にあまりに物事にこだはらぬところ、人のものをも自らの物をも區別しないやうな生活、それでゐながら俳道の事は一步もゆづらぬところ、心の問題は常に燈明のやうに胸に持つてゐたところ、凡夫にさへ何かの意味に於ても偉さを刺し徹してゐたところ、時として近づき易く又時として近づき難い畏敬を窃かに人の心に起させたところ、柔和と端嚴と交へてゐる物靜かさ。さういふ數限りない一切のものを有ち併せてゐる人格であるらしかつた。一寸見れば親しみ易く二度目には氣難しく、次第に親しむごとに一枚づゝ殆無際限に己の心の皮を剥いで見せるといふ人がらでもあつたらうか？——路通を破門し乍ら又彼を再び愛し慈しんだ心は、徒らな温厚を賣物にした人でないことが解る。

萬子の餞別を辭した芭蕉であつても、金澤逗留の費用は金澤俳人が持ち寄つて負擔してゐる。それは當然の事であらうが、さういふ氣持も交つて斷つたのであらう。旅中多端の芭蕉が恬淡にその事を斷つてゐるのは、彼の氣質が、どういふ時にも弛まないでゐたことを證據立ててゐる。どういふ時にも隙間のない批難のない言行動勢をしてゐたのは、自らを謹んでゐた以外、多くは彼の木質

がさう常に彼を行動せしめたものである。氣質に靜寂を、行爲に清閑を、友愛に端嚴を、師道に眞實を、恩愛には優柔を兼ねてゐたところの、純日本人風の代表的な氣持をあれほどまでに完成した人は古來少數ない。利休の清閑には霸氣と凜才とがあつた。秀吉をさへピリツとさせる苦蟲を胸底に持つてゐた。併しその人がらに何故か風流人としての止み難い型があつた。

何の木の花とは知らす匂ひ哉

雲折々人を休むる月見かな

芭蕉

同

宗祇や杜甫に淑した彼が、何時の間にかずんずん先へ伸びたことは、芭蕉の中のもの立勝れてゐたからであらう。芭蕉は人の句、人の歌の心を盗むことに於て大膽不敵であり、そして盗まれたものよりもすつと上にゐるのは、彼が絶世の詩人であつた所以であらう。凡庸の徒は人の作を踏み且つ盗むことすら知らない。——

芭蕉と詩について

元祿時代にもなほ新體詩といふ今の詩の一形式が存在してゐたら、あるひは芭蕉は新體詩をも書いてゐたに違ひない。今の世に彼が一青年として存命生活してゐたら恐らく第一流の作家でなければ、古今を絶した大詩人の面影を持つたであらう。幸か不幸か彼は元祿の大家だつたから、特に彼を現世の文學者として數へる必要はないが、彼の新鮮無双の利器は現世の文學に存在してゐたら、どれだけ我々を驚かせる大作を書いてゐたかも知れないのである。

彼の英才と今ある文明との存在は、恐らく嘗て我々をして舌を卷かせた元祿時代の彼をして、一層新鮮無敵な表出を以て迫るであらう。何人も彼の前に跪座せしむべき一大壓迫としての顯れを見るであらう。

彼をして飛行機や自動車の今の世を墓下から垣間見させたら、彼は溫藉の微笑を浮べていふであらう。「わしもそれを考へたこともあるが、人々は笑ふであらうと思ふていはなんだ。」

そして我々は「この秋は何で年よる雲に鳥」の幽遠を思ふ時は、飛行機などの發展は實に遅れて

ゐるとしか思へない。

何人も芭蕉を有名なる作家とせず、既成的な大作家としないで、もう一度朝暮の我々の讀物として愛誦したら、彼を一層愛することができよう。あらゆる芭蕉的文獻の歎賞の前に一個人づゝが、ひそかにこの作家を個人的に楽しみながら讀むことは、決して無益なことではない。――

假りに彼から枯淡を抜き、風流を去り、さびやしをりを掃き出し、吾々は新文學としての彼の存在や、彼の意氣や、新鮮や、雲霧を睨むところをもう一度見直して見るのも、決して我々の親密を過つものではない、――そして我々の始めて氣付くことは、實に彼が新文學の要素を驚くほど豊富に我々に感じさせることにおいて、我々は彼を見直したことの徒事でなかつたことに心づくであらう。

芭蕉は誠の發句を開祖した。それよりも以前、彼は人間の心にあるもので、あれほど永い間隠れてゐた靜さを、あれほど永い間かゝつて現はし盡した。

自分は神を信じることができないが、芭蕉を信じることが出来る。かう云つても自分は別にこの「信じ」方について、誇大だと思はない、一つは神がどれほども自分に働きかけないけれど、芭蕉の働きかける力が大きいことを證據立てるに外ならぬ。神はいふであらう。

「あの男にはおれより芭蕉が偉く見えるなら勝手にさう思はしておけ。今に目が覺めるだらう。」

自分には今に目が覚める時があらうとは思へない。一日づゝ彼が好きになる外、一日づゝ彼に深まる一方であらう。

芭蕉句解

一 元祿の春宵

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

芭蕉

元祿元年の春宵、初瀬の觀音に芭蕉は前の十八日の縁日に抜けた參詣を、あとの平の日に詣でた。春も半ばの程で、心も落着く温かい宵の口であつた。芭蕉は社寺に詣ることが好きなのは、性來の物珍らしさに就く心でもあつた。境内の櫻も仄暗い中に立つてゐる、——内陣に二對あるぼんぼりも柔らかい藍色の間を白う浮かしてゐる、芭蕉はかういふ景色にいつも單調を發見してゐた。彼の新しい物の見方は稍々ともすると平凡な幽遠にそむいた心でゐたが、今夜はそれにも拘はらず或物優しい親しみを感じた。

それは堂の隅の上敷の上に先刻から物音も立てないお籠りの人を見出したからであつた。御明しはお籠りの人へ漸つと到いてゐるくらゐの暗さだつた。女人である證據は髪に一層の黒みを帯び、

横顔の白うたよやかな有様でも解るのであつた。彼女は低い殆聞き取れない程の小聲で、詠歌のやうな誦經を絶えず口の上にのぼらせ、時々頭を垂れては禮を致してゐた。物淑かさは静さの中に乳を黠ぐやうな一種の物惱ましさを放つてゐた。芭蕉は却つて平日の日に詣つたことを仕合に思つた。

彼は境内に暫く佇んで、更けゆく春宵の音に耳を澄してゐた。先刻から氣が付かなかつたのであるが、堂の前の樹の根の上にも、お籠りの人がもう一人ゐることを見出した。そこは全くの深い闇であつた。それにも紛れない女人の生白い容顔の在りかは、さういふところへばかり到く星明りの中に却つて瞭らかに浮き上つてゐた。芭蕉は或る恭愼の情と遠慮の心とを併せて感じた。彼は物靜な足どりで境内をそとに向いて歩き出した。彼の心は嚴しい程でもない物優しい壓迫を感じ、一刻も早くこれらのお籠りの人々のさまたげをしてはならぬと思ふのであつた。

彼は物ゆかしさを感じたのであつた。女人の性情の外に或る幽遠に限取られた美しさを、それが彼の心に永年働きかけてゐた人と未來への考へを結び付けた。彼は左ういふ考への中に自身の沈潜を思ふことは、常に否まれぬ歎びであつた。何を祈り何を女人が願ふてゐたかは知らない、唯、彼の見たものはゆかしさの底にある美しい姿であつた。人間の心がなびいてゆくところの清らしさで、それが宵のほどであるのに有明しのひのやうに新しく映つてくるのである。

芭蕉は香氣の高い春宵の路上へ出て、灯の更ける初瀬通りを眺めた。

二

春の夜は櫻に明てしまひけり

芭蕉

「いもやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ」(恒躬)「新古今」

花時の明るさは夜も罩められる明るさである。何となく氣候のせいだか寝られぬ床の中に彼は居た。そして彼の思ふことは寢床の中の何時もの埒もない空想事であつた。四十八歳の芭蕉の心を往來するものは、天下の俳諧道でもなければ又己れの大成を思慕するのでもない、——唯、彼にもやうやく人を厭ひ他の情を思ふことに疲れるばかりであつた。自ら老い、自ら年とることに生きる物憂い心が、次第に彼の夜々の思ひに加はり惱ましてくるのだつた。彼はそれを自ら解かうとしながら何時の間にかうとうとするのだつた。

世は春でカラリと晴れ明けた空には、却つて秋夏の靜さ以上のものがあつた。明け方の中にこの古い櫻のたゞすまひを縁取り、この櫻の明るさが誘ふあかりは、一さう清く穩かに心に残るのであつた。

草臥て宿かるころや藤の花

芭蕉

大和丹波市の里に近づいたころは、旅好きの芭蕉もほとほとに疲れてゐた。村里にはまだまだ灯は入らないが、晩春の大和路には烈しい木の芽時の空気に強い刺戟さへ襲ぎ當てられるほどだつた。暖かい雑草と埃とに蒸された草鞋の底はいきれて熱かつた。

「丹波市の泊りにしやうか？」

芭蕉は尾張から伴ふた杜國をかへり見た。美青年の佛ある杜國は芭蕉よりも先きに草臥れ、右足を引摺つてゐたくらゐであつた。

「わたしもすつかり疲れました。」

路上に奥大和からの駄馬が落して行つた糞さへ、乾いて埃白いほど蒸しあたたかい日であつた。宿は往來から入り込んだ茶店も兼ねてゐる旅籠屋であつた。馬の草鞋に駄菓子を鬻ぐ店の間も埃

だらけだつた。洗足に立つた芭蕉は、掘井戸の冷たい水に足を浸しながら、手を額のあたりに動かし旅の具の始末をして居る杜國を差し招いた。

格子型に編んだ竹の棚から垂れた藤の花が、虻と蜂の唸り聲の中から美事に咲き揃ふてゐた。

「だいぶ老木らしいぢやないか。」

根の幹は太く巖丈だつた。芭蕉はその明るい花の下に立つた。

「水も好い水ですね。」

杜國は冷たい水で草鞋を濯いだ。芭蕉は何時でもその日の旅の草鞋は洗つて木にかけて乾かすのが習慣であつた。杜國は師の次の枝に、草鞋をかけた。「かうして早めに宿をとるのも落着いてよいものだ。」芭蕉は花の下を去らずにゐた。

宿の女が手拭を持つて來たが、二人が濯ぎを済したあとなので笑つて引き返した。

二人は部屋へ通つたが、垣の前に無雑作に束ねられて此處にも藤の花が美しく咲き垂れてゐた。まだ灯に早く併し宵の程に近い、蒼みを含んだ薄煙が庭樹の間に漂ふてゐた。

頭陀物語に、「或人翁に物語りけるは、貴坊は宗祇のあとを追ひ雲に別れ水に伴ひいづちを宿と定め給はず、行脚いづれの目かをかしかりし。翁ほ、笑み給ひて、『旅せぬ人はさこそ思はめ、行脚は苦樂を翼とす、』……と答へたり。」

笈の小文に、「よし野行脚の時の句にして、その紀行の文に曰く、旅の具多きは道のさはりなりとて物皆拂ひすてたれども、夜の料にと紺衣一つ合羽やうのもの硯筆紙藥に畫筒など物に包んでうしろに背負ひたれど、いとど脛弱く力なき身のあと様にひかふるやうにて道なほ進まず、只ものう

き事のみ多し、とありてこの句見えたり。」

長日の趣を詠る歌、「夕ぐれにおもへば今朝の朝がすみ世をへだてたるこゝちこそすれ」有家。

四

芭蕉は江戸座の其角に誘はれて、春宵、芝居の柵の中にゐた。芭蕉は子供のやうに歡んで小屋の中の美しい空気に懇しんだ。双柳の袖を振る女や、女を取巻く芝居小者の愛想振りにも何等の反感を有たなかつた。彼の面容に浮ぶものは絶え間もない微笑であつた。其角は心ひそかに師の心がかういふ空氣の中にあることをも、平氣であるのに驚いたくらゐであつた。其角の最つと驚いたことは、この喧騒の中にある師の落着き振り、決して調和を破らない濫い雜鬧を制してゐるやうなその表情であつた。酒席往來の烈しい晋其角の心に重りかかるものは、芭蕉が喧騒の中にある益々靜さに透つてゐることであつた。

小屋を出て二挺の駕が深川を指して行く途すがら、芭蕉は垂れの内から、

「けふは氣苦勞をかけて濟まなんだ。」と云つた。

「師匠こそ退屈なされたせう。」

「わしは面白かつた。」

芭蕉はこれ以上話さなかつた。駕屋の草鞋のひたつく音ばかりで、二挺の駕の垂れはお互ひに上らなかつた。其角は今日少しも芭蕉が退屈さうな容子や、故意とらしい風流人の勿體をしなかつたこと、名もない江戸座の末弟にまで手厚く挨拶を返したことなどを思ひ返したが、實際芭蕉は心から芝居を面白がつたのだらうかと、何か怪しまない譯に行かなかつた。ハネ前に芭蕉は酷く疲れてゐたので、其角は何度も途中で小屋を出やうかと誘ふて見たが、芭蕉はハネるまで柵を出やうとしなかつた。平常から丹念な人ゆゑ、感興を殺ぐやうな野暮をしない用心を思ふと、其角は師翁の心を弄々と感じ入るばかりであつた。平常感じないものをも自然に加へられて來て、其角は今さら師翁の何物かに壓迫されてゐた。二挺の駕は別れた。

芭蕉はその翌朝——明方から生暖かい雨が庵のうしろの古池の涸れた乏しい水を動かしてゐるのを見て、なほ頭が草疲れてゐることを感じた。からだの弱い彼は生暖かい雨に物憂く眼を遣りながら、自分の健康があゝいふ場所柄に適し兼ねることを思ふた。其角には話さなかつたが彼はもうああいふ柵の中に坐ることに、甚だしく憊れることを経験した。

併し芭蕉は今朝見る庭先の風情に、何時もとは變つた或る複雑な氣分の入り込んだ景色を見入つた。雨にぬれた枝、池のまはりの枯草に雜つた青い草や莖、近隣の誰かゞしてゐる話し聲、それらは疎らな寛滴のひまひまに傭い或る單調さで、何時までも動かないで續いてゐた。彼は頭が疲れて

あるせいであらうかとも思ひ、生暖かい雨のせいかとも考へたのであるが、結局何も考へ當てられなかつた。唯、物憂い、ねばり氣のある風景は、刻々に春を過ぎ、青さを増して行くやうであつた。

春雨や蓬をのばす草の道

芭蕉

五

湖水眺望

唐崎の松は花より臙にて

芭蕉

「或人云、花よりは花から也、比良の高嶺の花から續きて松も臙にてよろしとの吟也と此説は其角支考が説にそむけばいぶかし。」(句選年考)

臙のかゝつた宵更けたころの、松の葉の光が妙に仄白い——花時の眼をあやなす松のまぼろしかも知れなかつた。湖水は穩かな臙の中の月を溶いてゐる。松は暗いが湖水の明りの這ふてくるのと、薄月とに浮き上つて見えるのだつた。

芭蕉は堅田の千那の庵にゐた。(晋風氏説) せいの矮い垣を越えるものは、下這ふおぼろげな明りで、穩かさは百年の昔と渝らなかつた。彼の心を往來するものは、昨日と今日へ互る輪廻ではない、片雲に身をまかすものゝ妙な傷みやすい心だつた。彼は垣の外へ出て歩いてゐる内、いつもの空虚

な心もちを發見した。彼は何も考へてはゐなかつた。唯、茫々たる風景の内に魂のないやうな彼を發見するのであつた。

二 お子良子の梅

お子良子の一と本床し梅の花

芭蕉

貞享五年の二月の或朝、芭蕉は伊勢大神宮に詣でた。梅の季節であるのに神垣のあたりにも境内の奥にも一樹の梅花をも見なかつた。芭蕉は心に梅くらゐ咲いてゐるであらうと云ふ或暖かい心を抱いてゐたのに、餘寒の土の上には松杉の枯葉しか眼に映らなかつた。芭蕉は幣を取換へる神司に訊ねた。

「梅の樹がないやうですが、何か譯でもあるのですか。」

「何も譯なんぞは御座いません。昔からなかつたので御座います。」

「神司は怎う答へながら、ふと思ひ出して云つた。」

「子良の館のうしろに一本ありますが、けふあたり縦びてゐるかも知れません。」

芭蕉は神司の言葉に従ふて、子良の館の方へ歩き出した。四十五歳になつてゐる芭蕉は、年

子良の館には神事に仕へる娘——まだ破瓜期前の十か十一くらゐの童女が、中の壇の神酒棚の蔭から出て来て、芭蕉に何気なく瞳を投げ、控への帳の内へ入つて行つた。大方朝の御水を棄て代へる頃であつたらう——芭蕉は館の裏手に廻り、神司の云つた梅を捜した。成程、梅が一本その蕾を綻びかけてゐた。樹は老いてもゐないが又若くもなかつた。塙土色の館の板とすれすれな枝の走り様には鋭い早春の凝気があつた。その親幹の目のとゞかないとこの苔の色が、鮮かな蒼さを日影の中に研ぎ出してゐた。

芭蕉は歩を返して館の表へ出たとき、先刻の童女が神壇へ這入つてゆくところであつた。

彼の心にはお子良子の清い姿と、梅の綻びた有様とが残つた。彼のさがした梅の香をかいだことも偶然ではあるが、お子良子の神仕へする清淨の乙女を見たことも爽々しく清らしい感じであつた。お子良子は神に仕へる破瓜期前の少女で、その初潮を見ると、もはや神事にたづさはることが出来ないことになつてゐた。それに神宮神司の娘に限られてゐたのである。梅の木がたゞ一樹だけ裏手に綻びかけてゐるのにも床しさは充分に籠められてあつた。しかもお子良子の小刻みな楚々たる歩み様に可憐以上の淑かさがあつた。

芭蕉は清淨を愛することは誰でも知つてゐる。しかも愛する清淨は一滴の清水のやうに美しい。

その一滴の清水といへども、彼らしく古苔の生えた岩が根をつたふそれである。決して掘立の泉の

やうな新しさではない。新しさに古い年月を持つてゐる新しさである。わざと求め捜ねる新しさでは毛頭無いやうである。

彼がお子良子の清い美しさに心を留めたのは、彼の心にお子良子の清さや美しさが宿りを含んでゐたとも云へる。彼が白梅を見、純眞の少女を見たのは、彼の場合偶然で無いと云へるであらう——芭蕉は女性に對しては何時も懇懇であり、懇切であつた。その心の向き方には一方珍らしい程、女性に物柔かであつた。「のうれんの奥物ゆかし北の梅」の園女についても、去來の妹の千子を愛し慈しんだこと、また凡光の妻を風流に誘ひ込んだこと、「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の奥の細道の旅の女、その他文獻に現はれぬ女性がどれだけあるか分らない——壽貞との關係にしても恐らく世に問はれてゐない懇切さがあつたであらう。彼女の死後、杉風に書き寄せて後事を託したこと許りではない。

自分は芭蕉のやうに寂しい暮しをした人が、女性に親切であつたことが自ら解るやうな氣がする。

お子良子を清い思ひで見た彼は、不惑を五年も越えてゐる年頃である。その心は人生の父以外のものではない、單にお子良子と梅との小俳句の世界であるよりも、彼が人生へ處した紋章のやうな句がらである。

三 薦着てゐる芭蕉

誰人か薦着ています花の春

芭蕉

芭蕉は寫實と心眼との二途をもつてゐる。或は寫實と心眼とが渾一されてゐたといつた方が適當であらう。彼程旨さを融けあふた人はない。旨さを嚴しい味で育て、元のやさしさへ戻してゐる。平凡へまで送り還してゐる。其平凡の美しさは芭蕉の中に大成されてゐるものだ。

奈良に出る道ほど

春なれや名もなき山の薄霞（甲子吟行）

芭蕉

芭蕉の腹の中にある眼は「白魚や黒き眼を明く法の網」のやうに、くろぐろと開かれてゐる。自分はその人の作品にはかすかながら佛といふものゝ内容を感じてゐる。

印度渡りの伽羅苦多の佛よりかどれほど佛の味ひを持つてゐることであらう。佛が佛の傳統や教祖を齎さぬ彼には、かすかながらの余の心に傳はるものは佛である。佛といふものをこの様に手近く親密に又ときに辛辣にやつゝけ得ることも佛の所以である。

佛の文字に心あやまたぬ人があれば自分と同じ芭蕉を見もし感じもするであらう。もはや彼はさういふ位置にゐてもよい。だが芭蕉は佛でなく人間だといふところに眞實の芭蕉があるとすゝる。

流の説があれば勝手である。余はさういふ余の好みらしい佛をつくつて見るだけである。たゞ佛といふものゝ類に芭蕉が入るといふことくらゐ心得てゐてよい。それほど、佛は大したものではない、芭蕉とその心や心の向き方と肩はすれ／＼になつてゐるからである。

元祿三年の春二月、芭蕉は近江の湖畔を吟遊しながら得た句であらう。幻住庵へ四月に入つたのであるから、或は膳所のあたりの句かも知れぬ。

前年の三月深川を發つて奥の細道の旅を終へたのは九月の中旬であつた。それから三年二月までは或は伊賀の故郷に行き、近國を旅しながら殆ど、落着いてゐる暇がなかつたらしかつた。幻住庵に世の俳諧の批判をさへ鎖し、自ら人に會ひたがらなかつたのも、餘りに人にあひ過ぎたいめであらう。

誰人か薦着ています花の春といふ彼は、彼自身の姿が謙遜に織り込まれてゐる。彼が四十七歳まで登りつめた心の高揚、當然辿り着くところに居るのだ。自分はこの心の高さを見きはめたいのだ。彼についておもふことはこの一つの事がらだけである。

一段づゝ積まれてゆく彼の城壁は、最早何人もうしろにも前にも従へないところである。奥の細道の長途に練られた赭顔蒼容の姿は、その心にひゞいて音を立てゝゐる。そして彼が見るものは路傍の餓人に何やら寒巖に似た、薦を着た人の内側の魂を見ようとしてゐるのだ。花下の貴人と餓人

とに何等選ぶところがないまでに、それを感じる彼の心に素直なものがあるのだ。よく噛みくたくと、一代の理想家である彼の人としての悲しみも交へられてゐる。――

何人も彼が飢と貧乏に追はれた人であることに気がつけば、薦を着たその何人か、嘗て彼の心に宿つた何者かであることに気がつくであらう。

其角は、この句は未來記であるといつてゐる。又「説叢大全」に、

「馬光が家書の内、素堂夜話開書にいふ我素隠士にこの句を問ふ、素堂答へて曰く、これはこれ片岡山の餓人なり、十二月に太子の對面ありし、歳旦にも程なければ、橋のものと乞食を見るにつけて、何となく思ひ出して吟ぜし、由翁もさいつ頃物語りなりき」(句選年考)

其袋集に「薦を着て誰人います花の春」になつてゐる。説の是非は行はれてゐるが、自分は誰人か薦着ています花の春を取る。

芭蕉は實際餓人を見たものに違ひなからう。それは花の下であるかどうかは分らないが、いつか彼の心を通り過ぎたものだ。これを貴人だとか西行流の聖人が薦着てゐるとかいふのは、あやかり過ぎるのだ。芭蕉がその餓人の心に入り交つてゐるやうな氣がするのである。寫實から自分の心境にまでいつも食ひ込ませる彼は、一息に「誰人か薦着ています花の春」と幾らか派手に詠み込んだ背丈の高さは、その氣質から打つて出たところのものであらう。高びしやなところに彼の高揚と膽

の太さと、それまでに叩き上げられた芭蕉がある。

四 嵯峨の竹

竹は葉の色や、そよぐ景色、幹の青さは得もいはれぬ涼しいものである。葉の細かい孟宗竹はやさしい葉すれを出す、矢竹や篠竹は粗い音を風の間に吹かれてゐる。どちらにしても竹の涼しさ清らかさは、自分のやうな荒唐無稽な人間にも、暫らくは耳を洗ふてくれるやうである。

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

芭蕉

平凡な讀んだだけの句であるが、竹林の多い嵯峨の景色が思ひ出される繪のやうな句である。芭蕉の句としては拙い作にちがひない。深みも寂も單められてゐないが、嵯峨日記の「竹の子や稗き時の繪のすさみ」を思ひあてると、何か心に残つてくるやうである。元祿七年彼が五十一歳の夏の句で、秋に病歿してゐる。

さゞれ蟹足はひのぼる清水哉

芭蕉

さゞれ蟹といふのは小さい鈍豆くらゐの甲羅をした、紫と赭と黒い色をしてゐる鉄の赤い清水蟹のことであらう。崖ぎはに滴り集つた清水がある、誰でも、そこで足を洗ふたり又冷たい水を掬んだりするのだ。崖の上からは雑草が頭にすれ／＼に下つてゐて、野苺の卵黄いろの實が葉がくれに

美しく覗いてゐるのが見える。……

夏のことで熱する足を清水に浸すと頭まで瞭乎として来る、いゝ氣持だ。彼はそこで手を伸ばして野苺の蔓を引いてその實を幾つも摘んでは食べて見る、野に生えるものゝ甘い温かい味ひがして来る、彼は一寸の間自分を忘れて苺の實をたべてゐるのだ、そして氣がつくと脛のところかむづ痒い感じがする、何氣なく見ると一疋の小さい蟹がいつの間にか脛を這ひ上つてゐる。彼は微笑みがひとりで上つてくることを感じ、擦ぐつたい感じはするがすぐ拂ひ落す氣にはなれぬ。この一場面の寂寞は天下の寂寞である、掻き亂すことは彼の厭ふところである。さういふ間にも蟹は段々に這ひ上つて来る、得もいへぬ哀愁の情が優しい彼の情操をつくり上げてくるのだ。彼は間もなくその蟹に手を觸れて見ると、蟹はおどろいて水の上に落ちて、脚迅く小石や齒朶の葉かけの間にかくれてしまふ、天地の寂寞は端なく破れたのである。

彼は苺の實をたべるかはりに今度はそこらの、小石や草蔭や小さい穴などに氣を付けて見ると、あちこちに泡を吹いたさゞれ蟹が小石や穴に半分からだを匿しながら、半分外側にあらはして夏の永い日あしを遠く山のうしろに感じてゐる、穩かな涼しい又靜な光景である。彼はそれらの蟹にさはらずに足を洗ひ、その指をまで丁寧に拭きながら清水を去るのである。彼の心を領するものは「穩かな夏」であつた。そして得もいへぬ可憐な愛情であつたのだ。

すゞしさやほの三日月の羽黒山

芭蕉

元祿二年六月三日、芭蕉は奥の細道の旅中、奥羽羽黒山に登攀した。羽黒山月山、湯殿山を五日間に滞り、別當代會覺阿闍梨の需によつて三山巡禮の句を短冊に書き残したのであつた。

月山

雲の峰幾つくづれて月の山

芭蕉

湯殿山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

同

そしてすゞしさやの句は羽黒山の句である。自分は羽黒山を見たことがない。併し自分は山澗の黝すんだ峰に三日月がほのかに、美しい凄みさへみせて、非常な靜さで浮き出てゐる景色に接したことがあつた。

自分は郷里の市街から四里ばかり距れた鶴來といふ町で、旅行の折に泊つたことがあつた。まだ私が十六くらゐであつたらう。大人に連れられて行つたのであるが、家を離れて泊つたことが始めてといつてよかつた。町は大河をうしろに負ひ、前に峻しい白山連峰の秀を控へてゐた。晩、そこへ出ると山の峰の方に樹々の姿が闇より一層濃い塊になり、山全體が炭のやうに黝すんで見えた。物凄といふよりも何か壓迫的な寂寞であつた。その山の上に三日月がかかつてゐて、冷然と澄ん

であつた。自分はあれほど冷たい風景を見仰いだことがなかつた。

床に這入つてからも、すぐ頭の上に暗い山が重りかかつてゐるほどだつた。爾來二十幾年、今この羽黒山の句を見てゐると、あのとときの山の感じが久しぶりと思ひ出された。羽黒山の感じも何かそれに似てゐはしないだらうか？ ほんかに懸つてゐる三日月の姿も山のもつ暗い夜の風情も、この場合涼しさ以上の或嚴しい清涼を感じさせてくるやうである。ほのと詠んだところに芭蕉らしい丹念な技巧が表はれてゐて、確かりと三日月をつかまへてゐる。羽黒山といふ名前も此夜の三日月や涼しさを一層深く重々しく落着かせてゐる。下にこの羽黒山と置いた芭蕉も、この山の名前のひびきや落着きを用意して置いたものであらう。芭蕉はさういふ處に心を止めることが得意でもあつた。

夏の夜や崩れて明し冷し物

芭蕉

曲水亭にてといふ前書がある。

曲水亭は近江の膳所にあつた。惟然、臥亭、支考の外に主人と芭蕉とが一座になり小吟を催した。その折の句である。

「芭蕉俳句研究」の幸田露伴氏の料理の説がよいと思ふた。涼しい、そして崩れやすい味の變る物であらう、そのうちに豆腐もあつたらうと思ふた。短い夏の夜の更けて行くのに、鉢の中の冷し物が崩れかけて、さすがに夜冷えを感じるくらゐである。何かの果敢ない氣もちも織り込まれてゐ

る。豆腐のやうなものもあつたかも知れない、無いとはいへない、唯、彼の云はうとしたところは、崩れてゐるところに時を示してゐるのである。

夏の夜は秋の夜々にくらべて何か果敢なく寂しいものである。彼の心もかういふところに無かつたか？ 單なる冷し物はこの場合味が浅いやうに思はれてならぬ。

閑かさや岩にしみ入蟬の聲

芭蕉

奥の細道の句である。

彼の心の透るところがこれほど深くしみ出てゐる句はない。すこしのよどみも濁りもなく、玉のやうに透つてゐる。寂寞を此處まで擱へて見れば、寂しさの姿を見ることが出来る。文學の中にこれほどの「閑けさ」を擱へたものは古今に通じて稀である。

その涼しさに徹したところには汗冷える思ひがする。この句をよむごとに自分は全く彼の前に降参してしまふ。確かりと少しのたるみもなく張つてゐる。水氣をふくんだ岩の皺や襷の幽けさ、それに目をとめてゐる彼の姿も、もはや「閑けさ」の生きて呼吸する姿といつていいであらう。

五 晝寢

ひやひやと壁をふまへて晝寢かな

芭蕉

前書に「粟津の庵にて殘暑の心を」とある。

元祿七年七月粟津無名庵の吟である。大津の木節亭で芭蕉は、支考に問ねてこの句はどうかと云つた。

「是は只殘暑とこそ承り候へ。必らず麴のつり手など手にからまりながら思ふべきことを思ひ居る人ならん。」

「思ふところ解けたり。」

芭蕉は微笑ひながら支考に恠う答へた。

句の意味はこれ以上釋く必要もない。唯、殘暑の頃で壁をふまへてとあつても、さう永い間壁を壁にあてゝゐた譯でもなく、ふとした途端に壁が壁に障つたくらの程度であらう。そして奈何にも冷々と快適な氣もちだつたことを云つてゐるに過ぎない、——粟津の無名庵は曲水木節その他の門人等が絶えず修繕して、芭蕉の泊るに委せてゐたものである。此年の秋には芭蕉は死んでゐる。その死を考へ併せると此の「ひやひやと壁をふまへて晝寝かな」の句の奥の方に、何者かの枯寂な姿が髣髴しないではない、ひやひやとは、單なる冷爽の意味以外に何者かの響や聲を有つてゐると云つてよい。

芭蕉は寫實の本體から何時も句作を建てゝゐることはいふまでもないが、これらのじだらくな晝

寝のありさまも、壁をふまへてと云つたところにじだらく以上の、物思ひや抒情がある。支考の云ふやうに壁に足をさはりながら、何かうつら／＼と考へ耽つてゐるといふ意味は生きてゐる。人間は退屈な時には足や手を無心に動かしながら、或は足で何かをふみ、手に何かを無感覺的に弄くりながら、一つ事を往反しながら思ひつゞける時が屢々あるものである。

芭蕉は當時五十一歳になつてゐる。

彼ほどの人物が絶えずやはり死の事に思ひを走らせてゐなかつたとは云へない。天衣無縫の彼ではあるが自分の身體のことに氣をつかつてゐることは、彼が旅行に出る時は必らず門人を伴にした一事でも分るやうである。併し又一面には彼ほど健康に無頓着な大食家はなかつたやうである。何時も好物があると胃の悪い癖に飽食をして、門人に止められて漸つと氣付くやうであつた。恐らく芭蕉のこの物思ひは「この秋は何で年よる雲に鳥」や「此道や行人なしに秋の暮」松風や軒をめぐつて秋くれぬ」の境を彷徨してゐたものであらう。あゝいふ人が一人である時の退屈さうで平凡な姿の中に、何者かその彼の心を全きまでに領してゐるかと思ふだけでも、一寸想像外のものであらう。恐らく百年の微風が徐に彼の身邊をそよ吹いてゐるのかも知れない。——

六 白菊

白菊の目に立て見る塵もなし

芭蕉

元祿七年九月二十七日に園女亭で（岡西一有の妻）芭蕉をはじめ園女の夫の渭川、支考、惟然、酒堂、舎羅、何中と一席の俳筵を催した。當時典雅で清やかな美貌と淑かな物腰とで、諸俳人間の交友の心を和めてゐた園女が、特に芭蕉の爲めに晩秋の名残を惜んだ一會を催したのである。

園女の馳走振りはその庭の手入れにまで及んで、静な秋夜の涼爽を擅にした芭蕉は、先づ園女の清雅を詠じたものである。「白菊の目に立て見る塵もなし」の句境は、清纯を讃へた以外のものとは思はれぬ。——或は當夜、庭か椽側の一隅に白菊の一鉢が置いてあつたのかも知れぬ。白菊があつたと見る方が穩當であらう。芭蕉はその白菊に事寄せて、その女の美しさを詠んだものであらう。會の果てた頃、芭蕉は稍々蒼ざめた顔付で、椽側へ出てその腹に手をあてて見せた。そして腹が痛むことを園女に告げた。併し間もなく園女の藥で小康を得たのであつた。

「何か悪いものがございましたせうか。」

さういふ園女は、嘗て芭蕉が與へた「のうれんの奥もの床し北の梅」の園女の物優しきだつた。芭蕉は他の門人らにも心配してはくれるなど云ひ、大したことをないことを告げた。

併しその翌日から下痢が續き、日を追ふて激しくなる一方だつた。芭蕉は園女の饗應の中に茸の吸物のあつたことを知つてゐたが、他の人々に異状がなく芭蕉だけが中^お毒つたことを知つてゐた。

併し溫和な彼は十月十二日にその生涯を終るまで此事は云はなかつた。「白菊の目に立て見る塵もなし」といふ彼も所詮自らの生涯を證據立てゐるに外ならぬ。ともあれ彼が園女を愛したことは清雅の道草であるとは云へ、彼の心には何やら優しいものを園女から感じてゐたものであらう。人間は戀愛の外のもので、戀愛よりもつときめの細かい或好ましい感情になることがあるものである。異性への友情はこの好ましさの現はれであるかも知れぬ。

笈日記に「是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一會を生前の名残ともおもへば、その日の面影を見るやうに思はるゝ也。」と著して憶草の便としてゐる。當夜の歌仙白菊の句脇は、「紅葉に流す朝月。」その女「冷々と鯛のかた身を折わけて。」等である。

ともあれ、「白菊の目に立て見る塵もなし」はその凡化の風情の中にある得も云はれぬ清さには、全く打たれざるを得ない。斯くまでに率直に喰ひ入ることは、凡庸なざれ事では近寄ることさへ出來ない手法である。

七 秋の風

身にしみて大根からし秋の風

芭蕉

若し發句道に味覺の悟達がありとすれば、此の句の搜つてゐるところに、秋風の身に沁みる有様

が斯くまでしみく出てゐるものは少数い。此場合の大根はおろしにしたものを食したのを詠んだもので、姨捨山の記事に倣ふて世相を交へたせち辛さを詠じ加へたものであらう。

貞享五年更科紀行の句で、姨捨山に錫を引いた時の口吟みである。「高くもあらず、かどかどしき岩なども見えす、只あはれ深き山のすがたなり（略）何故にか老たる人を捨てたらんと思ふに、いと涙も落そひければ。」と云ひ、更科紀行にその山を叙してゐる。

八 野ざらし

野ざらしを心に風のしむ身かな

芭蕉

前書に曰く、「貞享甲子秋八月江上の破屋を出づるほど風の聲そゝろ寒げなり。」とある。

山家集に「鳥邊野を心のうちに分け行けばいまきの露に袖ぞそぼつる。」といふ類歌がある。

貞享元年芭蕉四十一歳の時、殆十年振りで親しい郷土に歸省した。「秋十とせ却て江戸を指す故郷」といふのはその折の句である。八月江戸深川を發ち、東海の驛鈴に枕を重ね、伊勢を経て郷里伊賀に歸り、大和吉野を巡つて貞享二年の春四月深川の草庵に戻つた。その旅立の秋近く朝早いそぞろ寒の日の、彼の心を野ざらしに稱へた句である。

片雲を友とする彼は自然風物を感じるに、餘りに弱々しい勝れた初々しい心をもつてゐたやうで

ある。「野ざらしを心に」する彼は、長旅の憂き目を心に象徴して早傷みやすくなつてゐる。草庵を出て何となく沁む風に既う彼の心は打たれてゐる。彼のいたみ易い心は何時も鋭く聰い感應に張り切つてゐることを思ふと、弱々しいのではなく却つて根勁いのかも知れない。妙くとも彼ほど透明な心をもつてゐるものは、稀れとしか思はれぬ。

しかも野ざらしを心に風のしむ身かなの「心に」と云ひて感じを締め付け、感じを一層深めたところに彼が持つ幽遠の技巧が輝いてゐる。その上「食のしむ身かな」と靜に受けて結んだところは、彼の用意の潤澤さを思はせるに十分である。

九 秋の霜

手に取らば消えん涙ぞあつき秋の霜

芭蕉

野ざらし紀行の故郷での吟詠である。

哀傷と情熱とで高く呼びかけてゐる發句である。彼が絶大の情熱をあれらの靜な温容の間に抱いてゐたことは、この破調で一口に詠み上げてゐることで分る。何人も故郷では心がいたみ易いものである。彼は殆十年伊賀の懐しい土を踏まなかつた。彼の目の前にある風物の姿は見る影もなく移り變つて、彼の心に常に宿りかけてゐる歲月の苔の上にも、さびしい暮雨は蕭々と降り注いでゐ

た。

紀行に、「長月の初古郷に歸りて北堂も霜枯れ果て、今は跡だに無し、何事も昔に變りて、はらからの鬢白く眉寄て、たゞ命有てとのみいひて、言葉は無きに、このかみの守袋をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島が、子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたり、としばらく泣きて……」記して嘆いて、故郷のありさまを描いてゐる。

自分はこの句を口誦んで見ると、自分もまた都に遊行して空しく憊れて郷里へかへつた時や、その折に書いた詩の幾章かを思ひ出すのが常であつた。感懐が盛り上つて何らかの形で撥き出ようとしてゐる氣持である。秋霜は花の如く涙はなほ凍えて、二百年後の自分に響を打つて來る句である。

一〇 秋の暮

此道や行く人なしに秋の暮

人聲や此道かへる秋の暮

芭蕉
同

芭蕉は晩年は或人の訊ねに答へてかう云ふてゐる。

「我が發句は一つ／＼辭世のやうなものだ。」

「それ故自分には辭世を残す要はない。」

彼の晩年の心は此の句の精髓に顯れてゐると云つてよい。「此道や行人なしに秋の暮」といふ心の澄み方輝き様又それらの道を見展いた事は何と云つても或る靜なところに行き着いて、そこから又自分へ戻りかけてゐる經驗を持つてゐた。その或るところは我々にも解る或るところである。辿るに音のない無際限なやうなところである。彼が此句に前書をして「所思」としたのも故ある譯である。人通りのない垣々たる一本の道の行き極まるそのやうに解してもよい。だが彼の本意は心の問題としての發句であらう。何か深きに據らなければ説き盡せないものが、後に自身をして茲へ追ひ着かしたものであらう。彼はこの句を得て彼自身すら一層思ふところを深めたであらう。

自分は彼を或論文の中に人生の記述者であると述べ此句を索引した。自分の云ふところは今もそれと變らぬ。彼は飽迄人生の記述者でありそれを彼の風物に記號したことは實際だつた。之加も彼の持するところのものは永年剝脱しなかつた。我々は人通りのない道路を見たことがあり、その寂しい道路に我々の生活の影も見ない寥境に氣附くことがある。彼芭蕉の「此道や」はこれらの寥境が云はゞ餘程高められて彼の心に宿つてゐたものらしい。

芭蕉は元祿七年七月廿六日清水の或る茶店に連衆十二人と遊吟した。その折彼は二句を物して、この内いづれを守るやと人々をかへり見た。

人聲や此道かへる秋の暮

芭蕉

「此道や行く人なしに獨歩したるところ誰か其後へ随ひ候はん。」と人々は後者を選んだ。芭蕉もそれに随ふた。芭蕉は一句を物するに他の一二句をも用意して、子弟の説を聞いたことは再三ではない。彼の如き大家でも其底に信じたところがあつても、人の説を聞くに吝でなかつたのは、その寛容にも據るが一つには彼自身も迷はないとは云へない。自分は彼の此の迷ひに却つて美しい氣質と率直とを感じるものである。

「評林に此句の評に曰く「空山下見人」といへる詩の心にやあらん。」とある。

一一 粟

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

芭蕉

新宅の賀吟ではあるがその前書がなくとも、その朗かな或朝の涼しい秋を偲ぶに餘りある句である。「雀よろこぶ」でその聲や姿、背戸に朝しめりのある落着いた光景が叙されてゐる。彼の性質にある朗かさは此種の句に高雅な品と豊さをよき繪のやうに描き出してゐる。

知足は尾州鳴海の酒造家で、富んでゐる人である。一家みな門人になつてゐるが、他門によらな

いで、遂に鳴海一風をきたえあげて後世に名を留めてゐた。

一二 しぐれ

秋もはやはらつく雨に月の形

芭蕉

「句選年考」に曰く「此句先に『昨日からちよつくと秋の時雨哉』といふ句なりけるに如何に思はれん、月の形にはなしかへされし。廿一日二日の夜は雨を降りて静かなれば……」とある。

古今集に「惜しむらく人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにける」といふのがある。

或宵の程、所在なさに外へ出て見ると、頬に冷たいものを感じる。夜露がこぼれたのかと思ひ、樹をはなれて空を見ると、月は形鋭どく尖りを見せてゐるが、雲にぼやけて折々見えるだけである。雲はよく見ると脚早に北方に向いて流れて歇まぬ。けふはまだ九月廿日ころであるのに、時雨には早く秋雨にしてはその降り様に落着きがない。「秋もはやはらつく……」とあつさりと之加も寂しさを包んで詠んだところに適に芭蕉の眼光が行到いてゐる。しかし「月の形」とあるは彼の常套的な下五文字の置方である。

その「はらつく時雨」をこれまでに幽に詠じた彼は、西行を學んだ人としては當然の收穫であらう。後世時雨に就ての百の悪文を過かに超えてゐることは勿論である。

海郎の家は小海老にまじるいとど哉

芭蕉

海べりの漁師町のとある網干場に、海老や雑魚を干してある席がある。夕方それを軒端の雨具や櫓櫃を立掛けたところに取り込んで置いたが、何時の間にかいとどが来て啼いてゐる。氣を付けて見ると海老や雑魚の間にかぐんで秋の宵をほしきまゝにすだいてゐるのである。道は濱べに續いて星あかりが白い砂に漂ふて、薄い月夜になつてゐる。海岸のことで家も道も網干場も斜面にあるので傾いてゐる。僅に漏れるのは掘立小屋のやうな漁師の家々の燈火くらゐで、夜漁に男は皆出たとらしい静な無人の家々である。風續きで海の音も極めて穏かな宵である。白い犬が一疋すたすと磯の方へ行く。

「雙纏輪ツツカケに、いとど、(竈馬)カウロギ、一物二名。筑紫ではキ、ゴといふ。其形キリギリス蝨の如くにして首尖りて鋭なり、足鬚共に長し。」(句選年考)

いとどは黒鼈甲のやうにつやのある肌をしてゐることほろぎだと自分は思つてゐる。秋晩くまで可憐に啼きすだく蟲で、やや寒くなると竈の下や板じきや蓄への冬瓜や南瓜の下に來ても啼く。秋をおもふことはいとど哀れをも併せて思ふことに近い。芭蕉のねらふたところは取材も新しく、あは

れも一入で佳い傑れた句である。四十八歳の句。

一四 蜻蛉

蜻蛉や取つきかねし草のうへ

芭蕉

此句を讀んで見つめてゐると、その草のそよぎの細な震へまで眼に映つて來る。斯くまでにありのまゝの景色を寫し出すことは、もはや文字が文字の域を脱け、神韻を帯びてゐる程度にまで、殆悠悠々と押展いて行つてゐる。

「句選年考」には行脚の時宿を求めかねたる句としてゐるが、それほどの意味を付ける必要はない。ありのまゝの句の意味で澤山とおもふのだ。四十六の折の句。

一五 秋隣

秋深き隣は何をする人ぞ

芭蕉

元祿七年九月二十六日、「白菊の目に立て見る塵もなし」の吟のある園女亭興行の前晩、芝栢亭での句吟である。「句選年考」では「或行脚の僧云芝栢亭は人家立込みたる所にて此吟有りけり。」とある。普通何かひつそりした町の隣家のやうな景色のやうに思はれるが、事實はさうでは無かつたら

しい。實際はどうあらうと此句の精神には變りのある筈がないのである。

晩年の句らしい響と冴えとが出てゐる。彼が晩年の句は一粒選りといふより一句づゝの歩みが何らかの方向へ近づき進んでゐる。

白菊の目に立て見る塵もなし

芭蕉

此秋は何で年よる雲に鳥

同

秋ふかき隣は何をする人ぞ

同

松風や軒をめぐつて秋くれぬ

同

此道や行人なしに秋の暮

同

人聲や此道かへる秋の暮

同

秋もはやはらつく雨に月の形

同

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

同

これらの發句の凡ては十月病歿した前の九月の作である。彼の歩みが決して俳三味の境にのみ留つてゐなかつに事、人が死に就く前の道程がその足跡を残し、後人に自らなる深い考へを喚び起さずには措かぬ。彼はどういふ隣を見たか知れないが、これが普通の隣家であるといふ考へ以外に、彼の心を探つて見ずには居られないのである。彼の句に妙なこじつけの枯寂を味ふといふことは、あらゆる芭蕉研究者の好意でなければ思ひ上りであらう、しかも此句を表現のまゝ味讀して素通り

することが、彼の心を汲み分けることを知らぬ者だと云つてよい。彼の心を掻きさぐることに依り、此句の精神が鬱然として我々を打つもののあることをも感じるのである。

一方から云へば芭蕉はこれらの發句の奥で行き詰り、底を洗ひつくしたと云つてよいのである。もはや餘すところ無きまでに彼は彼の道に行き着いてゐるのだ。これらの句を見るとその後は生きてゐる譯がないのである。呼吸の長い辭世のやうなものを彼は晩年の句に刺し貫いて見せてゐた。脈々としてそれらは自分に單なる一個の芭蕉をでなく、一人の人の死期を考へさせて來るやうである。これらの句作の後には、彼が十年の餘生があらうとはどうしても思へない。或意味での人力の大半が燃えつくし餘燈は煌々として照らしてゐるからである。假に彼がこれ以上生きてゐたとしても擔ひ切れる「人生」ではないのだ。彼より三倍も才能のある作家なればなほこれらの藝術境から起き上り、再び濶歩してあらゆる門扉を蹶散らして行くであらう、併し我々は彼の場合これ以上ものを望んではゐない。彼の靜すぎる是等の境致では、やはり三嘆して彼の彼らしいところに心に向け眼を放つだけである。

一六 秋の風

桃の木に其葉ちらすな秋の風

芭蕉

奥の細道の旅で加賀山中温泉に一浴した。「山中の菊は手折らぬ湯のにほひ」の吟もその折である。山中温泉では泉屋といふのに長旅の草鞋の紐を解いたが、主人は俳諧の道に知られ貞室が山中へ来たところからの風雅の士である。當主兼之助も芭蕉滞在の中色々身邊の雑事に随ふため、芭蕉はこれを深く愛し、桃妖といふ號を與へ一門の契ひを許した。或は詩經周南に桃の天々其葉萋々、之子于歸宜其家人に依つたのかも知れない。

泉屋桃妖の事を書きたいと思ふが、後日を期して唯彼が加賀俳人の内でも相應重きを爲してゐたことを特記して置きたい。「桃の木に其葉ちらすな秋の風」も自ら彼への愛情と親密の顯れで、句の表よりも中身の人情が生きてゐる句である。芭蕉の此種の句は、その身邊的な記述から説かないかぎり解りにくい處がある。

一七 芭蕉

ばせを野分して鹽に雨を聞く夜哉

天和二年芭蕉三十九の折の句である。

芭蕉庵は今の深川西元町にあり當時は鯉屋杉風の別墅であつた。別墅であるといふよりも鮒や鯉の生簀を浮したところのある掘井戸のあつた鯉屋の物置部屋を修繕して、芭蕉の膝を入れるに足りる

芭蕉

庵室としたものであらう。杉風の肝煎であることは云ふまでもないが、僅か勝手の間と加へて二間くらゐであつた。後に幾度も災火に遭ふたが兎もあれ彼の落着き先はこの佗しい庵室だつた。

軒の近くに一株の芭蕉を植ゑてあつたことも實際で、野分の頃その敗荷の屋根廂を打つ夜半もあつたであらう、不時の雨漏りなぞして、鹽を出してそれを防いでゐたこともあらう。

一説にはこの鹽が軒下に置いてあつたといふが、芭蕉が鹽を出し放しにしたりした人ではなく、又句の意味からも部屋の中に置いてあることが明らかである。内と外との雨に野分の音なども加へ、比較的壯年の作で十分に佗びた心が出てはゐないが、却つて風物の中に潑刺とした眼を向けてゐるところが窺はれる句である。「櫓聲浪を打つて腸氷る夜や涙」などの破調と同様で、芭蕉も時々破調を試みたものである。

此句の前書に「茅舎の感」とある。

芭蕉を初めて植ゑた年は恐らく天和元年であらう。樋口氏は「芭蕉研究」に入庵を三十七歳の折と定めてゐる。ともあれ芭蕉を好いた彼の芭蕉の句は可成にある。

芭蕉葉を柱にかけん庵の月

ばせを植えて先づくむ萩の二葉かな

帆となり帆となる風の芭蕉かな

芭蕉

同

同

この寺は庭一杯の芭蕉かな
鶴啼くやその聲に芭蕉やれぬべし

芭蕉
同

一八 蘭

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひかな

芭蕉

豪邁の風情に優しい高雅を匂はせてゐる句である。蘇鐵の葉の逞しい繁りを配してゐるところに、特に蘇鐵と蘭の比較の上の無理をも感じないで、穩かに感懐のできる寧、素直な句である。門に入ればと云ひ切つたところに其穩かさの中にある鋭い高雅の品が生きてゐる。

守榮院は伊勢山田棒の路といふ所に有り寺は淨土宗である。名高い蘇鐵があつたのである。恐らく即吟の句であらう。

一九 菊の花

朝茶のむ僧しづかなり菊の花

芭蕉

堅田祥瑞寺の句である。

僧と朝茶とが如何にも物靜な爽な氣持を出してゐる。菊の花は或は作らぬ亂れた菊かも知れぬ。

特に意味を籠らしたやうなところもなく涼爽の秋の朝がすつきりと出てゐる句である。

元祿四年四十八歳の折の句である。「朝な〜手習す、むきりぎりす」水清くなりて柳の散る日かな」などと同斷の清い美しさをもつた句である。手習の句は勝峰氏は芭蕉の句であるか否かに疑義を挿んでゐるが、自分は芭蕉の句であらうと思ふてゐる。彼の筆蹟は手習を本式に習つた手蹟で、この一見幼稚な句を物した所以ではないかと思ふのである。彼の手蹟は柔かい速力の落着いた味のあるものである。美事なものではないが彼の穩かな氣質が沁み出てゐて懐しい手蹟である。

二〇 秋の風

秋風や桐にうごいてつたの霜

芭蕉

葉はとうに散り果て桐は裸になつてゐる。風のあるとき漸く二三枚になつた葉もうごくくらゐである。秋も終りに近づいた霜は枯木に纏ふた蔦の葉を赤く染め出してゐる。桐の幹の灰白色のさびしい色に蔦を點じたところは、大して珍らしくはないが、霜のきびしい調子が引纏めてゐる。

玲瓏として流れてゐるものはないが、ふしぎに寂寞の情が横溢してゐる。それも桐の幹の色に見る寂寞の情である。作句は恰も初心者やうな幼稚な素材の積み立てをしてゐるのも、却つて味ひがあるやうである。それにも拘らず彼の圓熟期を通りすぎた四十八歳の句であることを念ふと、枯

淡過ぎてゐる故で素朴な句になつたのかも知れぬ。

一一一 茸

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく

芭蕉

五十一歳の時の句である。

句の意味は解くまでもない日常我々の見る情景である。何等こだはるところもなく、此處まで情景を惹き入れることは一見易々とした手法のやうではあるが實際は決してさうではない。情景は天下の山川草木にあふれてゐるが、睨みの透らない情景は唯いつも死か眠りの中に我々から忘却されてゐるだけである。

彼は睨むことの達人だつた。同時に睨みの着かない處のない無類の名人だつた。彼の眼光は巨石の間に刺しつらぬき、離々たる雑草を起したことはないふまでもないことである。それに此句はまだ露のまゝの「新しさ」を持つてゐる。この新しさは「朝露によごれて涼し瓜の泥」と一般で彼の並でない獨特の境致を示してゐるものである。五十一歳にして此新しさに眼を着けることは並大抵のことでは無いのである。

一一二 菊の花

きくの花さくや石屋が石の間

芭蕉

八丁堀にてといふ前書がある。

石屋といふは土臺石を商ふ庭石もある店であらう。庭石を商ふ家なれば幾らかの風流を取交ぜた店といふ風に解釋してもよい。その石をならべた間に黄か白かの雑然とした一株の花が咲いてゐる。これは毎年咲くので石屋も其處を空けて置く心も見なければならぬ。取材に面白味はあるが、芭蕉の句として悪い方であらう。しかし取捨に可成に厳格な彼がその儘後世に残してゐるところを見ると、彼にも何らかの自信があつたのであらう。——自分は此程度の句なれば何も芭蕉を俟つまでもないと思ふ。そして此の句は相應に月並と陳腐の間に引つかゝつてゐるやうである。名吟をのみ彼に引くよりも此程度の句を示すことが、彼の句作の道しるべともなるであらうと思ひ、茲に録した譯である。

一一三 木がらし

木がらしや頬はれいたむ人の顔

芭蕉

木がらしに岩吹き尖る杉間かな

芭蕉

木枯しの鋭い寒さに頬はれを配したのは、人事に喰ひ入りて餘すところのない句である。

自分は子供の折に「頬はれ」といふ文字通り頬が蒼くふくれる病氣の人を見たことがあるが、近年餘り見ない。齒痛とは別な病氣らしい。「句選年考」には、「東垣が蘭室秘藏に蝦蟆瘧の病名始めて見えたり、夫より醫學正博にも出づ、近世の俗江戸挾箱といへる病なり、左右の頬はれいたむ、片頬腫るゝもあり。」と記してある。何となく見るからに不愉快で辛ら相な病氣で、女に多いやうに思はれる。此句も女ではないかと思はせる節がある。微か乍ら同情の心も加はつて見える。句の表現はすらりと一口に吟み下してゐるところに、鋭く何ものかを抉つたあとがある。「木がらしに岩吹き尖る杉間哉」と同極端を示してゐる。後者は自然の肺腑をつかみ出して吟み下してゐて、これ又無類の鮮鋭を研ぎ出してゐる。行くとして可ならざるなきは芭蕉である。「岩吹き尖る」と云ひ「杉間かな」といふ彼は、少しの隙もない緊張と締付とを以つて迫つてゐる。

自分は却つて「岩吹き尖る」の方を探る、「頬はれいたむ」に飽きを感じさせられるが、「岩吹き尖る」は慣れるに従ふて句の深みへ這入ることができが、頬はれいたむの境致はそれほど入り込めないやうである。

二四 しぐれ

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

芭蕉

甲子吟行に「名護屋に入、道の程吟す」とある。

この句の「哀れ」は遠來の詩情ばかりを戀へたのではない、——何處かの棄犬の主たづねる聲か、親慕ふ聲であらう、犬もしぐるゝかといふ情は、彼の技巧が美しい哀憐を形取つてゐる、一篇の詩の外のものではない。新古今集秋の下家隆の歌に「下もみぢかつ散る山の夕時雨濡れてや鹿のひとり啼くらん」といふ歌がある。或はこれに踏へたのかも知れぬが、句の形姿に既に幽遠をもつてゐる。文字の輪廓の幽遠を彼自らも知つてゐて試みたものであらう。

芭蕉は内容の幽遠枯寂を慕ふたことは論を俟たないが、形式と輪廓調子の流れからも入つてゐたことも勿論である。同時に彼ほど調子と音律を重んじたものもすくない。近時の詩のごときものはなく、最つと彼はその音律に沈んでそれを聴き分けてゐた。そして音律の爲めに彼自身の「さび」を忘れる男ではなかつた。彼こそ凡てに等分にされた才分を何處までも滑らかに行き亘らした男であつたであらう。彼の完成は微塵も瑕瑾なき完成であり、ゆるぎのない成就された玲瓏さであつたのである。

併し彼の完成も初めからのものではない。壯年期に入ると同時に次第に彼自身に磨きがかゝつたのである。「雲とへだつ友かや雁の生き別れ」時代にさへ、彼は彼らしい完成を窺はせる發芽をもつてゐたと云つてよいのである。

二五 行秋

行秋の猶たのもしや青蜜柑

芭蕉

秋の暮、草も木も枯れ果て、同じい一色の褐色をおびてゐる。蕭條の風物には生色が失はれてゐて、すぐ我々の感情に或る種の運動を感じさせるのである。併し我々はさういふ風景の中で健康な黒みのある蜜柑を見出すと、何か季節にもまだ信賴のできるものを感じ、快よい愉快を感じるのである。彼のいふところも此稀らしい緑濃い色に、過ぎゆく季節をしばらく眺めるのである。

この句には楽しい俳諧趣味といふ俗間的な言葉の挿入が許される程、子供らしいものを多分に含んでゐる。青蜜柑それ自體が新鮮なところと多少季節的嚴肅さを有ち併せてゐるところのものであるからだ。

二六 椎の木蔭

幻住庵記

先頼む椎の木もあり夏木立

芭蕉

椎の木の濃く巖丈なる姿愛したるべし。「先頼む」の呼びかけしありさま心惹き入れて、頼むの心現れたり。「幻住庵記」の後に記せる句。

句選年考に「源三位頼政久しく官位の沙汰なければ椎によそへて、しひを拾ひて世を過ごす哉と懷舊の昔も思ひやられたるなり。」とあり石山の奥なる幻住庵にて芭蕉のこの古事を踏へたること或は然らん。されど椎の木をたのむは、彼の心にて選ばれたる寂しさのしをりならん。「椎」「しひ」の響に心をよせたる彼こそ、詩情の極致を知れるもの。元祿三年の句也。

五月雨や色紙へきたる壁の跡

芭蕉

嵯峨の落柿舎にての吟也。前書に「明日は落柿舎を出んに、名残をしかりければ、奥口の一問一間を見廻りて。」と有り。

落柿舎は去來が別業なりしが、芭蕉しばらく獨り清居の後に得たる句也、色紙へきたるは剥ぎたる跡ならん。壁の跡そこのみ色變りて些細のことなれど、それを眺め入る獨り居の心、靜か過ぎて却つて寂しき也。笈日記に「色紙まくれり」とあり。恐らく落柿舎は風雅なれども五月雨ころの穢くさく、雨漏りなどもありけん程の、柿の木、竹藪にかこまれたる所ならん。嵯峨日記に「五月四日

宵に寝ざりける草臥に終日臥し、晝より雨降り止む。明日は落柿舎を出でんと名残惜しかりければ、奥の間へを見廻りて。」と見えたり。

五月雨頃の佗せき一日の芭蕉の姿、眼に入りて思ほゆ。「草臥に終日臥し……」たる芭蕉は床の中に眼を覺しつ、うつうつとして茅舎の外の雨聲に聴き入るさま、興深く幽遠也。

うき我を淋しからせよかんこ鳥

芭蕉

閑古鳥は町中にて聴くことなき深山の鳥也。予信州輕井澤にありける一夏の初め、この閑古鳥啼くを聞くを得たり。その聲は方一方にひろがりて空寂云はむ方なし。その折も芭蕉の句を直ちに思ひ出しぬ。

うき我をと云へるは彼自らの姿も心もさびたるの時にして、一入己れの心を寂しくせんに却つて樂むを得るの意ならん。隠士清魂の士は寂しき境涯にあらんには、一際心磨かれるなり。前書に曰く「獨すむほど面白きはなし。長嘯隠士の曰く、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと、素堂此のことばを常に憐む。予も亦然か思へるなる。」と云へり。

芭蕉庵に諸國の俳人ら草鞋を脱ぎ、清吟の教へを乞へるもの日に次ぎて多からんは猶當時を偲ぶにあまりあり。芭蕉これらに一々應酬せんは彼の優柔なる性情よりして然らん。されどその客去り新しき客來る時は既に疲れて、物憂き日常を送れるは必定なり。閑を選んで閑を得ざりし彼の心は

悲しと云はんより恐らく人を厭ふの心増すのみ、「うき我を」は世俗の心をも取交ぜたる「嘆き」をも覗かせたる句なるべし。「嵯峨日記」に、淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは淋しさをあるじなるべし。とあり。元祿四年四十八歳の句也。

妻の襪をちからにつかむ別かな

芭蕉

元祿七年芭蕉はその最後の旅を西國に渡り長崎に赴き、當時の珍らしき異國の言葉など聴かんとして旅に出でたる折の句也。死期の近づける芭蕉は仄かにその影を宿したるならん。川崎の驛にて見送りの門弟らと別れたる折の力なき別れの心持あらはれたり。彼は常々愛情深き人なれば僅かの別れにも心潤へるが如し。前書に曰く「桃隣曰、戊五月八日、此度は西國にわたり長崎にしばし足をとめて、唐土舟の往來を見つ聞馴れぬ人の詞も聞かんなど、遠き末をちかひ、首出せられけるを各品川まで送り出、二時半の餘波、別るゝ時に互にうなづきて聲をあげぬばかりなりけり。駕籠の内より離別とて扇を見れば」とありたり。

ともあれ當時にありて長崎に旅立ちを思ひ立ちたるは、芭蕉の新しきもの好める心現れたり。その頃長崎の風俗と新聞珍奇さは何人も心ある人々の憧れとなりたるなるべし。新人中の新人なる彼の着眼も自らを語るもの也。されどその秋の終り彼はその旅途を半ばにして長逝せるなり。

短夜や驛路の鈴の耳につく

芭蕉

殆その生涯を旅に暮したる芭蕉は、しば／＼その夢路にも鈴の音を聞きけん。短か夜のあはれに明け放たれたる旅舎の古障子の下に、物うく目ざめたる芭蕉はまた百年の夢を半ばにさまされしこと多からん。元祿四年の句、哀れに聴ゆる句也。

芭蕉の前書したる句よりも何となく詠み棄てたるが如き風情の中に、彼も知らざりし程の哀れさともれる也。よき句にあらざるも短夜の憐れさはあるべし。

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗

芭蕉

前書、「桑門可伸は栗の木の下に庵をむすべり、傳へ聞、行基菩薩の古は西に縁ある木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや、幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。」

世の人の見つけぬ花や軒の栗

芭蕉

前書、「栗といふ文字は西の木と書いて西方浄土に便り有り」と行基菩薩の一生杖にも柱にも此木をもちひ給ふとかや。」

ともに栗の木の花着けし有様、その寂しさを述べたるものなるべし。元祿二年奥の細道奥州須ヶ川の所の文に、「此宿の傍に大なる栗の木蔭を頼みて、世をいとふ僧、椽拾ふ太山もかくやと閑に覚えられてものに書き付侍る、と有りて此前書並に此句見えたり」芭蕉は折々同じ好みのもの二句あて作れることあり、いづれも動かし難く捨てがたき爲ならん。特に説く句にあらず文字の意味それに現れ居るべし。

に現れ居るべし。

「かくれ家」の句はひつそりと情景顯れぬたり。予が故郷に此のかくれ家の風致を愛するの茶人多しと雖も、この場合かくれ家と名ぞらへる程のものにあらぬ幽なる家に生ひたる栗の木なるべし。栗の花は房をつくりて垂れるところの、味氣なき姿をもてるもの也。

又「世の人の」の句はやや理窟めきたるところあり、むしろ「かくれ家」の句の素直さに予の心惹かるゝ也。「見つけぬ花や」とあるは、やゝ考へ深みてくどく、その味ひ素直ならざるやに考ふる也。

芭蕉と利休

芭蕉は俳句もまた時流に添ふべしと云つてゐるが、それだけは當らなかつたらしい。蕪村でさへ芭蕉を一步も出なかつた。そして明治の子規が芭蕉をきらつてゐながら、漂茫たる芭蕉王道に引きずられて行つた。以後何百年経つても、この不出世の大懶巧者の右に出づる者はゐないであらう。

芭蕉と利休とくらべることは悲惨である。俳作、芭蕉の貧と利休の奢りとはさう大して違つてゐない。どこかで非常な食ひちがひを持つてゐる二人は、打ち合つても合ふまい。俳作、僕は二人をよく考へて見るのだ。二人のどこかに、非常にこまかい一點にちよつとした似たところがありはしないかと、ぼんやりさう思ふのだ。

芭蕉はいつも足をふん伸してゐた。そして誰にも頭を下げずに好きな發句を考へてゐたが、利休はきらくつに畏まつて、時にはやり切れない重い氣持を感じながら茶道の果のほうに座つてゐた。二人はかういふふうだから滅多に話をするこゝもないのだ。併し何と能く似てゐるものがあることぞ。

芭蕉が幸福であつて利休が不幸であつたとは云へない。かれらの孰れもがそれ／＼人生からは取り入れられさうな幸福は持つて行つた筈である。ひとりには天命を全うしてゐたしひよりは自刃したのであるが、それはどちらも、もう行き着けるだけ行き着いてしまつた後だつたのだ。あとにどれだけでも仕残しの仕事がなかつたと云つていゝのである。

ナチスの焚書のなかで大抵の獨逸の風流本は、焚かれてしまつた。エロテジズムの「風俗史」など、獨逸にはその一卷さへも見當らないであらう。利休の風流が處刑されたといふことも、あゝいふ時代にあつては仕方のないことであつた。そしてまた敢て正岡子規の企てた芭蕉への處刑は、美ごとに桁が外れてしまつて、一さう芭蕉を大きく廣げて見せたのである。秀吉といふ人物も利休に腹を切らせたが、それは傳奇的に利休を大きく見せたにすぎない。

千利休は秀吉の茶坊主であるが、その時代の大名たとへば前田や蒲生や徳川なども、茶の方では利休の門の内であつた。利休くらゐの茶人でさへも秀吉には茶坊主に過ぎなかつたらしく、茶人としての暮しが大名連の間にどうかすると茶坊主以外のものでなかつたのも、時代が時代だつたから仕方がない。しかし利休はその娘を秀吉から所望されながら、恬然としてこれを拒んで殺されたことを考へると、利休の本統の性根の在るところが解り茶人としての最後の壯烈さがしのばれて懐か

し。

利休はある意味での英雄で、また時代といふものをよくのみ込んだ男らしい。内心ではいつもさびしく暮し、殿中からかへると何時も秋夜のごときを感じてゐたであらうと思ふ。まことの風流茶事も殿中の華美な風俗に壓せられてゐるだけ、利休は本統の茶を一服としてその時代の人と飲み合つたことがなく、茶人としての暮しを疑つたにちがひない。自分は利休といふ人物を考へると、半分世を茶化したこの人の心に、何時も心にそまぬことの多かつたことを思ひ、茶人といふものはやはり世の外にあるべきだと思つた。

秀吉といふ男は茶を好いて、一かどの茶人振つたりしたのも、身卑しき生れであつたゝめに、茶道に心を打ち込んだものらしかつた。秀吉の心事には何か哀れむべきものが今から考へるとこもつてゐたやうに思へる。成り上りものゝ淺ましさは、名古屋に黄金の茶室を建てたことでも、よくうかゞはれて苦笑されてならぬ。さびとしぶさを誇る茶道に秀吉のごときは到底俗人の俗たるものであつた。利休がおそらく冷笑つてゐたのも、床や柱の黄金づくめの茶室であつたらう。時代といふものを讀んでゐた利休が秀吉に殺されたのも、單に彼が秀吉の隱密であつたばかりではない、秀吉の俗人であることを證據立てるものである。

いまの世の風流には決して生命をかけるやうなことはない、むかしは風流さへも生命がけだつた

のである。ひそかに考へて見ると今四十代くらゐの人の氣質には、文人らしいおもかげはなく、すこしの風流心のないことは、あまりに切り詰めた人物となり終せてしまひ、固苦しい軍人上りのやうな生活をしなければならぬことを、自分はつくづく氣の毒に思ふものである。己れの心を雲煙の間に遣らなくとも、もう少しの文人的な風流くらゐわかつてほしいものである。

風流は外がはのものでなく、心の内のものであるから、澄んで寂寞たる人物たることには誰でもなれるものに違ひない。紅巷の中に酒色を漁してもなほさびしい人がゐるやうに、それにそまらず、あるひはぐれる心をもわたしには風流だと思へるのである。行ひすまして花を生けてゐるのは大した風流人ではない、俗錢をも得、閑寂をも愛する人でなければならぬと思つてゐる。

眞蹟の道

自分は何時か芭蕉の短冊か手紙の一片だけでも、所藏したい考へを持つてゐた。詰まらない所藏品の數を殖やしてゆくことは堪へ難いが、自分の私淑するやうな人物の眞蹟の一本ぐらゐは秘藏して、煩雜な世俗の心を慰め何か修養の足しにしたいと思つてゐた。殊に芭蕉は自分の好きな俳人であり、その眞蹟を得たい考へを捨てることができなかつた。芭蕉の手蹟は上手ではないが、柔かく素直な筆つかひで、氣障やいちけた跡がなく眞蹟集などで見ると美しい手蹟であつた。自分が彼の眞蹟に憧れてゐるのも偶然ではないのである。

郷里に來て或茶人の賣立内見に行き、偶然に芭蕉の横物を見る機會があつた。最近の自分はいふ書畫骨董の域から遠ざかつてゐるだけ、一層、情熱的に打込む激しい氣持になつてゐた。それに此の芭蕉の出どころは由緒のある俳家の秘藏品であるだけに、一入に芭蕉を信じてゐることが出來た。自家にかへつて「うたがふな潮の花も浦の春」を調べてみると、元祿二年の句で芭蕉四十六歳の折の作であり、奥の細道の行脚前の春の句であつた。此の横物には單に「一見」とあるだけだつた。

芭蕉ほどの人物が二見の日の出の繪を見て、この繪を模倣して書いたとは、どう考へても思はれなかつた。此點が自分が最初に此の「芭蕉の幅」に疑念を含んだ所以だつた。併しなほ諦め切れない疑念が、自分を此の芭蕉に引きつけ昂奮さへ興へてゐた。未翁氏は本物だらうが若い時分の手蹟であらうと云はれた。併しそれは當らなかつた。寧ろ、晩年に近い位である。併乍ら未翁さんの云はれるやうに手蹟に若々しいところがあり、それを未翁さんが見通さなかつたのは、有繋に白翁古智に通じるものがあつた。

賣立後殿田氏から案外安く落札したので、若し入用なら廻してもよいと云はれ、自分も直ぐ預ることにした。自分は半分疑ひながら半分は信じてゐた。床の間にかけて最初の日に、かういふことに知識の無い妻がすぐ此の幅を見て、わたしたちが見てもそれは偽物だといふことが分りますと云ふのだつた。自分は芭蕉などは常に危ない偽筆の疑ひのなかにも存在してゐるものであり、一應素人に偽筆に見えるだけ本物に近いものだと思つたのであつたが、此の凡人の言葉が自分に暗い氣持を注いだことは争へなかつた。自分は三日ばかり毎日幅を睨んで暮したが、不思議に敬愛の心は起きなくて、目を趁うて不安な氣持と眞蹟を信じる心は薄れてゐた。何時もの買物をした後の喜びの情を感じなかつた。

自分はどういふ書畫骨董を入手した時にも、何時も親愛なる喜びを経験することが常だつたが、

此の芭蕉にはさういふ喜びを感じなかつた。

假令毀れた陶器の一片にせよ、喜びは入手した折の自分の心に靜かに湧くのが常態だつた。それなのに自分は此の芭蕉に對ふと喜びの情は次第に薄れて、味氣ない憂鬱をさへ感じるのだつた。自分分は堪へ難くなり、殿田氏から眞蹟集を借り受けて見て、最早疑ふことの無い偽筆であることが理解され、豁然としてこれは芭蕉で無いことを信じて出来る。

凡ての偽筆は眞蹟よりも上手に書いてある。しかも此の偽筆は拙い出来の方であつた。「うたがふな」の初五文字のたつぷりと墨汁を含んだところにも、その故意とらしい筆勢には偽筆者の「意志」が露骨に現はれてゐた。眞筆といふものは拙くとも鋭いものである。此の偽筆には鈍さが鋭さを追うてゐる焦躁の情念が表はれてゐた。自分は眞贋の區別を斯う迄悟つたこともなければ、又これほど身を入れて床の間を睨み暮したことがなかつた。未翁さんが若い時の眞筆であると云はれたのも、その下心には了解できないものが感じられてゐたから、さう云はれたのであらう。

兎もあれ自分の如きはまだその道に入れない若冠者であり、眞贋の區別さへ一瞥の間に加へられないのは、學ぶところ甚だ浅いとも思はれた。直覺的に眞贋を見定められない未だ至らない自分が、偽筆を得てこれと闘ふやうな氣持の毎日を續けたのは、何よりの取得であり心持の上に學ぶところが多かつた。同時に眞筆を得ようとする時は偽筆をも一度は買ひ取らなければ、性根を入れて眞贋

の道に徹することが出来ない、却つてさういふ冒險を敢てしたことが自分の爲になるやうに思はれた。

僅か芭蕉の如きに眞筆を得る困難はそのやうに自分を感はしたが、却つて自分は眞筆を得たよりもその偽筆を毎日見て暮した三四日の間ほど、彼芭蕉を學び、その氣持に入つて考へたことは今までに無かつた。かういふ機會ほど芭蕉を噛み碎いて考へ見直したことは稀である。自分の如きはただ此の千古の俳人の道に徹した考へを持つ男ではなく、その道にありとすれば未だ半も歩いてゐないことも、沁々と今度ほど考へたことはなかつた。

蕉門の人々

凡兆論

凡兆は常に大凡兆であらねばならぬ。蕉門中の英才であり、同時に元祿の作者としては凡兆を超越するものは稀である。遂に丈草と雖もこの作者としての凡兆の次に位すべきものではなからうか。才幹の鮮鋭、結構の新整、焦點の狂ひなき非凡の逸品は、蕉門の誰人も一席を譲るべきであらう。猿蓑集の選をあづかつた彼が自分の作品を多く出句してゐる手強い自信には、芭蕉も言葉を挿むことを控へてゐるくらゐ、彼の句柄は秀れ纏つてゐる。單に秀れてゐるばかりではない、蕉門のあとさきを通じて彼のやうな作者は稀にも皆無と云つてよい。

凡兆の見たものにくるひの無いことは、その性根の坐り方の確實さを感じさせる。大作者といふものは常に粒の揃つた微塵もゆるがない或物を持つてゐるものである。我が凡兆は總ての大作者の面影であるところの、一句として粗末な姿を持つてゐるものは無く、それぞれの鋭い風情の中に數少ない此の作者の世界を引提げて立つてゐる。猿蓑集以前の作はともかく集中のものは悉く逸品で、

稍々ともすれば作者としては芭蕉の右肩に聳える一高峰であつた。去來支考又は嵐雪の逸品を以てしても、凡兆を抜くことはできないと云つてよい。極言して我が日本の俳道は元祿に盡きてゐると云へるなら、芭蕉が最高の山嶽であるとしたら、凡兆は鋭峻なほそみのある高峰をもつて、絶えざる千古の風雪を戴いてゐたらうと思へるのである。彼は何よりも新しい生々した力を持つてゐる。芭蕉の新しさは同時に百年の古さを以つてゐることに深い枯寂があつたが、彼の新しさは唯その新しさばかりの生一本で通つてゐるから驚くのだ。しかも萎えることのない新しい鋭さで、今、枝から下した花實のやうに水々しい。斯様な新しさは蕉門のみばかりではなく、遠く天明へまでも其の翼を擴げて羽ばたいてゐる。何人もこの翼の下にあることは決して偶然ではない、しかも作句の数の少い彼が、斯くまでに凡兆が大凡兆の名を傳へるまでに至つたのは、その句作の腹が巍然として定つてゐたからであつた。

も一つ見究められぬ膽の太さが句の中を打ち貫いてゐることに氣づく、しかもそれらは彼の作句を重厚無類ならしめた所以であつた。蕉門中彼の如く重さのある句を齎したものはゐない。芭蕉と雖も彼に見るやうな重さを稀に缺いてゐた。これを風韻孤寂の丈草法師に較べたら、彼の寂しく幽かなるにくらべ、凡兆の力ある生々しさに今さらながら氣が惹かれる。丈草は高く雲をいたゞいて聳えて迫かではあるが、凡兆の峰の秀は晴れて殘雪を棚引かすところの鋭さを以つてゐる。一つは

高遠で彼は峻嶮であるが如く見える。

二

せり上げて蒼をこぼす葵かな

凡兆

木のまたのあでやかなりし柳かな

同

捨舟のうちそこほる入江かな

同

古寺の簀の子も青し冬がまへ

同

これらの中にある凡兆の新しさは、打透つてゐて濁らぬ新しさが走つてゐる。「せり上げて」の旺盛可憐、「木のまたの」の幽清細緻、ともに彼が眼光の凡ならざる底を示してゐる。「捨舟の」畫趣、「古寺の」鋭い簀の子を見た彼は、漸くその句の丈に師翁の佛を漂はしてゐる。「せり上げて」の世界は天明の蕪村のねらひどころであつたに違ひない。しかも「木のまたの」に至つては近代アララギ派歌人も舌を巻くところの新鮮である。彼の心にある熊手の打ちかけ方は此等の句の上にさへ確乎と引かけられ、最う動かないところを暗示してゐる。

灰捨て白梅うるむ垣根かな

凡兆

骨柴のかられながらも木の芽かな

同

明ぼのやすみれかたぶく土龍

同

山陰やいつから長き路の露
すゝしさを朝草門に荷ひ込
灰汁桶の雫やみけりきりくす
しくるゝや黒木積む屋の窓明り

同 同 同 同

柴田筈浦氏の凡兆句集に據ると凡兆は元祿二年以前は加生といふ俳號を用ゐたことになつてゐる。予の生國加賀金澤の生れであるが、早くから京都に出て醫業を開いてゐる。何かの取巻きにされて下獄したが、「骨柴の刈られながらも木の芽かな」の句はその折の作とされてゐるが、例に依つて俳句傳説の一つであらう。出獄後は諸書に見えてゐるやうに行衛不明とされてゐて、芭蕉臨終にさへもその名が見えなかつた。正徳四年に變死したやうに云はれてゐるが、或は眞實かも知れぬ。ともあれ一代の大凡兆の句生涯は猿蓑を中心として風の過ぎ行くやうに消え終つてゐるのも、何か此の鬼才ある俳魂の最後として相應しい。端正な蕉門の子弟の中で彼の如き最後を爲したものは、尾張の杜國と二人だけである。彼の作品に見える逸才は彼の社會的生涯を誤つたものとして考へて見ても、首肯できる或物を持つてゐる。或は彼の逸才を以つてしても、發句など大したものではないからゐの、異常な才能を持つた人ではなかつたらうか？——醫を業としてゐたので或は存外な罪科に問はれたのかも知れない。

彼には透明な静さが何時も一抹の雲霧を曳いてゐるが、その新鮮さの澄んだ美しさの中に、他のものゝ入ることの出来ない彼の住む世界が出てゐる。「灰捨て白梅うるむ垣根かな」の素直な、玲瓏玉のごとき句境は、文章の如きさびはないが、さび過ぎて新しくなつた一面もない清さである。「山陰や」や「明ぼのや」の情景に彼はいつも心を凝らしてゐる。實に眼前の景に心を奪はれる人ではなく、永い間それを見凝めてゐる丹念鏤刻の人であることも分る。彼には不用意なことや、一寸した情熱に動く事や、輕はずみなどを押し凝らしてゐるところがあるのは、遠く他の門葉の迫かに及ばないところであらう。

「すゝしさを朝草門に荷ひ込」などは、さながらの青々しい籠の内のものが眼に見えるやうで、彼の心の生きの良さが思ひ遣られるやうである。彼の最もよき特徴を持つた世界であらう。しかも奈何なる素材でも彼の前では、その時間的なものでも手強く詠まれてゐる。「灰汁桶」の雫のごときは、また彼の心に程よく調和された「時間」の表現である。

三

芭蕉はどういふ風に見てゐたかは、猿蓑集の選をあつけた一事でも判明するが、それよりも彼の鬼才は芭蕉の心を驚かしてゐたことは實際である。下獄の後、芭蕉も世の常人のごとく凡兆

のことは口にしないやうであるが、或は、芭蕉歿後の下獄ではなからうか。さうでないとなれば、
愛の深つた芭蕉が彼のことを念はない筈がない、しかも蕉門の大立物である彼の行衛不明が芭蕉在
世の時であつたら、芭蕉は必らず彼のことを朝暮に口の端に上らせ惜んだであらうに。——或は芭
蕉病褥に就く前に下獄してゐたのかも知れない。それ故「花屋日記」にも凡兆のことが書いてない
ことで解る。しかも彼は門葉諸子とも晩年（變死前）には往復しないであつたものらしく、淋しい鬼
才あるものゝみが迫る、孤寂の境にゐたものらしい。その妻の羽紅も女流として聲名があり、仄か
にも可憐な春秋の作者であつた。妻に俳諧を許し其の才能を認めた凡兆は一つの情の深い、やさし
い男であつたらう。

春雨のあがるや軒になく雀

お隣の愛宕みやげや鬼柑子

羽紅
同

「春雨の」の女性らしい強い句がらに、羽紅らしいよいところが軒雀の聲に色を出してゐる。夫亡
き後は羽紅尼と云つて剃髪したらしく、柴田氏の凡兆句集後記によると、元禄十五年上木の太田白
雪の「三河小町」になには羽紅として出句してゐると書いてゐる。その頃なほ俳道に親しんでゐた
ものらしいことが解る。

片手わざに負ふ子あぶなき覆盆子哉

羽紅

迷子の親の心やすき原
霜やけの手を吹てやる雪まろげ

羽紅
同

「わが身よわく病がちなりければ髪けつらむも、むつかしと此春さまをかへて」と前書して「笄も
櫛もむかしやちる櫛」と詠んでゐるのを見ると病弱瘠身の女であつたらしいが、「片手わざに」迷子
の」の句を見ると子供があつたやうにも想ひ描かれる。分けて「霜やけの手を吹てやる雪まろげ」
は母親の愛情の外のものではなく、子供がなくては此句境の眞實が生れない譯である。彼女もまた
加賀松任の千代尼のやうに子供のあつた女ではなからうか？——そして凡兆の生國が金澤であれば
或は金澤の女であるかも知れない。予は此次の歸省には金澤出身の元祿俳人の事蹟を徹底的に調べ
たいと思つてゐる。若し凡兆が金澤を發つて京都へ赴いた時に妻があつたとしたら疑ひもなく羽紅
であらう。羽紅だとしたらその時代に俳諧に親しむ程度の文字が讀めるものとしたら、彼女は武士
の娘であるに違ひない。

呼かへず鬮買見えぬあられ哉

藪蔭の足輕町や残る雪

市中は物の匂ひや夏の月

砂川や夕がほのある屋ねの上

凡兆
同
同
同

凡兆の故郷である即ち予が故郷の金澤の風色が、最もよく凡兆に沁みついて表現されてゐる。凡兆ばかりではなく作者と故郷の風物の關係は却々に深い根を持つてゐるものである。「呼かへず鮎賣見えぬあられ哉」は宛然として冬の日の金澤風景詩である。城北の湯からの鮎賣は冬になると賣りに出て来るが、急激にまぎれて呼んでも聞えないで鮎賣が去つてしまふ情景がよく出てゐる。この地方の鮎賣りは大概磯濱の女らの冬の商ひである。予は此句に據つて今なほ湯から出てくる鮎賣女が、二百年前にも城下へ商ひに出てゐたことを知つたのである。郷土の作者といふものは或史實的考證に的確な例證を與へるものであることは、ひとり凡兆の場合ばかりではないが、自分にはこの句に依つて二百年前に逆戻りして思ふことができる便宜を感じた。

「藪蔭の足輕町や残る雪」の藪も足輕町も今なほ町を形づくり、小路となつて残つてゐる。わが凡兆も郷間の風致の中にゐたかと思ふと、新しさは一倍する。——氣のせいかな凡兆の作句は京都へ出たあとからも、なほ郷土を詠んだものが多いやうに思はれる。「市中は物の匂ひや夏の月」の幽かさ、何となく生活を沁みさせてゐる此の境地も、金澤であると云へば云へる光景である。「砂川や夕かほのある屋ねの上」と雖も、故郷らしい風趣が窺へるではないか。

凡兆があれほど新鮮な句作を爲し得たのは、何と云つても幼年時代を金澤のやうな自然風物に親しみ得る土地にゐた爲であらう。然も幼年時に見た草木風物はその人の生涯を通して、其人の中に

何時までも新しく青々とそよいでゐるものである。凡兆が何者よりも新しく細かい觀察を以つて一代を爲したのは、穩やかな山河の中に擁かれ育つた爲に外ならぬ。

北枝の家

芭蕉が元祿二年七月（おくの細道）金澤へ喰錫を駐めた前後は、加賀俳人の史録の中でも最も秀れた作者を出した時代である。殆、それ以後蒼虻、梅室に至るまで餘り有名の人はいない。一つは芭蕉が行き亘つてゐたため全国的に云つても元祿は俳句の最も旺んな時代であつたからであらう。金澤を中心にして野澤凡兆、その妻の羽紅、立花北枝、その兄の牧童、柳陰軒句空、秋の坊、山中温泉の和泉屋桃妖、木薬屋の宮竹小春、生駒萬子、村井塵生等がゐた。しかし凡兆北枝は群鶴を抜いでゐたことは勿論である。生駒萬子の如きは蕉翁三友中の一人であつた^たと傳へられてゐる。和泉屋桃妖は少年時代（おくの細道）に芭蕉を泊めて相識つてゐる。北枝は性來酒癖を持つてゐる。芭蕉も當時（貞享元年）大災に會つて甲斐に暫らく後塵を避けてゐたため、なほ身に沁みて火難の憂ひを知つたのであらう。

「池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさま／＼の苦勞いたし候へば御難儀の程察し申候さ

れども焼にけりの御秀作斯る時に望み大丈夫感心、去來文章も御作驚き申ばかりに候名歌を命にかへたる古人も候へばかゝる名句に御替被成候へばさのみをしかるまじくと存候知音たれたれ此度の難にまぬかれずや連中たしかなること不承候間短紙も不遺美能御傳達可下候以上。

北枝の手紙の句は「焼にけりされども花は散すまじ」の作である。まだ「おくの細道」へ三四年も間のあることであるが、もう北枝やその他の俳友とも親簡を遣り取りしてゐたものと見える。一面から云へば芭蕉は手づから凡兆北枝小春の徒を掘り出したと云つていいのである。殆、桃妖のごときは別けてその感が深いやうである。北枝は遠隔の地にあつたに拘はらず蕉門十指に數へられてゐたのも、餘程蕉翁の知遇を得たものであつたらう。山中温泉に芭蕉と一浴を試みたときも、北枝の飄逸ではあるが人慕はしい情はよく芭蕉を信じしめたに違ひない。

凡兆は中年後京洛に去つたが、北枝は殆その生涯を生國である金澤で暮した。職は研師だつたが刀劍の研工であつたことは勿論である。今こそ少數だが、金澤は城下だけに研師の職が多かつた。北枝の隣は酒屋であつたために飲酒家の彼がともすると杯を手離さなかつたことが首肯される。凡兆、萬子、千代尼、關更なども金澤を中心にした自然人情を詠んでゐるが、北枝は懶怠で風體などは構なかつたところ、城下を彷徨して童子の笑ひを買つたところなど、他の俳人とは違つた逸話が多かつた。ことに金澤の風物に入つてそれを己れの志としたことは、懶北枝の場合、なぜか沁々と

した素大な風流を感じさせるのである。

金澤は昔から武家ばかりの町家だつた故、自然侠客のやうな人物がゐない。佛教の早く行き互つたところだけに敵打のやうな殺伐な口碑さへ一つ二つしか遺つてゐないやうである。町家の妻女までが何となく鹿爪らしい行儀を見習ふてゐる。さういふ町家を俳奇行者としての北枝の彷徨は、元より風采のよからう筈がない。町家の人々から後指を差されて一幅の笑物になつてゐたことも首肯されることである。

北枝は昔は武家町の、いまの彦三一番丁に住んでゐたらしい。その家は現に今も残存つてゐるが高臺で川を距て、夢香山を見晴らせる位置にある。いまは幾代かあとの遺族が、古い俳書や、蘭更、芭蕉、北枝の幅を藏しながら暮してゐる。家の作りもいゝが果して北枝の住んだ家かどうか分らない。研師の座敷としては建具の結構なぞ立派すぎるくらいである。或ひは其處の地内に研場があつたのかも知れない、さう見た方が此の家の通りから引き込んだ構へから考へて見て、甚だ自然のやうである。兄の牧童も句作はあつたが、北枝の方が句技適に秀れてゐたやうである。

鶏鳴いて秋の日よはき曇かな

牧童

小家つゞき垣根くゝの黄菊かな

同

寝るまでの名残なりけり秋の蛸

塵生

ふり初て日半くゝの時雨かな

句空

栗いける砂の折敷にあられかな

同

小夜時雨身は何ゆゑにあたままる

秋の坊

思へども雜の歌かく扇かな

萬子

「うぐひすや谷の景色を庭の面」この北枝の句の風致や、兄の牧童の「小家つゞき垣根くゝの黄菊かな」の情景も何となく古い地理を物語つてゐる。去來、丈草は勿論、田舎でくらしした淡々、浪化上人、あるひは蕪村、一茶の句作の中にはその田舎の風景風俗の激しい新鮮さが流れてゐるのも、やはり物佗しい田舎に住みなれて、それが氣もちを綴つて出たものであらう。いまさら事新しく書くまでもないが、作者と田舎の關係は殆、根本的な心もちであると云つてよい。一茶の「次の間の灯で膳につくさむさかな」蕪村の「きりぎりす自在をのぼる夜さむかな」浪化上人の「間引菜の隣は菊の匂哉」など一つとして田舎の景色ならぬものはない。その間にあつて一茶のごときは境遇や人情の上から最も深酷に骨身に沁みて感じた人であつたらう。

世の中は鶴鶴の尾のひまもなし

凡兆

須磨にて

川水や汐つき戻すほとゝぎす

同

「五月雨に……」の如きは故郷の廢屋の感じが出てゐて餘蘊がない、世の中は、——の句は何となく心惹れる句で、今も昔も左うあつたであらう生活の忙しさ慌しさが、一羽の鴿の尾にあらはれてゐて興がある。

さむしろやめかご煮る夜のきりぎりす

北 枝

末枯や茶粕こぼるゝ草の垣

同

此の二面の風景と人情とは、二百年後とは思へぬ程の、いまま残る故郷の風色である。さむしろのの句の物寂しさ、秋開けた壁の冷たいありさま、末枯の身にしみる佗しさ、それに茶粕のこぼれた情景には、幽かな人情の温かみが漂ふてゐて懐しい句である。鍋の中にことごとと豆類獨特の相觸れ合ふ音を立てて、ぬかごの煮えるのは思ふても心佗しい。大方、牧童と二人で煮たものであらうか、それとも牧童の妻女が里がへりにでも出て行つたあとで、煮炊の仕ごとをしたものであらうか、一説に牧童といふ人は絶えず寝てばかりゐた人ださうである。朝寝、朝から午後まで一と寝み、ひる寝に宵寝といふ風だから自然北枝が煮炊することがあつたかも知れない。兄が左ういふふうであるから、弟の北枝も城下の名物俳人のやうに唄はれてゐたのも、強ち故無きに非ずである。よく似た兄弟である。同じ故郷の風色をよんでゐる關更も、矢張り夜長の私に故郷を思はせるに充分な

懇しさをもつてゐる。

魚釣りの刀さしけり萩の聲

關 更

七月や小草がくれに灯のともれ

同

大津繪の鬼もよごれつ櫓明り

同

これらの景情は悉く加賀地方の風俗でないものはない。足輕の魚釣り、町端の夜の家々、櫓火にほのめく大津繪の怪磊、わけて魚釣りの句が生きてゐる。

蝙蝠に手もともくらし油賣

北 枝

此の句は廂の深い北國らしい町の様子と、日暮れの迫つた油賣りが、たらりと垂らす油が夕明りに一筋に光る有様までが眼に見えるやうである。私がまだ少年時代まで油賣が夕方に早いところに、鈴を鳴らし乍ら呼び歩きしたものであつたが、いまは油の需要も無くなり呼び歩きしないらしい、私の記憶によると油賣りといふものは夜を思はせ、淋しい心を唆るものである。わけても昔は丹塗の櫃のやうな入れものを擔ふた油賣りは、妙に氣淋しいものであつたに違ひない。蚊喰鳥がすちかひに町をよこぎるのも、夏の夕ぐれらしい光景である。

池の星またはらはらとしくれかな

北 枝

根雪かと思ればおそろし風の音

同

根雪の句のごときは北國に住んだもの、何人も忘れることのできない風の音を思ひ起させるに充分である。山も家も鳴る底深い風がどこからともなく起つて来て、むしろ靜に皓々と照るやうに鳴るのを聴くと、或る沈んだ冬に對ふてゐる心が慄えて来る。冷たく搏してくる心もちである。身うごきのできないやうな氣もちだ。私もさういふ冬を二十幾年かを故郷で送つたものである。根雪といふのは、積つた雪の上に雪が新しく降りつもつたそれを云ふので、下積みほど凍えて石のやうに凝固してゐるのである。年を越えるのを云ふてゐる。

「何の實ぞたまたま見出す雪の門」はいまも町の裏通りに赤い實のほのめく有様を云ふのである。梅擬、南天、野茨、からす瓜などあるが、この句では一寸見つけない稀らしい實のことで、何の蔓か木かよく分らない實である。實際國の方には冬も赤い實のついてゐる木や蔓が多く、これはどこでも北國によくある遅い木の實である。菊いたゞきなどといふ小鳥や、黒つぐみ、目白が人家の庭さきに降りて来るのも斯ういふ赤い實に呼ばれてくるのである。そして雪の上にその實を啄んで殻を零してゐる。北枝のころもさうであつたかと、昔懐しい郷色の幾片かを手の上に眺めるやうな氣もちである。

芭蕉は北枝によく手紙を書いて、附合の注意などに、「附合十七體別紙に記進候初心には見せ被申

まじく候術の叶ぬうちに此味を付んといはし却つて一句も調ず附意もしれぬ事に成るものに候又むづかしきものなり」と云つてゐる。又次ぎの便りには「其許同行においては十人にもまさり力おほえ候事に候」と云ひ、「萬子、牧童、秋の坊、句空、小春などの英雄へも能々御達したのみ存候」と、旅に北枝を誘ひ乍ら北枝への信頼をあらはしてゐる。

此の一通の手紙を見ても北枝を始め加賀の俳人が芭蕉の心の中に、重い存在を置いてゐたことが肯かれる。兄牧童へも元祿三年七月に手紙を書いてゐる。

隱士秋の坊閑居御訪珍しく得芳意大慶仕候(略)大火の跡いまだ萬々御心も靜なるまじき候(略)拙者儀山庵秋至候ては雲雪に痛候而病氣に障り候故近日出庵いたし名月過には何方へなりとも風にまかせ可申と存候。

近日出庵とは石山の奥の幻住庵で此處には四月から九月まで芭蕉がゐたもので、「世の中から離れたい」望みを心に食ひ入らした時代である。芭蕉は四十七歳になつてゐたが牧童も同年くらゐであつたらう、北枝は四十歳を出たか出ないところであらう。五十一歳で屬曠についた芭翁の晩年に近く「雲雪に痛候而病氣に障り……」云々の手簡は、その心のいたみまであらはしてゐる。

北枝と秋の坊とは絶えず句論争ひをしてゐたが、芭蕉が元祿二年に來たとき二人は仲たがひを中止したさうである。秋の坊が幻住庵に一二泊をした時に風流の隠者だと云ひ、その道のことを話し

て、

やがて死ぬ氣しきは見えす蟬の聲

芭蕉

の一句を示してゐる。

柳陰軒句空の庵で泊つた芭蕉は、句空の芭翁を思ふこと去來に劣らざるを見てむつまじく物語つ

たさうである。

ちる柳あるじも我も鐘を聞

句空

藤咲て庵のやうになかりけり

芭蕉を中心にした加賀俳人の擡頭は、その以前からであつたらうが、「奥のほそ道」が鬱然たる力

を爲してゐることは争へない、それ以後物に記すに足るべき俳人を數へることのできぬのを見ても

解るやうである。

池の星またはらはらとしぐれかな

北枝

この句は恰もしぐれの季節である郷土の景色を餘さず寫してゐる。その閑かさは鋭い冬が淵のやうな池水にうつる星の明りに見出されてゐる。恐らく北枝の句の中でも秀れてゐる句である。私は郷里にゐるときに能くかういふ光景に接したが、頭に殘るすごみを持つてゐる句である。手法に象徴的な深みもある、名物俳人であつた北枝とは云へ、心の底に沈んだ考へを有つて絶えず四季の移

り變りに心に向けてゐたことが解る。凡兆のねらふたところも矢張り北枝と同じい北國人のねらひであつたのだ。加賀俳人の双壁は何と云つてもこの二人であつたらう。

道記

この稿を終へてから金澤の俳友桂井未翁氏から「艶賀の松」といふ故俳書を得たことを知らして來たが、之れは貞門の山茶花友琴といふ人の追悼句集で、友琴は芭蕉來錫の時に貞門を固守して會はなかつたらしい、その中に、

かまきりの虚空をにらむ殘暑かな

北枝

といふ句がある。友琴と北枝と交遊があつたかどうか分らないが、北枝の句として珍らしい發見であらう、恰度折よく北枝のことを書いてゐた矢さきであるから附け加へて置く。

丈草と去來

凡兆の手固い健實な作句は蕉門の逸品であるが、何と云つても蕉門の双壁は丈草と去來の二人であらう。僧丈草の風貌は蕉門の中でも迥かに秀でてゐる。之加も蕉門を代表する練え、門葉中の老實な厚みのある唯一人であると云つてよい。芭蕉は丈草を評して「此僧此道にすゝみ學ばゞ人の上にたゞんこと月をこゆべからず。」と云つてゐるのも、よく蒼古の丈草を知るもの言葉である。

丈草は單に蕉風を受け繼いでゐるばかりではない、芭蕉の風格の中から割れて出たほど、諸々の芭蕉のさびしを受け受けてゐる。芭蕉も心ひそかに丈草には慇懃な或る尊敬さへも有つてゐたやうである。臨終の芭蕉が丈草出來されたりと云つて「うづくまる藥の下の寒さかな」の句を賞めてゐるが、事實はどうあらうと句技の秀でてゐる彼の、常に芭蕉から受けてゐた挨拶でもあつた。

丈草の沈潜な枯淡は去來にはない、芭蕉を信じる事神の如くであつた去來は、その歴代の父祖に武士の血統を引いてゐる彼だけに、忠愛の道に傍見もふらないところは、一味の情熱家であるとは

云へ蕉門屈指の士である。いづれが芭蕉の右手か左手か知らない、しかし此二人は人間としても、また作者としても芭蕉の心に頼まれてゐた人物であり、彼らもまた師翁の心に熱い信頼を得てゐるものであつた。

寡黙な丈草の面影には尾張犬山時代の武士の風貌を有つてゐて、一見、その心の確さが表情づけられてゐた。「涼風にきゆるを雲のやどりかな」の一句を残して飄然と弟に家を譲り故郷犬山を去つて佛乘に歸した禪客としての丈草の前生涯に、どういふ蹉跌があつたかは自分は知らないが、そのさびと云ひ、たちの善さと云ひ、作品の上では去來の敵ではない、老練と云ふよりも心の坐り方が何時も定つてゐる。

雪曇身の上をなく鳥かな

丈草

此の句境の一端にも、蕉風を後代に譲り渡すだけの、後繼者の資質と老實を以つてゐる。或意味で丈草去來ほど蕉風を濁らさずにゐたものは少數ない。凡兆北枝も左うであつたが、彼等はひたすらに師翁の心を心として生活してゐたからである。芭蕉歿後は一石一字の法華經を淨寫して己が心の保養としてゐたことも、此僧の場合は單なる逸話ではない、湖南粟津龍ヶ岡に見すばらしい茅庵の垣を結んで、自ら佛幻庵と云ひ、師翁を念ふの日の多かつた彼は、何處までも僧丈草としての佛を有つてゐた。その心は蕉門の何者よりも芭蕉に近く、また何者よりも溫雅親切であつた。芭蕉の

信じ方の強いだけ彼は芭蕉自らの血統を流し込んだと云つてよい程である。芭蕉は安心してその蕉門の咎を丈草法師に委せたと云つてよからう。

片屋根の梅ひらきけり烟出し

丈草

芭蕉翁の墳にまふで、我病身をおもふ

かげろふや塚より外に住ばかり

同

時鳥啼や湖水のさゝ濁り

同

稻妻のわれて落るや山のうへ

同

行秋や梢にかゝる匏屑

同

芭蕉翁の七日々々もうつり行衰き無名庵に寓して

心地さへすぐれず去來が許へ申送る

同

朝霜や茶湯の後のくすり鍋

同

水底の岩に落つく木の葉かな

同

二

丈草の道は芭蕉の際立つた新鮮をも求めなければ、試みをこゝろむ危さも経験しないで、ひと色の静寂さで徹つてゐる。野心や危氣や街氣も見ることができないかはり、和やかな落着きと、常に

落莫たる風情を述べてゐる。「片屋根の梅ひらきけり烟出し」の情景には穩かさには徹してゐる客觀の句がらがある。かれに客觀の句の多いのは彼の心の住む世界の靜さが類の無いためであらう。

「かげらうや塚より外に住むばかり」の人生觀には諦め切つた一面の人生が物おごそかに無表情なまでに現はれてゐる。此の無表情の表情の數奇に至つては彼が幽玄の限りをつくしたと云つた方が適當である。芭蕉を思ふの情、師翁への答へられない淋しい會釋がつましく出てゐて、何とも云へず幽邃ではないか。

丈草の嘸み込む自然なり自然裡の大景であるところのものは、彼の吐き出しとなると縮つた句境になり、どういふ大景と雖も把握されて壓しちぢめられて纏つてゐる。「時鳥啼くや湖水のさゝ濁り」でも「稻妻のわれて落つるや山のうへ」など、美事な嘸み込み方である。しかも「さゝ濁り」の利き方に至つては、遂に蕉門の一冠の長たるものを嚴かに持つてゐる。寫實を重んじた芭蕉の心もやはり此の一點にあつたことは云ふまでもない。其角や嵐雪が作句と子弟の養成に江戸で蕉風後期の旗上げをしてゐる間に、丈草は默然として佛門にその日を暮してゐたのである。彼には蕉風の爲に天下の人氣を得る野心なぞあらう筈がなく、また求めて旗上げを芭蕉のためにする必要もなかつたのである。

芭蕉歿後の天下は亂れてゐたことは當然である。支考の空論、其角の豪奢等は漸く一城の主の死

を追々に心あるものに嘆かせてゐた。許六が去來に宛て、師翁死後の俳壇を以つて芭蕉道を潰す

ものとして憤慨久しくしたのも無理もないことであつた。唯一人、丈草の黙々として師翁の心を汲んでゐる姿は、去來の清境温藉の性質と相俟つて最も芭蕉道をあやまらなかつたものであらう。生前たのみにしてゐた芭蕉もその清い心根には、地下にあつて微笑みを漏らしたことであつたらう。「水底の岩に落つく木の葉かな」の沈潜の句境は、僧丈草の全生涯のしをりであり、閑かな心意氣であつたに違ひない。彼の心は常も一葉の落ちつく水底のやうに静寂で、何物にも觸れないで澄み透つてゐた。「まづ和歌の徳たる事、誰か仰がざらん、上つ代より傳へ來りて人の心を重とする言葉、その誠よりせめらるれば、鬼もあら男も頸をたる、正直なり。」と「詩歌俳諧辯」に云つてゐる。何かを道破してゐる氣概を持つてゐる。「寝ころび草」には「すでにかく生れ來て、ものうき世の中に、いかで此身の心まかせならんや。」と云ひ、世に處する己れの諦念を消息してゐる。かれの諦念は、元々その佛道からと、そのさびしい心根からと、も一つ佛道の中で鍛へた幽寂からとの三調子を持つて固まり渾一されてゐたのである。

ほかほかと朝日さし込む炬燵かな

丈草

彼は病弱であつたために飽迄佛諸道の戦ひをしなかつたのではない、彼は左ういふ派手なことが嫌ひだつた。

「當冬は持病氣指出候事もなく、もはや此身の程も急にやり可申とも存せざるほどの事よと、居住の事もますます落付、之迄の庵地買切りで一たん餘りの所にて候、先は所の住人となり申候、此身は一定不住の覺悟ながら、病身さうもならず……」と、内藤常右衛門あてに手簡を残してゐる。己の住居の中に己を守る彼は、孤獨に住むために世間との交渉をも經てゐる苦勞をしてゐる。「一定不住」の覺悟はしてゐても、元祿の昔にもさうは行かなかつたのである。ここに生活の纜が結ばれてゐるではないか。病身さうもならざる彼が心の用意おさおさ怠り無かつたことを思へば、丈草もまた一人となる前に人生の何員かを語んじてゐた様である。また語んじてゐなければならなかつたのである。

三

應々といへど敲くや雪の門

去來

丈草は評して、この句不易にして流行の正中を得たりと云つてゐる。自分はこの流行の調の中にある句を好んでゐない。丈草の評は當時正確を得たものであるかも知れぬが、正鶴の批評ではない。丈草凡兆北枝嵐雪其角と數へ來ても、その孰れの作者にも去來は特に際立つて秀でてゐないやうである。彼の作句の光榮が、何故あれほど貧弱な萎びたものであつたか、それにも拘はらず丈草と並

び稱されてゐたのであつたか、その大名は實力と添はなかつたことは何故であつたか、自分はそれらに永い間疑ひを持つてゐる。彼は名門の出ではあり風貌堂々としてゐたこと、温雅端正であつたことなどが、作句の外に或人格を持つてゐたのではないか？ 温厚な人格はそれ自身で魅力を放つてゐるものだからだ。向井去來の重きを爲した所以は、その作句ではなからう。その一瞥人に與へる重厚の面影、武士だつた彼の巖丈な資質の中にあるもので、人々を尊敬させずに置かぬ或物を持つてゐたためではなからうか。許六も評してその人格端正を賞してゐる。芭蕉は彼を勘らず依怙最負したに違ひない。

芭蕉は丈草を以てする時は尊敬を加味した友情であつた。俳乍ら、去來には度外れて愛してゐたやうである。北枝の場合よりも最つと敬愛してゐた。何よりも芭蕉は彼を信じ彼は師翁を敬ふてゐた事、それらの二つの感情は何時も人間的に結ばれてゐた事などが、芭蕉をしてより深い愛情を呼び起した所以のものであらう。それに彼は何よりも忠實そのものであつた。芭蕉は作句から子弟の間に入つて行くのが例であつたが、彼の場合は作句よりも直ぐさま友情恩愛の道を辿つたらしく思はれるのである。

秋はまづ眼に立つ菊の蒼かな
蕙の羽もかいつくろいぬ初しぐれ

去來
同

こがらしの地にも落さぬしぐれかな

同

「嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり、五とせ六とせを經ぬれど、このみも持來らず……」と書き「みづから落柿舎の去來と書きはじめたり。」と記してある。落柿舎は茶室を持つて來て建てたもので相當風雅なものであつたらしかつた。芭蕉は嵯峨日記に記して、その庵舎のありさまをつたへてゐる。

「予は猶しはらくとむべきよしにて、障子つゞくり、葎引かなぐり舎中一間なる所伏處とさだむ……」と記し、別れに際して「明日は落柿舎を出んと名残をしかりければ、奥口の間一間を見めぐりして……」と名残を惜んでゐる。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

芭蕉

去來はその落柿舎に譬言して、「一、我家の俳諧に遊ぶべし、世の理屈をいふべからず。二、朝夕かたく精進を思ふべく、魚鳥を忌にはあらず。三、速かに灰吹きをなすべし。煙草を嫌ふにはあらず。四、隣の据膳を待つべし。火の用心にはあらず。」と書いてゐるところを見ると、芭蕉の何物かを傳へてゐるところがある。これは芭蕉の或種類の氣もちをそっくり模倣たと云つてもよい程である。俳乍ら、彼の端正さは此壁上の數語に失笑させるやうなところが無かつた。

彼と丈草とはその氣風に相通じるものを持つてゐたため、風雅の道ばかりではなく人間同士とし

ても深い友情があつた。

懷二僧丈草一

○寒き夜や思ひつゞける山の上

去 來

作句に秀逸の少ない彼の中でも友情を思ふほどほととの風情が現はれてゐるよい句である。晩年丈草の死に行き逢ふた彼は、その同じい年の秋にあえなく病歿してゐる。よほど丈草の死が心と體とに應へたものらしい。仲の善いものの片方が亡くなると、あとに残るものも月日を急いで亡くなる場合が多いものである。

丈草を哭す。凡十年の笑は三年の恨に化し、その恨は百年の悲を生ず、惜しみて

も猶名残おしく、此の一句を手向て、來しかた行すを語り侍るのみ。

なきかたや春や三とせの生別

去 來

と、哭き悲しんでゐる。去來を識るものは芭蕉を除いては、丈草一人と云つてよいからゐであつた。丈草もまた去來を信じ翁亡き後の唯一の友垣であつた。しかも丈草も相當生活に事缺くこと少く、去來もまた相應の餘裕があつた。これらの世間並の生活の禮儀が行はれてゐることが、一層彼らの友情を深く徳のあるものに固めたのである。去來を思へば丈草を思ひ、丈草を呼ぶに及んで去來を念ふのも理であつた。しかも丈草が何事にあれ去來の兄分であつたこと去來自らも然らう考へて

ゐたことも實際であつた。

丈草は芭蕉を偲ぶにさへ沈着であつたが、去來は萬腔の情熱を動かしてゐたと云つてよい。それは何よりも彼が論客であつた證據である。許六との俳諧問答に「師教月々に疎く、我意日に生ず、たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、かへつてその血脈をうしなふものあらん。しかれども今の世にあたつても、秀逸をさだむる人誰ぞや……」と激越してゐる。また、「蕉門の諸生萬人、老をもつて論するときは、老師にこえたるもの多し、いまださびしをりを得たるもの一人をきかず、多くはこれを思はざるの人也。」と云つてゐる。彼の脈々たる情熱は蕉門に較べる者がゐないくらいである。

柿ぬしや木ずえはちかきあらし山

去 來

放すかと問はるゝ家や冬ごもり

同

おとゝひはあの山越えつ花さかり

同

「柿ぬしや」は落柿舎の吟詠であらう。「放すかと問はるゝ家や冬ごもり」は、落柿舎が人の口の端にかゝり、賣り家のやうに思はれる心もちを出したもので物佗しさが出てゐる。去來には妹の千子といふのがゐた。芭蕉もこれを愛してゐたが、去來の妹を愛してゐることは伊勢紀行に詳しい。温藉の人、去來が妹を愛したことは不思議ではないが、彼らの落莫として情事に疎遠な生活を念ふと、優しい妹千子の人情愛を感じるのである。

秋の夜も寝ならふ旅のやどりかな

去 來

彼が興じ乍ら妹をかへり見ると、千子もまた一吟を物するのであつた。

長き夜も旅草臥に寝られけり

千 子

と、兄弟がいたはり合ふところや、世の辛酸の外にゐるところは、秋夜に背中する温かさである

伊勢までのよき道づれよ今朝の雁

千 子

辰巳のかたに明る月影

去 來

と、興しながら行く、質素な去來の股引姿を描いて見ると、兄思ひの千子が寄りそふて頸をかたげ乍ら、何か問ねながらゐる姿も自ら眼に見えるやうである。凡光の妻の羽紅も發句に名のあるものであるが、去來の場合は何かさびしく清い感じである。嵐雪の妻は猫が好きで嵐雪はきらひであつた。妻が猫を愛することを嫌ふ嵐雪を最後に好かせるやうにした妻の心づくしが美しく思ひ出される。去來と妹の場合は蕉門の逸話としても一點の汚れもない美しさである。丈草にしても去來にしても芭蕉と同じい女性に縁の無いさぶしい生活であつた。(一説に去來に妻あり子供が二人あつたといふ)その中に去來の千子がゐたことは、しの竹のしげみに梅擬の紅綴る枝を見るやうに奥床しい感じであつた。彼らの孤獨は餘りにいたいたしく、また餘りにその點では超人間的であつたやうである。併し彼らのその苦行こそ後代にその心と身とを重からしめた所以でもあるのだ。

その伊勢紀行では去來には珍らしい「白川の屋根に石置く秋の風」の秀逸の作句を残してゐる。かういふ些かの情愛の道草ではあるが、彼を思ふ時は自ら妹千子を思はねばならぬ。

支考の「葛の松原」に「おとゝひはあの山越えつ花ざかり」の句を「この句三四年も早かるべしと阿叟の申され侍るよし、今は四とせばかりにもならぬ、なつかしき君子もあれや、吁」と悼んで書いてゐる。そして芭蕉がこの句は一兩年早いやうである。今は聞く人もないだらうと云つた。後に芭蕉は杜國と吉野行脚に出かけては日々吟じながら、この句を思ひ出したさうである。師弟の情また盡されたりと云ふべしである。彼は去來抄に記して、「その後此の句を語り、人もうけとりぬ。」と云つてゐた。

丈草去來の双壁を蕉門から取除くことは、假りにさうすることさへ出来ない蘊我たる皆である。彼らは芭蕉の地ならしをしたり後片附をしてゐるものである。芭蕉がよき門葉を集めることを得たのは、自ら彼の徳の致すところに違ひはなかつたが、それよりも人を處するに自ら心定つてゐたため、又愛情を以つて人々を惹きつけたためであらう。も一つ云へば彼の膝下に集つたものは、すくなくとも彼に近い英才を持つてゐることに據り、芭蕉を選び得たのであらう。

嵐雪

何時か京橋の或る賣立に行つたときに、嵐雪の短冊が一枚出てゐた。銀扇の女持ちのものも出てゐたが、大方座興にでも書いたものであらうと思つた。短冊の句は

・ 葩あけてくゝたち買ん朝まだき

嵐雪

といふのだつた。

くゝたちは莖立のことで、冬も春に近いころの菜の葉莖の莖の立つたのを云ふたのであらう。わたくしの國でくゝたちは茹でてないのを云ふたらしく、朝まだきがそれを證據立ててゐる。葩は門口で素人やの、上の方へあげる板戸のことであらう。その板戸には潜り戸がついて、一間入口に二枚の戸が上から卸すことになつてゐる。大方、朝早くおみおつけの中に放つためにでも、門前を呼び歩くの呼び込む景色で、どうも春さきに近いころのやうに思はれる。朝まだきと云ふたところに何かしら温さがこもつて見える。すがすがしい鶯のこゑも聴えさうな朝まだきである。

まつ風の里は靱するしぐれかな

嵐雪

この句は嵐雪の中でも好きな句である。

まつ風、靱、しぐれ、さういふ道具立は眼につくが、しかし棄てがたく、すぐにその景色に心をうつさせるに充分である。

あか／＼と日はつれなくも秋の風

芭蕉

晩稻の寛ほそり聞ゆる

光清

靱をするのも雨では廣い農家の土間で、うす暗い中に二三人のひとが働いてゐる。山べに近いと斷することはできぬが、松林のところどころにあるやうな氣がする。そして「あか／＼と日はつれなくも」の句とは、ちやうど一ト月半くらゐ遅れた季節で、その季節の別れ目がかうして見ると瞭然と分るやうである。嵐雪は蕉門でも何か絶えず新しく出直す氣をもつてゐた。そのため句に或る硬さが見出される。「うます女の難かしづくぞ哀なる」のごときは、あまりに説明的で、一句のうちには潜むものがない。芭蕉の句には一つ／＼何か表現の片陰にひそんで、匂ふてゐる。一派の野心をひそかに抱いてゐたかれを自分は壯とはしてゐるが、そのためかれの句がよくなつたとは云はれない。芭蕉死後のかれ、前後のかれ、自分は江戸座の其角と仲のよいかれを何となく丈草去來にくらべ、その心に入つて見てもかれらに感じた枯寂を感じない。おそらく芭蕉もその心には何か微か

に感じてみたであらう。

黄菊白菊その外の名はなくもがな

嵐雪

其角はこの句を讚嘆して、自分が生涯かかつてこの秀詠を得ることができない、さう云つて若し菊の句を乞ふものがあつたときには師翁の

岡女家にて

白菊の目に立て見る塵もなし

芭蕉

の一句と嵐雪の此の「黄菊白菊その外の名はなくもがな」しか書かなかつたさうである。いまでも有名な句であらうが、まつかぜの里は扱するしぐれかなにくらべたら、一片修辭の小才より外に取り立てて云ふほどのものではない。

「或時集」に序して「花に對して信なくんば花うらみあらん、句は是に習ふべし、花に問は花かたることあり、姿はそれにしたかうへしと或時教ゆ。」と題してゐる。去來が許六に手簡した俳諧問答はあまりに烈しすぎるが、去來の銳鋒は嵐雪を突いてゐることは云ふまでもない。「翁遷化の時東武の其角嵐雪桃隣等東山に於て追悼の會を爲す、かれ蕉翁の門人の數に加はりて着座す、今書をつくりて、翁をあざむける、最も憎むべきのはなはだしきや。かれが心操をかへりみるに、翁いますときは、先師を賣つておのれが浮世のたよりとし、先師歿し給ひては、また先師を賣て、初心のとも

がらを今は先師に勝りたりと欺き……」と罵り「我これがため、辟耳を切て、邪口を裂かんと欲す。」とまで激昂してゐる。嵐雪其角は黙々として師の意表に出るやうな暮しや作風の轉期を劃したことは實際である。師思ひで盲目的だと云つていい去來の怒るのも無理はない。しかし、「花に對して信なくば花うらみあらん。」と云ふ嵐雪の心は、去來が邪道視したるにも拘はらず可憐にあらはれてゐる句が多い。

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し

嵐雪

鴨おりて水まで歩む氷かな

同

なき名のみ辰の市とはさわげどもいさまた人を賣るよしもなし

人丸

鶯の宿とこそ見れ小摺鉢

嵐雪

きりぎりす鼠の巢にて鳴終りぬ

同

秋風のころろごきぬ細簾

同

筆や兒の鰯のうつくしき

同

蕎麥うつて鬢鬢白し年の暮

同

「鶯の」句は温さが董の句ひのやうに仄かにしてゐる。いまの時間で云へば午前の十時すぎくらゐで、朝の間の餌を摺り忘れた鉢であらう、青みを交ぜた芳ぐはしい鰯の香のする餌のあとも偲ばれる。「蕎麥打つて」の句はたけの高い凛としたやうな姿である。「鈴鴨の」やうに何か氣質に嚴霜の氣

もちに近いものを窺はせてゐるのは、さすがである。すこしのたるみなく一と聲に詠じたところもよい。さういふところは何か別派新途のにらみを心に横へたわざもの、の氣質が出てゐる。たとへ芭蕉をしのぐことはできなくとも、さういふ氣質に心を置いてゐたことは認めなければならぬ。去來丈草の徒はもとより師表を出ようとはしなかつたが、それに心のあつたことは嵐雪の場合には認めなければならぬ。藝道のことでは師表に出た者は古來渺ない、曉臺が蕪村を超越ることができなかつたことも當り前である。しかし其角だけは芭蕉のそとにゐたことは肯かれる。嵐雪に至つては遂に氣質を句にとどめたくらゐであらう。「蕎麥打つて鬢髭白し年の暮」は堂々たる幅のある句である。

枯木の美

自分は四季を通じて枯木の姿を愛してゐる。枯木は網の目のやうに透いて美しい。雨の中では鐵のやうに組み合つた健康な色を、櫻や柳は艶めかしく得も云へない優しさが表はれてゐる。その反り工合、反つて上に登つた形、流れて曲つた調子、それらの股や枝の尖にある鋭どさは、冬になると感情的に私に影響する。感情の中にあつて當然あゝいふ形や美しさをもつてゐるものが、樹木の姿に變つて表現されたやうに思はれてならない。

木の股のあてやかなりし柳かな

凡 兆

凡兆の狙ひは此一句のなかに表はれてゐる。靜かに沈み切つて匂ふたあざやかさは、全く樹木のものでなくて、樹木以上に美しくさへある。今更に自然を讀へることは可笑しいが、それが自分のやうな種類の人間にはどうにも美しさに堪へ難いのだ。假令へば穂のある雜草なども此頃は枯れ切つて、莖は筋ばかりになり埴輪色に變つて、それで折れないで鋭く立つてゐる。淋しい美しさは芭蕉の作品を讀むのと同じい氣持になる。冬は最後に凡ゆるものを今一度美しい骨格に組み立て、見

せ、自分らを反省させて来るやうである。自分らも冬の中にあるものを最つと掘り返して見たいのだ。

骨格

文章去來許六支考の徒は世に隠れなき文章家であるが、ひとり一茶だけは文章家の一步前の小説家の佛を持つてゐる。風流韻事の文よりも人生のむづ痒さにふれたものに一茶の小説家としての腕が匿されてゐるやうである。韻事を遣るに家庭のいざごさに惱まされた俳境も、鶴下りて一倍さむき野菊かな、の句境をねらうた一茶であることも忘れてはならぬ。一茶が小説家として仲々に味をやる文章はその中身のなま／＼しさに、かなり突き込んで書いてゐる。「……人離れたるあさら井のかたはらに、髪のかや／＼かなる女の紅のたすき今様にかけなして、さそふみづあらばとばかり打ちはひつゝ、たゞひとり絲を染侍りき。かしこに咲る杜若のたくひ折からの風情を添へ、雲井をかける時鳥も是がために戀ひわたるかと思はれて、又なくあだ／＼しき面さしにぞありける。……えせ法師がやけ野の雉子のぬす立足してとあるもの陰に忍びよりひたすらそなたをかいまみけり、やがて女もうなづきつゝそこら見廻して口をむく／＼して淡めくものを掌にはきて卵の花咲る垣の間よりさし出しぬ。法師その淡めくものをべら／＼舌先のある／＼ばかりなめづりつゝ、日ごろのねがひ

かなひたるけしきして、おのれもかたのごとくさし出しぬ。女も法師が手のひらのあはをおいらかにすゝりけるうちに、主の聲のほのかにしければ、女のめくばせに法師はひそくと逃てけり……。』
現今の文章小説としても新味があり、後れたものではない。「卯の花咲る垣の間よりさし出しぬ。」などの手法は發句の手法そつくりであるが、また入念な文章でそつがない。

次の間の灯で膳につく寒さかな、この一句を見ても一茶の骨格が既に小説的であることが解る。一脈つんざいてゐるものに暮し向きの辛酸がひびいてゐる。一茶の句は殆ど家常茶飯に材を得て、俳味にして餘りに苦々しく皮肉で辛酸である所以である。一茶がなぜ後世をたのむ小説を書かなかつたかは兎に角、隠然たる小説家の骨格をもつてゐたことは過りないことである。

清閑

何か知ら頭に好きなことを考へさせ頭を遊ばせて置いた方がいと考へてゐる。さういふ時にわたしは發句を作る。發句は頭を遊ばせてくれるからである。頭にくすりな仕事である。

新しい古いなどは關はない。唯思ひついたまゝ書いてゐる。發句でも一つ書かうかと思ひついた時には、ちよつとした幽遠な氣もちと隣合せてゐるやうで、全くほの／＼とした心もちになるやうである。わたしのやうな粗雑短慮ものがこんな優しい心がけをこれ迄になく身にしみて思ひつくやうになつたのも、永年文筆に練れた鍛えが私にも乗り移つて來たのであらう。

この間も滞郷中の發句を蒐めて見ると、四季を通じての自分の暮しがうなづかれたので、長い小説や雜筆の必要がないやうにさへ思はれた。しかしせち辛い渡世のためには發句ばかり書いてゐられないやうな氣もした。全く發句でさへも一年間の作を併せ讀むと、その折々の暮しが振り返り見られ短い形が尊くもありがたいものに思はれた。この發句でさへもの、さへさへこの場合つかひたくないやうな氣がする。

發句でも陶器でも、またわたし一人にとつては詩もまた幽寂より以外にあたひを感じなくなつた。寂しさの底を搔きさぐつて指にふれるものがあれば、わたし自身のものである。が、その他のものにはあまりわたしのがらにあはない。わたしは自分のがらだけを知りたいつもりで、まだ他人の嗤笑を買ふながらあるとしても、わたしのがらさへあれば足りるのである。活動寫眞は面白いがその感銘は時とともにうすれて行き、却つて一句の發句をかけたときの季節や境遇が身に沁みて考へ残つてゐるのも、やはりがらに合つてゐるせゐであらう。

發句は清閑の藝術である。わたしのやうに仕事のひま／＼に一脈の清風に涼み見るやうな氣もちで作る人もたくさんあらうが、こんなに頭にくすりな仕事はない。十八九歳のころは發句で一流の人物になりたいといふ考へをもつてゐたが、とても二流までも行けさうもない。いろいろな藝術もあるが發句をもつて寂境に達するといふことは、中々むづかしいことらしいのである。形が短いだけに中身も純一でなければならぬ。二十年句作を勵んでも遂に寂しさの何物をも窺ひ知らないひとは、やはり一句をも世にも自分にも残すことができないだらうと思つてゐる。發句をかくほどの人物の文章は自ら姿はちがつても一世の名文家であるにちがひない。それを機會なくして書かずに終つても嚴然と一作の發句がこれを天下に示すことゝ一般である。單なる發句でもその背景が大きく深い文章に根をもつてゐることは古來の俳人に比べ見ても首肯れることである。

漱石の發句

漱石は子規の直系であるだけ子規張りの句が多い。小説評論では甚しく大人であるが、發句には日常の暮しに親しみを起させる句がある。端嚴であつたらしい生活振りも、植物天然に對しては佗しい子供ぶりを詠み合してゐる。その子供ぶりには僕をして漱石もやはりそんなところに心を向けてゐたかなと思はせる。

吾栽糸し竹に時雨を聴く夜かな

草庵の垣にひまある黄菊かな

なつかしき土の匂や松の秋

漱石の發句は後進澄江堂の洗練がなく、詠み捨て書き忘れたるやうのものが多い。あれ程の人物がなぜもつと鍛えなかつたかと思ふくらゐである。漢詩の方がよほど秀れてゐるが、發句は玉石を雜せてゐて甚しい。そこへゆくと澄江堂龍之介の句は、年は若いが一粒づつよりぬいて碯手をゆるめてゐない。しかし漱石の秀れた句は、すば抜けてゐるのは有繋に漱石が凡手でないことを思はせ

る。

初冬や竹切る山の鈍の音

冬枯れし山の一角竹青し

さら／＼と栗の落葉や鷓鴣の聲

初冬の句の背丈、冬枯れしの句の眼光、栗の落葉の句の清澄三誦してなほ飽かぬ句である。句に呼びかける構や形、どこか重みを持つてゐるところは、遠く蕪村の流れを汲んでゐる。蕪村の背丈がおぼろげに佇んでゐるのは、子規が蕪村直系であるからであらう。きりぎりす自在をのぼる夜寒かな（蕪村）の背丈を引伸ばしたものは、初冬や竹切る山の鈍の音とも云へよう。冬枯れしの句にも丁々たる音があつて好い。「董のやうな人に生れたし」の句は若い時の吟詠であらうが、そのをさない心が好ましい。

漱石は文人として嚴格に過ぎたやうに思へるが、しかし會うて膝を交へ俱に短日長夜を語るに興趣自ら深い人であつたらう。いつか書齋から見える庭の砥草の茂りがあつたり芭蕉の古い株があつたりした寫眞を見たことがあるが、さういふ一石一草にも心うごいた人であつたらうと思慕の念ひを持つやうになつたが、いまは自分には發句と漢詩とが何よりも素直な、世間を向ふに廻してゐない漱石翁が偲ばれて床しい。

句解

春の句抄

一 田螺の句

僕の發句をつくる時は大ていひまな時に多い、僕のひまのあるときは凡そ物悲しい時が多いのである。春のくれがたの如きには一そう閑暇があつて、かりに發句をつくるとしても決して春のくれがたのごとき、つやのある夜の光景をうつし出すことができなくて、あるひは氷柱や炭や葱の句をつくるかも知れぬ。楽しみあつて發句にしたしむのはよいが大てい左うはゆかない、何か心配事やいさかひをしたあげく、そんな悲しみを紛らすために机に來て漂然と考へ込んでしまふ。さういふ時に發句はよい。

蕪村を讀んでゐて又喫驚した。發句といふものは芭蕉でも一茶でも、また凡兆でも、時々讀み直さないと佳い句を見落してゐることがあるものである。こんな佳い句があつたのかと思ふことがある。發句の方でも一ぺんくらゐ讀んでも却々佳い句を見當らしてくれないかも知れないのだ。何度も讀んでゐながら見のがしてゐる頁がきまつてゐるやうに見落してゐる。

芭蕉の「閑さや岩にしみ入蟬の聲」があるが、この蕪村の技法は却々しつかりとおさへてゐる。あまりに技法が堅苦しいために見劣りするが、末枝の苦しきでないことは勿論である。僕は何となく喫驚した。

蕪村は小氣味よい齒ぎれよい世界にゐて、豪放でもありまた繊細でもある。「出舟や蜂うち拂ふみなれ棹」の潤達な素材を何の句もなくやつて退けてゐる自在な達人である。これほど快活な人生觀をもつてゐる人はすくない、健康すぎるために「門に出て故人に逢ひぬ秋のくれ」などの世界まで、獵つてゐるのである。この人から見れば芭蕉は半病人のやうに悲しい、芭蕉が親父であれば蕪村はよき長男であるかも知れない、そしてまた子規は蕪村の孫に當る人も知れない、かういふやうに考へてくると、一茶は家出をしたやくざ息子かも知わからない、只、これらの人々のなかで芭蕉の老いの深いこと、姿や聲の遠いことが解るのである。

春の水山なき國を流れけり

蕪村

鶯の聲遠き日も暮れにけり

同

茶畑にきせる忘るる接木かな

同

蕪村の立體的な姿勢は漢文漢語の影響があり、ひとり蕪村の拓いた道ではないが蕪村によつてそ

の表出が完成されたと云つていいのである。自在なその表出はどういふ困難な素材に向つてもびしびしと竹刀の音を立てて、敵き落してゐる。「春の水山なき國を流れけり」の流暢な立體は、立體の句がしじみした味ひに缺けてゐることを裏書してゐない、却つてこの立體の畫布が立體であるために佳い句になつてゐるし、豊かな美しい春の水をあらはしてゐるのである。特に佳い句悪い句といふことのほかに、穩かなゆつたりした氣持を誘ふてくれる内容である。「鶯の聲遠き日も暮れにけり」は蕪村の技法が表面にあらはれてゐないだけ、それほど蕪村の最もやはらかい表出に充ちてゐる句である。蕪村といふ人の奥の奥には元祿の城があつて芭蕉調のさざなみが、ひねもす、ひたひたとよせてゐる。だからその表出や素材に芭蕉調をおびてくるときは、凡そ美ごとな成功をおさめてゐるやうであつた。家居の遠いところで絶えず疎林を去らないらしい鶯の聲が、こちらで忘れてゐる時分にもまだ啼いてゐて、さういふ長閑な光景のうちに春の一日が昏れたといふまでの句であるが、凡そ發句もかういふところが佳い句であるとしなければならぬのである。詩や小説は理窟をこねて批判されるやうであるが、わが俳道では只子供のやうに面白い句であるといふだけで澤山であらう。

蕪村の畫はうまいが結局下手物のうまさである。「茶畑にきせる忘るる接木かな」の生活情景は、生活が狭いために面白く營まれるのであつて、それ以上何も僕等は求められない。只、蕪村もかう

いふ詰らない句をも作つた人であるが、鶯の聲の句も作つた人である。皆が皆まで珠玉であるわけにゆかないことは、彼のごとき逸才を以つてしても失敗の句があるのである。

水に落し椿の氷る餘寒かな

几 董

酔てなほ眼すずしやさくら人

同

蕪村の門葉でも几董や召波は才物であつた。蕪村によつて天明調が高揚されたことは云はずと知れた門葉にそれぞれ立派な作家があつたために、天明の俳諧城が立つたのである。

元祿調が凡兆、北枝、其角、去來の二双壁と相俟つて爲されたやうに、几董のこの「水に落し椿の氷る餘寒かな」の格調は、蕪村によつて握りしめられたものをもう一度握つたやうな句である。そしてこれらの蕪村調の源に何と芭蕉調がのびのびと、春の山のやうに聳えてゐることか、――

陽炎に美しき妻の頭痛かな

召 波

春深く菫に透るともしかな

同

召波は几董を超える鬼才であつた。

句は蕪村の纏め方にならうて、結び目のゆるがぬほどに纏つてゐた。女のことを發句にうたふことは危険であつて、内容から失敗しやすいものであるが、召波はこの危ない藝當を一役まんまと演じ終せてゐるのである。陽炎の惱ましさに年頃の頭痛を配して、發句といふ狭い世界を一足飛び出

したところは、召波は只の二枚目俳人ではなかつた。天明の凡兆であるかも知れない。

「春深く菫に透るともしかな」の格調は、傑れた技法をこころえた俳人だけが持つ、氣合を内容に生かしてゐる句である。初五文字を深く吸ひ込んで、中七文字を齒のあひだにふくみ、結びつけてゐるのである。或る意味で蕪村時代は日本俳壇の技法の完成された時代であつて、芭蕉の主觀的技法をこの天明期で美ごとに客觀化してしまつた、やはり轉換期であつたのであらう。

二 厭世主義の人

春の夜はさくらに明てしまひけり

芭 蕉

枯芝やややかげろふの一二寸

同

ほろほろと山吹ちるか瀧の音

同

鶯を着て誰人います花の春

同

僕はこの頃芭蕉といふ人を何だか痛々しい爺さんのやうな氣がしてゐた。親切で病身で貧乏であつたためもあるが、何やら譯の云ひにくい、痛々しさが感じられてならなかつた。僕はこの爺さんのことを考へると、この爺さんは何で一生女房を持たなかつたのであらう。せめて女と暮してゐたらあんなにひとり合點な、陰氣くさい氣持をはらひ退けることができたらうと思ふのであつた。